１．“Culture”の定義

・批評・分析用語としての“culture”の意味

（出典：ジョゼフ・チルダース、ゲーリー・ヘンツィ編／杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』松柏社、1998 年）

＜引用 1＞

CULTURE　　文化、教養、カルチャー

文化という言葉は、現代批評において最も頻繁に使われるが定義されることが少ない言葉の一つである。この言葉を使って批評家と理論家が何を意味しているかはコンテクスト（文脈）で判断しなければならないことが多い。その結果、文化という言葉と結びついた概念は、不正確なまま広い範囲で使われ続けており、しばしば、かなりの混乱に至っている。

現代の理論的そして批評的言説において、文化という言葉は二つの明確な意味の間を揺れ動いている。社会科学、とりわけ、考古学と人類学において、文化という言葉は、普通社会の物質的生産のことを指す。しかし、歴史、文学研究、文化研究においては、この言葉は意味作用（signification）のシステムと意味生産を指す。この二つの意味の境界線は、必ずしもはっきりしているわけではない。なぜなら、歴史、文学そして文化研究のアプローチには、物質的生産と意味の生産が解きほぐせないほど絡み合っている[1]と考えるものがあるからである。（.....）

19 世紀ならびに 20 世紀初頭における文化に関する思想の最も有力な人物は、ヴィクトリア時代中頃の著述家マシュー・アーノルドである。1867 年の『教養（Culture）と無秩序』においてアーノルドが明言した説は、ほぼ 100 年のあいだ文学研究の主流を支配するような仮説の形成に役立った。依然としてアーノルドの影響が今も強く感じられると主張する現代の批評家もいる。アーノルドは、文化は「考えられ知られてきた最高のもの（the best that has been thought and known）」と定義できると主張した。この定義は多くの問題を巧みに避けており、その問題のうち最大のものは、「最高のもの」を判断する基準が何かということである。アーノルドにとって、そのような判断を行えるのは、公平無私で（disinterested）階級の利益とは関係がない知識人である。アーノルドが「局外中立者（alien）」と呼ぶこの知識人は、教育を通して社会のすべてのレベルに「文化」が伝わるように監視するのに貢献する。ひとたびすべての人々が文化に対して適切な仕方で近付くことができるようになると、無政府状態は回避することができ、物事の政治的秩序を暴力的に転覆する恐れなしにすべての人が自分の意見を表現できるようになる。このように、アーノルドは、「考えられ知られてきた最高のもの」に関する全員共通の意見を適切にととのえることによって、無政府状態を回避しようとする。（.....）

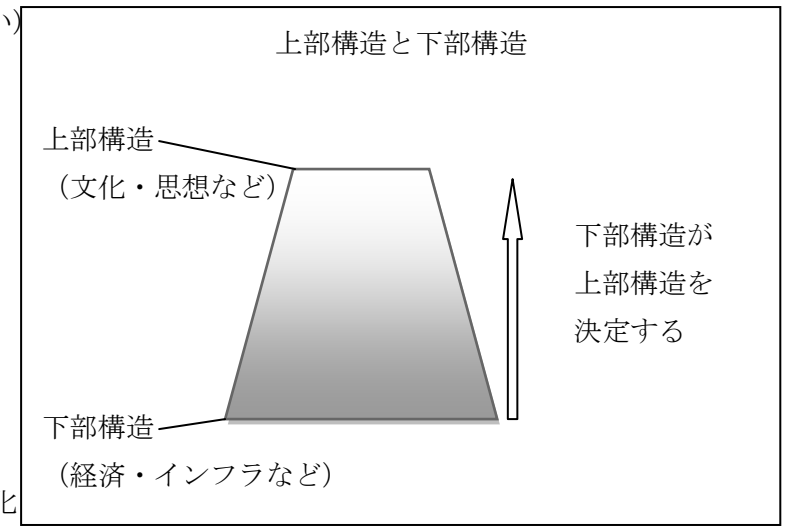
しかし、アーノルドの文化の概念にひそむエリート主義と（保守主義に至ると論じる人もいる）政治的静観主義は、リチャード・ホガートや［レイモンド・］ウィリアムズなどの後世の思想家によって批判された。依然として文化的現象は社会現象を理解するための方法と見なされていたけれども、ホガートとウィリアムズは、一般的には「考えられ知られてきた最高のもの」とは見なされなかったであろうような文化的生産物や出来事を解明し理解することに関心を持っていた。これらの別種の文化は、人びとの生き方や周りの世界の経験（そして理解）の仕方にかなりの影響を与え続けている、とホガートとウィリアムズは主張した。

マスコミュニケーション、とりわけ、テレビが身近なあらゆるところに存在するようになると、文化という言葉の使用法は、さらに変化した。今や、われわれには、支配的文化規範が広める趣味や感受性

に関する前提と必ずしも一致しない活動、姿勢、美的理想に近づく方法が無限にあるように見える。その結果、ハイブラウとミドルブラウとローブラウという文化の間にかつてあった明確な区別がだんだん曖昧になってきた。この曖昧化のために、現代の批評家は、しばしば、「文化」という言葉をポピュラー・カルチャーすなわち「大衆の文化（the culture of the masses）」の略語として使用する。この文化という言葉の用法は、多くの点において、アーノルドの意味とは正反対である。（.....）

「カルチュラル・スタディーズ（CULTURAL STUDIES）」と大まかに分類される［20 世紀後半にイギリスから広まった学際的文化研究の］アプローチは、ハイ（高級）あるいはロー（低級）という概念に基づく美的評価を避け、むしろ、美的活動がジェンダーや階級や人種やセクシュアリティなどの特定の文化的構築物[2]を強化あるいは阻止するさまに焦点を当てる。(123-4)

＊註 1　物質的なものと（物質的ではない）物事の意味の領域を区別する考え方は、マルクス主義的な「上部構造と下部構造（Superstructure and Base）」の区別（右図参照）に根ざしており、ウィリアムズらの議論は、そうした区別の批判的解釈の上に成り立っている。文化的事象にも、社会を構成する力を認める点で、右のような古典的二元論とは一線を画す。この授業では、例えば経済的条件がある文化の特徴を決定するケースと、逆に文化的特質がその社会の物質的特徴を決定するケースを、ともに見ていくようにしたい。



＊註 2　現在の文化研究では、これらのテーマに言及することが「お約束」になっており、用語を基礎知識として押さえておくことが要求される。これらのものが「文化的構築物」であるというのは、つまり、文化に「高級」「低級」（良いか悪いか）の区別がもともと備わっているのではないのと同じように、性差や人種の区分も、特定の文化の中で作り出された恣意的な基準にしたがったにすぎないということである。文化の中で生み出される様々な作品は、註 1 でも見たように、既にある具体的な現実を反映しただけのものというわけではなく、むしろそれらの作品によって、社会のありようや、文化の理解の仕方が変わることもありうる。なるべく先入観にとらわれず、様々な解釈を検討してみることが大切である。

・レイモンド・ウィリアムズによる定義

（出典：Williams, Raymond. *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society.* Revised Edition. New York: Oxford UP, 1983.）

＜引用 2＞

Culture is one of the two or three most complicated words in the English language. This is so partly because of its intricate historical development, in several European languages, but mainly because it has now come to be used for important concepts in several distinct intellectual disciplines and in several distinct and incompatible systems of thought. (87)

＜引用 3＞

We can easily distinguish the sense which depends on a literal continuity of physical process as now in "sugar-beet culture"[3] or, in the specialized physical application in bacteriology since the 1880s, "germ culture".[4] But once we go beyond the physical reference, we have to recognize three broad active categories of usage. The sources of two of these we have already discussed: (i) the independent and abstract noun which describes a general process of intellectual, spiritual and aesthetic development,[5] from C18; (ii) the independent noun, whether used generally or specifically, which indicates a particular way of life, whether of a people, a period, a group, or humanity in general. . . . But we have also to recognize (iii) the independent and abstract noun which describes the works and practices of intellectual and especially artistic activity. This seems often now the most widespread use: **culture** is music, literature, painting and sculpture, theatre and film. (90)

＊註 3　「テンサイ（砂糖大根）栽培」　＊註 4　「細菌培養」

⇒もともとは土地を耕して（cultivate）作物を作ること、という物質的、具体的な事象を指していた。

＊註 5　「教養」や「洗練」とでも訳せる。前述のアーノルドの場合は、こうした肯定的な価値判断の意味合いが強い。

⇒現代では（ii）、（iii）の意味が主流であるとされている。この授業でも、基本的にはそれらを採用するが、古くからの用法に見られる、「育て上げ、より良いものにする」という含意も、念頭においておきたい。なぜなら、（何をもって「より良い」とするかは別として）文化は常に変化し続けるものであり、そうした変化にどんな意味があるかをつぶさに見ていきたいからだ。

＜引用 4＞

It is clear that, within a discipline, conceptual usage has to be clarified. But in general it is the range and overlap of meanings that is significant. The complex of senses indicates a complex argument about the relations between general human development and a particular way of life, and between both and the works and practices of art and intelligence. It is especially interesting that in archeology and in *cultural anthropology* the reference to **culture** or **a culture** is primarily to *material* production, while in history and *cultural studies* the reference is primarily to *signifying* or *symbolic* systems. This often confuses but even more often conceals the central question of the relations between "material" and "symbolic" production, which in some recent argument—cf. my own *Culture*—have always to be related rather than contrasted. (91)

⇒引用 1 の記述は、ウィリアムズのこうした議論を参考にして書かれている。下線部の違いを簡単に説明すると、例えば近年若い女性に人気のある携帯小説（携帯電話で受信して読む小説で、近親相姦やレイプなどのセンセーショナルなテーマが繰り返し使われる）について考える場合、それらの作品の内容の良し悪しや意味を掘り下げるアプローチが、ここでいう"*signifying* or *symbolic* systems"（意味生産または象徴のシステム）を読み取る試みにあたる。一方"*material* production"（物質的生産）に着目する場合は、むしろそれらの作品がどう商品化され（映画化など）、どういう流通形態を持って、どれほどの経済効果をあげているかという側面を考えることになる。ウィリアムズの立場は、文化唯物論（Cultural materialism）と呼ばれ、これら二つは別々に存在するのではなく、分かちがたく結びついて

いると考える。

２．「文化」の区分――高級文化／大衆文化の二分法

・市場経済、商品化と大衆文化の形成

（出典：Huyssen, Andreas. *After the Great Divide: Modernism, Mass Culture, Postmodernism.* Bloomington: Indiana UP, 1986.）

＜引用 5＞

It was actually the historical prerequisite for the twin establishment of a sphere of high autonomous art and a sphere of mass culture, both considered to lie outside the economic and political spheres. The irony of course is that art's aspirations to autonomy, its uncoupling from church and state, became possible only when literature, painting and music were first organized according to the principles of a market economy. From its beginnings the autonomy of art has been related dialectically to the commodity form. The rapid growth of the reading public and the increasing capitalization of the book market in the later 18th century, the commercialization of music culture and the development of a modern art market mark the beginning of the high/low dichotomy in its specially modern form. This dichotomy then became politically charged in decisive ways when new class conflicts erupted in the mid-19th century and the quickening pace of the industrial revolution required new cultural orientations for a mass populace. (17)

⇒最初に純粋に高尚な芸術と、それには劣る大衆の文化があったのではなく、市場経済の勃興や芸術の商品化という歴史の中での社会構造変化のあとに、その両者が区別されるようになった。イギリスのケースを考えれば、それまでは王族や貴族とそれ以外という二種類の人々しかいなかったところに、中産階級、つまり大衆というグループが新たに出現した。その大衆を社会階層の中に適切に位置づけ、アーノルドのいう無秩序を回避するために、「高級／低級」という二分法的な構図が持ち込まれたのである。私たちはよく、芸術作品が堕落して商業主義に走るという言い方をするが、そもそも「大衆文化」なるものが、市場経済、商品化、商業化なくしては生まれえなかったのである。したがって、文化を構成する様々なものの中から芸術の分野だけを取り出して、それを資本主義と対立するものであるかのように扱うのは、歴史的に見ても誤っていることになる。

・ホルクハイマーとアドルノによる「文化産業」批判

（出典：マックス・ホルクハイマー、テオドール・アドルノ著／徳永恂訳「文化産業――大衆欺瞞としての啓蒙」『啓蒙の弁証法』（原著 1947 年出版）岩波文庫、2007 年、249-347 頁）

＜引用 6＞

都市建設計画によれば、個人は衛生的な小住宅の中で、いわば自立的存在として、いつまでも生きられるはずだったのだが、逆にますます個人は、その敵対者に、つまり全体的な資本の力に、屈従する方向に向いつつある。住民たちが仕事と娯楽を求めて、生産者兼消費者として、都心に吸い寄せられるにつれて、住宅の細胞は、すき間なくきっちり組織された複合体へ結晶していく。こういうマクロコスモスとミクロコスモスの目もあやな統一は、人びとに彼らの文化のモデルが何であるかを告知する。それは普遍と特殊の誤れる同一性[6]である。あらゆる大衆文化は独占態勢の下では同一であり、その骸骨、つま

り独占によって大量生産された概念的骨格が、正体を現し始める。もはや指導者たちは、その正体を隠すことに腐心したりすることはまったくない。容赦なく力をむき出しにすればするほど、その力は強化される。映画やラジオはもはや芸術であると自称する必要はない。それらが金儲け以外の何ものでもないという真理は、逆に金儲け目当てにつくられたガラクタを美化するイデオロギーとして利用される。映画やラジオは自ら産業と名乗り、映画会社や放送会社の社長の収入額が公表されると、出来上がった製品の社会的必要性についての疑念など、どこかに吹っとんでしまう。(252)

＊註 6　やや分かりにくい表現だが、ここで言われているのは、個人がそれぞれに独自の趣味や関心に応じて自分の意思で商品を選び、消費活動をしていると考えるのは間違いだと言うこと。「文化産業」はそうした個人の意志の力を弱め、文化・社会活動を平均化して、誰もが同じように考え、行動するように仕向けるという悲観的な見方が提示されている。

＜引用 7＞

今日ではもう芸術作品は、政治的スローガンと同様、文化産業によって適当に外装をほどこされ、本来なら抵抗感を持つ聴衆に向って割引して流し込まれる。芸術作品を享受することは、民衆にとって公園に散歩に行くように手軽なものになる。しかし芸術作品の本来の商品的性格[7]が消失したということは、自由な社会の生活の中でそれが止揚されたというのではない。今や芸術作品の文化財への下落を防ぐ最後の歯止めさえ抜け落ちてしまった、ということを意味するにすぎない。文化のバーゲンセールによって教養特権が廃止されたからといって、べつに大衆は前には不当にも入ることを許されなかった領域に導かれるわけではない。現存の社会的条件の下では、教養特権の廃止によってもたらされるのは、かえって教養の崩壊であり、野蛮な断絶関係の増大以外のものではない。19 世紀や 20 世紀の初めの頃までは、劇を観たりコンサートを聴くために金を払ったものは、少なくとも払った分に見合う分だけの敬意を、出し物に対して払ったものだ。(.....) 芸術は、まだ一般市民にとっては、値段の高さなどからしても高嶺の花だったのである。それももう過去のことだ。(.....) 文化産業においては、批判と同じように尊敬も消失する。つまり批判は機械的な鑑定に、尊敬はたちまち忘れ去られる有名人への崇拝に、とって代わられる。(325-7)

＊註 7　つまり外部の物事とは無関係に、すぐれた芸術作品が本来持っているとされる価値のこと。

⇒これらの著者（特にアドルノ）は、エリート主義的と批判されることが多い。上の引用 5 のハイセンも、はっきりとアドルノに批判的なスタンスをとっている。もはや求心力を失った、高級芸術へのノスタルジーをもって 20 世紀アメリカ文化を批判するアドルノのやり方は、歴史認識を誤っているとハイセンは言う。しかしアドルノのために付け加えておけば、彼が大衆文化を痛烈に批判するのは、ナチスによる大衆操作と文化の破壊から逃れてアメリカに亡命した経験があるからだ。手放しに大衆とその文化を良いもの、正しいものとして称えることは、ポピュリズムやファシズムを呼び込む危険があるとアドルノは警告しているのである。今や「文化産業」という用語はアドルノとは無関係に使われることも多いが、高級なものと大衆的なものという区分が有効ではなくなった現代では、「文化産業」を否定するのではなく、産業との関わりの中で、文化がどう変化・発展するのかを考える方向に、批評の主流はシフトしてきている。

３．異文化へのまなざし――“representation”の問題

（出典：Hallam, Elizabeth and Brian V. Street, eds. *Cultural Encounters: Representing "Otherness."* London: Routledge, 2000.）

＜引用 8＞

Emphasis has shifted from a concern with representation[8] as an objectifying process which subordinates the "other", towards an investigation of the significance of representation in the formation of multiple, negotiated subjectivities and social identities. (4)

＊註 8　表象、代表、代弁などと訳される。「住民を代表して（represent）議会で発言する」「少数民族の声を代弁する（represent）」などのように、政治的な意味合いを込めて用いられることも多い。美学においては、ある物事を別の形（映像、言語など）で再現することを意味する。しかし文化研究で最も盛んな用法としては、自分（self）が異文化に属する他者（other）にあるイメージを貼り付けて、それによって相手を理解したり、あるいは支配したりする行為を指す場合である。例えば「黒人は人間以下である」とか「ユダヤ人はすぐに裏切る」などのように。英語を通して異文化理解を図る場合に注意すべき点は、資料となるデータにひそむ西洋中心主義的なバイアスに気をつけることである。

＜引用 9＞

Understanding cross-cultural representation entails not only a self-reflexive and historical awareness of academic modes of production, but also an analysis of the ways in which "others" have themselves translated and subverted "Western" discourses. Without denying inequalities of power or the homogenising tendencies of global processes, attention needs to be paid to the ways in which dominant representations are incorporated, resisted and reinvented. . . . Representations are examined, throughout this volume, with an emphasis on the contexts in which cultural meanings are constituted and negotiated. Probing the content and context on representations, and the ways in which these are disrupted and reconstituted, the authors trace the cultural politics of Europe's encounters with Islam, Brazil, India, Australia, and Africa. Here the analysis of representation as content and representation in context, necessitates a close examination of cultural codes, conventions and practices as well as the social and political relations which sustain or marginalise them. However, the notions of content and context become increasingly problematic with the recognition that geographical, social and conceptual spaces are becoming increasingly hybrid. (4-5)

⇒しかし、この引用にあるように、表象される側である他者がその表象を逆手にとって、西洋の自己に対して反撃するという点も見逃せない。この授業で扱う英語圏の諸地域では、特にイギリスという中心に対して、異文化表象の土俵の上でどう戦いを挑んできたかという歴史によって、その文化的特色が形作られてきた。本国イギリスには劣るという表象の内容（content）は同じでも、それぞれの地域ごとに異なる社会的・地理的その他の条件（context）によって、様々に特色の異なる文化風土が形成されてきた。私たち日本人にとっての異文化としての英語圏がることはもちろん、その英語圏の内部にも文化的差異があることを、授業の中で確認していきたい。その際、引用終わりにある"hybrid"（異種混淆）は重要なキーワードとなるだろう。つまり、イギリスならイギリス、オーストラリアならオーストラリアと、各地域ごとに一つの明確に区分された文化が存在するのではなく、それらの中にも多種多様な文化が混在しているということである。したがって、地域ごとの区分はあくまで便宜的なものとして、常に

異なる地域の間の関係にも注意を払いながら、調査を進めていきたい。

４．多文化主義への批判――アメリカの例

（出典：Michaels, Walter Benn. *The Trouble with Diversity: How We Learned to Love Identity and Ignore Inequality.* New York: Henry Holt, 2006.）

＜引用 10＞

Indeed, the whole point of going to Harvard, from the standpoint of the poor, would be to stop being poor, whereas Asian Americans, African Americans, Latinos, et cetera, presumably don't want to stop being Asian American, African American, et cetera. What justifies affirmative action[9]for poor people is that it has nothing to do with diversity; it's supposed to help poor people go to college *despite* the fact that they're poor. And what makes the notion of economic diversity[10] look ridiculous is also what makes it so attractive: it reassures us that the problem of poverty is like the problem of race and the way to solve it is by appreciating rather than minimizing our difference.

We like diversity and we like programs such as affirmative action because they tell us that racism is the problem we need to solve and that solving it requires us just to give up our prejudices. (Solving the problem of economic inequality might require something more; it might require us to give up our money.) This attitude helps to account for the continuing popularity of racism as a target of student activism and the more general phenomenon of the "antihate" rally as a mobilizing force. As long as the presumed object of our hatred is difference, everyone (we're all a little racist or a little homophobic) can feel responsible for the problem and proud of their contribution to the solution. (89-90)

＊註 9　積極的差別是正措置。差別を受けてきた人々（黒人、女性など）の雇用・教育・政治参加などを積極的に推進すること。企業や大学に、あらかじめ特定のグループの為の枠を設ける（quota system）などして、差別意識をなくすだけでなく、目に見える形で差別をなくそうと試みる。これによって、いわゆる WASP 男性らが逆に差別を受けることになる（reverse discrimination）との批判もなされた。

＊註 10　経済的多様性、つまり金持ちもいれば貧乏人もいるということ。アメリカで多様性といえば、普通は人種・エスニシティー・宗教・性的嗜好などに応じて様々な文化が存在し、それらは平等に扱われなければならないという理念を指している。ここでは、アメリカ人の「多様性」好きが、経済的格差という、本来多様性とは関係のない分野にまで広げられ、混乱した状況を生んでいることが指摘されている。

⇒多様性の考えに基づけば、人種の違いをなくすのではなく、その違いを認め合うことが良いとされる。そらが経済的格差に応用できないのは一目瞭然だが（ひとが貧乏であることを認めても、相手にとっては何ら利益はない）、アメリカでは現実にそうした混同が起きているという。アメリカでは多様性そのものが一種の商品と化していると指摘する批評家もいるほどで、多文化社会の一員として生きることが、まるでゲームに参加するかのような感覚で捉えられている。「人種差別はアメリカの大きな問題である」とか「（ハリケーンによる被害に際して）ブッシュは人種差別主義者だ」ということは、アメリカの内部からアメリカ文化を表象することである。その表象が正確であるかどうかは別としても、本当に緊急を要する課題（貧困など）から人びとの目をそらさせるために、そうした表象が機能しているのは間違い

ない。英語圏の文化を調べる上で、表面的なイメージで納得するのではなく、その背後の事情にも踏み込んでいく必要があることを示す、ひとつの事例である。

５．情報技術（IT）と文化の生成

・自由な（無料の）文化と許認可制の文化

（出典：Lessig, Lawrence. *Free Culture: The Nature and Future of Creativity.* New York: Penguin, 2004.）

＜引用 11＞

At the beginning of our history, and for just about the whole of our tradition, noncommercial culture was essentially unregulated. Of course, if your stories were lewd, or if your song disturbed the peace, then the law might intervene. But the law was never directly concerned with the creation or spread of this form of culture, and it left this culture "free."[11]The ordinary ways in which ordinary individuals shared and transformed their culture—telling stories, reenacting scenes from plays or TV, participating in fan clubs, sharing music, making tapes—were left alone by the law.

The focus of the law was on commercial creativity. At first slightly, then quite extensively, the law protected the incentives of creators by granting them exclusive rights to their creative work, so that they could sell those exclusive rights in a commercial marketplace. This is also, of course, an important part of creativity and culture, and it has become an increasingly important part in America. But in no sense was it dominant within our tradition. It was instead just one part, a controlled part, balanced with the free.

This rough divide between the free and the controlled has now been erased. The Internet has set the stage for this erasure and, pushed by big media, the law has now affected it. For the first time in our tradition, the ordinary ways in which individuals create and share culture fall within the reach of the regulation of the law, which has expanded to draw within its control a vast amount of culture and creativity that it never reached before. The technology that preserved the balance of our history—between uses or our culture that were free and uses of our culture that were only upon permission—has been undone. The consequence is that we are less and less a free culture, more and more a permission culture. (8)

＊註 11　この文章では、"free"は法的規制を受けず「自由である」ことと、商業に関わりを持たず「無料である」ことの両方を意味する。

⇒法律や市場経済とは離れて自立した（autonomous）文化というものも確かに存在する。情報技術の進歩は、そうした文化のあり方を根本的に変えてしまうとされる。つまりローカルで見えにくい"free culture"が、インターネットを介してより大きな文化の領域と接点を持つようになると、それらが商品としての価値を持つようになり、法的規制の対象にされ始めるということである。今までは縁遠かった異文化へ容易にアクセスできるようになることは、多くの利点はあるものの、それと同じくらい大きな問題をはらんでいる。

＜引用 12＞

There has never been a time in our history when more of our “culture” was as “owned” as it is now. And yet there has never been a time when the concentration of power to control the *uses* of culture has been as unquestioningly accepted as it is now. (12)

⇒商品価値を見出された「文化」は、企業や個人の所有物とされ、そのことに対して、私たちはますます疑念を抱かなくなっている。例えばヒップホップは、誰の文化なのかということを考えてみるとよい。それはもはやアメリカの都市に住む黒人だけのものではないし、アメリカだけのものでもない。それは娯楽産業の所有物として商品化されてしまったということもできるし、特定の地域やグループには縛られない、グローバルな文化となったとみることもできる。地域ごとに文化を区分することの難しさが、こうしたポピュラー・カルチャーの分析を通して実感される。

・ケーススタディー――ファイル共有と音楽産業

（出典：Lessig, *Free Culture*；マック・ランダル著／丸山京子訳『エグジット・ミュージック――レディオヘッド・ストーリー　増補改訂版』シンコー・ミュージック、2004 年）

＜引用 13＞

The appeal of file-sharing music was the crack cocaine of the Internet’s growth. It drove demand for access to the Internet more powerfully than any other single application. It was the Internet’s killer app—possibly in two senses of that word. It no doubt was the application that drove demand for bandwidth. It may well be the application that drives demand for regulations that in the end kill innovation on the network.

The aim of copyright, with respect to content in general and music in particular, is to create the incentives for music to be composed, performed, and, most importantly, spread. The law does this by giving an exclusive right to a composer to control public performances of his work, and to a performing artist to control copies of her performance.

File-sharing networks complicate this model by enabling the spread of content for which the performer has not been paid. But of course, that’s not all the file-sharing networks do. As I described in chapter 5, they enable four different kinds of sharing:

A. There are some who are using sharing networks as substitutes for purchasing CDs.
B. There are also some who are using sharing networks to sample, on the way to purchasing CDs.
C. There are many who are using file-sharing networks to get access to content that is no longer sold but is still under copyright or that would have been too cumbersome to buy off the Net.
D. There are many who are using file-sharing networks to get access to content that is not copyrighted or to get access that the copyright owner plainly endorses.

Any form of the law needs to keep these different uses in focus. It must avoid burdening type D even if it aims to eliminate type A. The eagerness with which the law aims to eliminate type A, moreover, should depend upon the magnitude of type B. As with VCRs, if the net effect of sharing is

actually not very harmful, the need for regulation is significantly weakened. (*Free Culture* 296-7)

＜引用 14＞

ツアーが進むにつれ、ある事実が明らかになってきた。『OK コンピューター』発表からの 3 年間で、メディアの技術革新は音楽ビジネスを取り返しがつかないほど大きく変えてしまっていた。レディオヘッドのライヴ会場には録音機材が密かに持ち込まれ、新旧すべての曲が録音される。しかもこれまでと大きく違っていたのは、そのように違法に録音されたブートレグの行方だ。それらは MP3 オーディオ・ファイルとして符号化され、E メールもしくはナップスターのようなファイル交換ネットワークを通じて、ひとりのファンから別のファンへ、そしてワールドワイド・ウェブ上へと高速に広がっていく。コンサートの数時間後には、コンピューターとモデムさえ持っていれば、世界中のどこからでも誰もがオン・ラインでアクセスできてしまうのだ。

その間、『キッド A』のマーケティング・キャンペーン――むしろアンチ・マーケティング・キャンペーンと言う方が正しいかもしれない――が展開されていた。長年のコラボレーターであるスタンリー・ドンウッドらと協力してバンドが作り上げたのは、一連の blips と呼ばれるアルバムからの断片を切り取った摩訶不思議な 15 秒アニメーション映像群だ。ブートレッグ音源と同じくこれらの映像もオン・ラインで出回ったが、この時はむしろバンドと EMI 側がそれを奨励した。

レディオヘッドのレーベルがこのような戦略を支持するとは驚きだった。というのもこの頃の音楽業界はまだインターネットに関連している、というだけで何事にも慎重になっていたからだ。ファイル・シェアリングの開発により、インターネットはこれまでにないスケールで著作権違反が展開されるツールとなってしまい、レコード会社の存続そのものを脅かしかねなかった。その結果、ほとんどのレーベルは彼らの所有権（すなわちレコード化された音楽）を守ることに必死で、ファイル・シェアリングをマーケティング手段に利用することに気は回らなかったのだ。

しかし EMI は目を付けた。レディオヘッドの非公式ファンサイトはいまや数百を越え、新しい技術発展に対する欲求はとどまることを知らない。彼らをうまく利用して、熱狂の発信源にすればいいのだ。そこで EMI は『キッド A』のプロモーション用ホームページを立ち上げた。そこではファンのサイトのためにアートワーク、blips、そして情報が提供され、世界中のレディオヘッド・ファンと即時にリンクできる messaging buddy というサービスもあった。5 匹のクールな熊のキャラクターが点滅するページから入っていくメンバー自身のサイトは中でも一番人気があった。99 年 12 月 9 日、ほとんど予告なしに、レディオヘッドはオックスフォードシャーのスタジオからの生映像をオン・ラインで流し、その中で初めて“ナイヴス・アウト”が演奏された。この手の webcast（映像データをストリーミング・メディアとしてリアルタイムで提供すること）の先駆けとなり、書き込みが途絶えることのないメッセージボードを始め、さまざまなアイディアを凝らしたレディオヘッドのドットコムは常に大渋滞状態となった。

こうしたウェブ上での活動は『キッド A』のリリースに寄せる期待を一気に押し上げた。テクノロジーによって、ファンがバンドと今まで以上に直接的な接点を持てるようになった今、もはや“普通の”メディア・ルートはそれほど重要ではなくなってきた。それを確信できたこと、そして『OK コンピューター』の過酷なプロモーション・サイクル以降、燃え尽き感を引きずっていた彼らは、ここでひとつの

大きな決断を下した。『キッド A』からのシングルは切らない。ビデオは一切作らない。プレスとの取材も最小限にとどめる。パブリシティのプロセスがいかに人為的であるかを強調するがごとく、雑誌用に撮られた写真の彼らは、あえて悪鬼のごとく残忍か、ありえないほどハンサムに修正された。アドバンス・コピーは作らず、視聴は視聴会のみに限る。(.....)

「ナップスターが(『キッド A』に)手を出せないようにしたかった」とキャピトル・レコードのマーケティング副社長ロブ・ゴードンは言う。「ところが(ネットに)アップされた。それで興奮と熱気に拍車はかかったか? もちろん、だよ」。興奮はそのまま引き継がれ、『キッド A』は 10 月にリリースされるやいなや英米両チャートで初登場第 1 位となり、それまでのアメリカでの成績(『OK コンピューター』は最高が 21 位)を大きく上回った。市場の需要から身を引き、プロモーションをほとんどすべてファンの手に委ねたことが、逆説的にレディオヘッド最大のセールスに結びついたのだ。(『エグジット・ミュージック』 341-3)

資料１（出典：ジョセフ・コールマン著／渡辺順子訳『いろんな英語をリスニング』研究社、2008 年）

１．英語の訛りと話し言葉の特徴

A. Interview with Caroline P., age 45 (England)

I lived all over the place.[1] My father was in the Royal Air Force,[2] so I lived in parts of England, sort of the middle parts of England, then when I was four we moved to Cyprus for three years. So we lived in three different places in Cyprus, and then moved back to England and lived in north Wales for a short while,[3] and then moved to the south coast to an area called Dorset. Which is a seaside, which is Weymouth, which is a seaside town. After secondary school, OK, I went to a college in Oxford and studied hotel management, and after that, then I worked in, actually I went, and then I went to America and worked for a short while in Atlanta. And I lived with a family and helped, like an au pair[4] type role, so that was fun actually, just then they took me on holiday, yes we went to different parts. Yeah, but it was good, but was very different to[5] England, very different. Bigger. I mean where I lived was a little seaside town with small roads, and in America, well, the bit I was in was wide roads, everything very, very spaced apart,[6] so obviously very different to Japan as well, everything is very cramped in.[7] Actually, what really struck me as a 22 years old, was I'd speak English and the Americans would go,[8] "Wow, you're English, well speak to me, just speak to me at all." Well, what do you want me to say? "Well just say anything, just say anything." 'Cause it was just that English accent that they wanted to hear. So, I did feel kind of like everywhere I went, everybody was like,[9] "Oh speak to me! Speak to me!!" It was a novelty to start with, and after that, if you go into a shop, and somebody says "Oh, you're English!" Like, "Oh no, just leave me alone!"

B. Interview with Eric, age 36 (the United States)

When I was about 12 years old, my uncle, who speaks Japanese and Chinese, introduced me to the concept that there were these languages called Chinese and Japanese in which, well, both of which used kanji. And so he started teaching me some rudimentary[1] kanji. He taught me the kanji for "ocean," and I thought, that's fascinating. You know, he explained how the little, you know components of this kanji make up a word. I thought, "Wow, that's really deep." And then when I was 14, I came across[2] a book about Zen Buddhism, yeah, by a Vietnamese guy, actually, but I started becoming very interested in Zen. So that was the second kind of wave, or second or third kind of element of my interest in Japan. OK, then, around this time, my parents were getting divorced. Actually, had been divorced at that time. And I had this idea that Asian people in general, including Japanese, kinda[3] have, since nobody among them seemed to be getting divorced, I thought, well, you know Asians, they've got this marriage thing figured out,[4] so I should learn from them about how to, you know, maintain a family or whatever, 'cause they've got it figured out. So that's another element to this. Finally, when I was 18, I started doing karate. And so, all these things kinda started piling up, and so, it was just a kind, Japanese karate with a guy who came from the countryside of Japan, in New York I met him in New York. So these things all came together, and these were my, together, all the reasons why I just basically had to come to Japan.

註　Interview with Caroline

（1）**all over the place** あちこちに　（2）**the Royal Air Force** 英国空軍

（3）**for a short while**　ごく短い期間。アメリカ英語では“for a *little* while”が普通。

（4）**au pair**　海外から留学してきて、ホストファミリーの家で、家事や子守などの仕事をする代わりに食事と宿泊を提供してもらう若い女性。

（5）**different to**　アメリカでは“different from”が一般的だが、英・南ア・豪などではこう言う人も多い

（6）(to be) **spaced apart**　（例えば、ある町とその隣町が）かなり離れているということ。アメリカの空間のだだっ広さに驚いて、母国イギリスと比較している。

（7）(to be) **cramped in**　ここでは、日本はアメリカとは逆に狭い場所に家などが密集していて、窮屈だと言っている。

（8）**go**　(= say)　人が「しゃべる」、生き物が「鳴く」、機械から音が「鳴る」などの場合に使える。

（9）**I did feel kind of like everywhere I went, everybody was like, . . .**　「どこに行ってもいつも皆が～みたいなことを言う」ほどの意味。不完全な文で、途中で流れが変わっているが、話し言葉では良く起きる現象。“Like”（日本語言えば「～みたいな」か）というつなぎの言葉は、この人の口癖かもしれない。アメリカ西海岸の若い女性が何にでも“Like”を付けてしゃべることで有名。

解説：キャロラインは典型的な早口のイングランド訛りで話す。かなり聞き取りにくい部類に入ると思われる。ポイントは、単語同士の音がつながって、ひとかたまりになって聞こえることで、一語一語クリアに聞き取ることは、ネイティヴ・スピーカーでも難しいかもしれない。内容的には、イギリス訛りの英語がいかにアメリカでもてはやされるかというくだりに注目したい。アメリカの出版物では、“British accent”の前にしばしば“sexy”などの形容詞がくっついていると、知人から聞いたことがある。映画『ラブ・アクチュアリー』の中の、女にもてたいがためにアメリカに渡るイギリス人青年のエピソードは、こうした事実を面白おかしく描いている。

註　Interview with Eric

（1）**rudimentary**　初歩の　（2）**came across** (come across)　（偶然）～に出会った

（3）**kinda**　(=kind of, sort of)　「ある種」「ある意味」といったニュアンス。特に深い意味はなく、話のテンポをキープするために挿入されている。彼は他にも“you know”を多用している。日本人が真似しようとしてかなり難しいと感じるのは、こうした口癖のような言い回しである。

（4）**they've got this marriage thing figured out**　“get (something) figured out”は、「～を解決する、すっかり理解する」。エリックはアジア人、特に日本人が（アメリカ人ほど）離婚しないのは、結婚生活の奥義に通じているからに違いないと考えた。“this marriage thing”と“thing”をつけることで、彼は結婚についてはよく分からないという気持ちを表現している。

解説：ニューヨーカーの英語は世界最速と目される。日本での生活が長いらしいエリックはそれほど典型的ではないが、ニューヨーク訛りでは R の音を発音しなかったり（water がワラ、(news)paper がペイパなど）、the の th を D や S の音で発音したり（What's the matter?　がワッサマダなど）と、私たちが習った英語とはかなり異なり、とにかく勢いに任せて喋りまくる（そうでない人もいるが）。映画『フォーンブース』の主人公は、典型的なニューヨーカー。

資料２　（出典：Tom Standage, *A History of World in 6 Glasses* (New York: Walker & Company, 2005); Bill Bryson, *Made in America: An informal History of the English Language in the United States* (1995) (New York: Perennial, 2001); Don DeLillo, *Mao II* (1991) (New York: Penguin, 1992)）

２．飲み物の歴史からみる英語圏の歴史――アメリカの例

＜引用１＞

Unlike beer, which was usually produced and consumed locally, and wine, which was usually made and traded within a specific region, rum was the result of the convergence of materials, people, and technologies from around the world, and the product of several intersecting historical forces. Sugar, which originated in Polynesia, had been introduced to Europe by the Arabs, taken to the Americas by Columbus, and cultivated by slaves from Africa. Rum distilled from its waste products was consumed both by European colonists and by their slaves in the New World. It was a drink that owed its existence to the buccaneering enterprise of the Age of Exploration[1]; but it would not have existed without the cruelty of the slave trade, from which Europeans deliberately averted their gaze for so long. Rum was the liquid embodiment of both the triumph and the oppression of the era of globalization.[2] (Standage 111)

註１　「大航海時代の海賊行為」。“Buccaneer”とは、特に 17 世紀西インド諸島でスペインの船や植民地を荒らしまわった海賊のことを指す。少し時代は下るが、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』の海賊を想像しても良い。映画で海賊が飲んでいる酒がラム酒である。船乗りとラム酒は切っても切れない関係にあり、大航海時代の到来を可能にした物質的条件のひとつだった。

註２　大航海時代と奴隷貿易、植民地の時代を「グローバリゼーション」という言葉で形容していることに注目。これは、人やモノが海を越えて盛んに行き来するようになり、それぞれの国や地域は他の国や地域との相互依存関係なくしては成立しなくなったことを指している。英語がグローバルな言語であることはもはや否定する余地がない事実だが、そこに至るための歴史的条件が、すでにこの時代にグローバリゼーションという形で存在していたことを忘れてはならない。

＜引用２＞

Rum was the drink of the colonial period and the American Revolution, but many of the citizens of the young nation soon turned their backs on it in favor of another distilled drink. As settlers moved westward, away from the eastern seaboard, they switched to drinking whiskey, distilled from fermented cereal grains. One reason was that many of the settlers were of Scotch-Irish origin[3] and had experience of grain distilling. The supply of molasses,[4] from which rum was made, had also been disrupted during the war. And while grains such as barley, wheat, rye, and corn were difficult to grow near the coast—hence the early colonists' initial difficulties with making beer—they could be cultivated more easily inland. Rum, in contrast, was a maritime product,[5] made in coastal towns from molasses imported by sea. Moving it inland was expensive. Whiskey could be made almost anywhere and did not depend on imported ingredients that could be taxed and blockaded.[6]

By 1791 there were over five thousand pot stills in western Pennsylvania alone, one for every six

people. Whiskey took on the duties that had previously been fulfilled by rum. It was a compact form of wealth[7]: A packhorse could carry four bushels of grain but could carry twenty-four bushels once they had been distilled into whiskey. Whiskey was used as a rural currency, traded for other essentials such as salt, sugar, iron, powder, and shot. It was given to farmworkers, used in birth and death rituals, consumed whenever legal documents were signed, given to jurors in courthouse and to voters by campaigning politicians. Even clergymen were paid in whiskey. (Standage 121-2)

註３　ウィスキーを飲む習慣を、スコットランド、アイルランドからの移民が母国から持ち込んだ。新世界アメリカで社会の主流を成すいわゆる WASP（White Anglo-Saxon Protestant）とは区別される彼らは、職業や居住地について差別的待遇を受けることが多かった。東海岸沿いの WASP 社会からはみ出して、西に向けて移住していくなかで、自然にアメリカのウィスキーが完成されていった。まずウィスキーが、アメリカの主流に対する反抗心の表れであったことを確認しておきたい。

註４　糖蜜。原材料からショ糖（いわゆる砂糖）を精製するときに出来る余りもの。原材料を無駄なく使いきることを可能にしたラム酒は、コスト・パフォーマンスに優れていた。それも、ラム酒が重宝がられた理由の一つである。

註５　maritime は「海事の、海の、船員向きの」という意味の形容詞。ラム酒と海は切っても切れない関係にあった。（上記、註１参照。）

註６　ウィスキーの原材料はアメリカのいたるところにあったので、輸入に頼る必要がなく、それゆえ宗主国イギリスによる課税や海上封鎖を心配せずに済んだ。もともとアメリカ独立戦争の火種となったのが、イギリスのそうした理不尽な植民地政策だったため、ウィスキーは、アメリカ独立の精神を象徴する飲み物と考えられるようになった。

註７　ウィスキーは財産とみなされ、貨幣の代わりにやりとりされることもしばしばだった。既にメソポタミア文明においても、ビールが貨幣代わりに用いられていた記録があると、著者のスタンデイジは述べている。選挙活動で支援者に酒が振る舞われたとあるが、当時はむしろそうするのが当然とみなされ、サービスをけちった候補者が落選したというエピソードも伝わっている。

＜引用３＞

. . . the suppression of the Whiskey Rebellion[8][1794], the first tax protest to take place since independence, forcefully illustrated that federal law could not be ignored, and was a defining moment in the early history of the United States.

The failure of the rebellion also led to the development of another drink, as Scotch-Irish rebels moved farther west into the new state of Kentucky. There they began to make whiskey from corn as well as rye. The production of this new kind of whiskey was pioneered in Bourbon County, so that the drink became known as bourbon. The use of corn, an indigenous crop,[9] gave it a unique flavor. (Standage 126)

註８　独立戦争の戦費などで多額の負債を抱え、誕生まもない合衆国は崩壊の危機に瀕していた。そこで国内でのウィスキー生産と消費に対して課税しようとの試みがなされ、それに対する反発が暴動へと発展した。

註９　アメリカ大陸原産のトウモロコシの使用も、バーボンを真にアメリカ的な飲み物にした。

＜引用４＞

In the last years of his life, George Washington himself established a whiskey distillery. The idea came from his farm manager, a Scot[10] who suggested that the grains produced at Washington's estate, Mount Vernon, could be profitably made into whiskey. Two stills began operating in 1797, and at the peak of production, shortly before Washington's death in December 1799, there were five stills. That year he produced eleven thousand gallons of rye, which he sold locally, making a profit of $7,500. . . .

Washington's activities as a whiskey maker presented a stark contrast with the attitudes of another of America's founding fathers, Thomas Jefferson.[11] He denounced "the poison of whiskey" and famously remarked that "no nation is drunken where wine is cheap, and none sober where the dearness of wine substitutes ardent spirits as the common beverage." Jefferson did his best to cultivate vines in America and advocated a reduction in the excise duty charged on imported wine as "the only antidote to the bane of whiskey." But his cause was hopeless. Wine was far more expensive, contained less alcohol, and lacked the American connotations of whiskey, an unpretentious drink associated with independence and self-sufficiency. (Stadage 126-7)

註 10　ワシントンにウィスキー製造を進言した人物。ここにもやはりスコットランド人が関わっていた。

註 11　第３代大統領で独立宣言の草稿執筆者。フランスで大使として過ごしたこともあり、フランスびいきだった。ワインを愛したことでも有名で、ここでは、ウィスキーを見下していたと書かれている。

註 12　「独立と自給自足を連想させる飾り気のない飲み物」として、ウィスキーはひとつの典型的なアメリカのイメージを喚起することになった。アイルランド、スコットランド系の貢献はかすんでしまったが、もっと重要なことに、ウィスキーをアメリカ的なものとして称揚することで、当時のアメリカ人は、ラム酒にまつわる奴隷貿易の記憶を流し去ろうとしたと言えなくもない。

＜引用５＞

Soft drinks were already an old tradition in America, having first appeared as flavored soda water in Philadelphia in either 1825 or 1838, depending on which source you credit. . . . But it was not until the seminal year 1886—the year that the Statue of Liberty and Sherlock Holmes also entered the world—that America got its quintessential soft drink when John Styth Pemberton, an Atlanta pharmacist and patent medicine man. . . brewed up a concoction of cola nuts, coca leaves, caffeine, and other similarly dubious condiments in an iron tub in his backyard, stirred it with a wooden oar from an old boat, and called it *Coca-Cola.*

His bookkeeper, Frank Robinson, who was adept at calligraphy, drew up the florid italic logo that Coke uses to this day. Pemberton viewed his invention not as the refreshing thirst-quencher that the world has come to love, but as an efficacious tonic for hangover and other ills of the upper body. (It was also discreetly hinted that it was a potent aphrodisiac.) Pemberton, alas, failed to see Coca-Cola's true potential. In 1887, he sold a two-thirds interest in the company for the curiously precise but decidedly shortsighted sum of $283.29. It took another Atlanta pharmacist, Asa G. Candler, to capitalize on Coca-Cola's true possibilities as a money-making refreshment. Just before the turn of the century he bought the formula from its new owners for $2,000 and with canny marketing

converted his investment into a fortune. By 1919, when the company was sold again, this time to a consortium of Atlanta businessmen, Candler's &2,000 had grown in value to $25 million.

Such success naturally encouraged imitation, and soon American purchasers could try competing brands like *Co Kola*, *Coke-Ola*, *Coke*, *Koke*, *Klu-Ko Kola*, *Afri-Cola*, *Okla-Cola*, *Carbo-Cola*, *Sola Cola*, *Pepsi-Cola.* Many copied not only its famous name and italic logo, but also its distinctive bottle.[13] Coke took them all to court. By 1926 it had resorted to law no fewer than seven thousand times to protect its trademark, including one fight that went to the Supreme Court. Not only did it destroy almost all its challengers, but in 1930 it won the exclusive right[14] to its alternative name, *Coke*, making it the world's only successful product with two names.

The one competitor it notably failed to quash was *Pepsi-Cola*, invented in 1898 by Caleb D. Bradham and so called because it was intended to combat dyspepsia.[15] Despite going bankrupt twice in its formative years, PepsiCo is now actually a larger company that Cola-Cola, thanks to its diversifications—it owns, among much else, Pizza Hut and Taco Bell, which is why you needn't bother asking for Coke there—and by having the good sense not to tamper with its formula as Coke did, with disastrous results, in 1985, when it introduced *New Coke. . . .*

Despite its occasional setbacks, Coke has long been a symbol of American culture in a way that Pepsi has never managed. As long ago as 1950, it inspired a word for the American cultural takeover of the planet: *Coca-Colonization*.[16] Today, Coke is sold in 195 countries (giving it a bigger following than the United Nation, with 184) and is claimed to be the second most universally understood term in English, exceeded only by *O.K.*[17] . . . (Bryson 204-5)

註 13　商品名、ロゴ、ボトルデザインが一体となったイメージ戦略が、コカコーラの成功の要因となった。右の図像は 1956 年の広告。ロゴの赤地に白抜きの文字という色使いも、商品のイメージと結びついている。また印象的なキャッチフレーズの多用は、ラジオやテレビを通して聴覚に訴える効果もある。この例では、ボトルを握るたくましい男性の手の背景に地球がうかび、コカコーラの市場戦略が、全地球的な規模を見据えていることも示唆される。戦後の繁栄期のアメリカが、盛んに「アメリカ的暮らし（American Way of Life）」の理想を世界に向けて発信するなかで、コカコーラが本文にもあるように、「アメリカ文化の象徴」の役割を担ったことは間違いない。

註 14　第 1 週講義資料の“free culture”の項を参照。次の註 15 ともあわせて考えたい。

註 15　消化不良。不機嫌という意味もある。コカコーラもペプシコーラも、本来は薬として開発されながら、清涼飲料水（つまり refreshment）として消費されるようになった。特にコカコーラは最初シロップ状のものを水などで割って飲んでいたが、ある時誰かが炭酸水で割ってみたところ非常においしくて、急速に人気が高まったという。本来とは違う用途で、皆が自由に使うなかで形成されたのが、「コーラ」というひとつの文化だと言えるが、それを特定の企業の所有物として法的に定めることで、そうした自由な文化の発達が阻害される面もある。

註 16　コカコーラと植民地化（colonization）を掛け合わせた造語。註 13 で示した、コカコーラによる世界戦略という解釈は、当時すでに議論されていた。最近では、マクドナルドに批判の矛先が向けられ、“McDonaldization”という言葉も定着してきた。

註 17　言われてみればなるほどという指摘。誰にでも分かるということは、どこにでも存在できるということでもあり、コカコーラとその関連するイメージを全く目にせずに済ませることは、世界のどこにいても、ますます難しくなっている。

＜引用６＞

The streets run with images. They cover walls and clothing—pictures of martyrs, clerics, fighting men, holidays in Tahiti. There is a human skull nailed to the stucco wall and the there are pictures of skulls, there is skull writing, there are boys wearing T-shirts with illustrated skulls, serial grids of blue skulls. The driver translates the wall writing and it is about the Father of Skulls, the Blood Skulls of Hollywood U.S.A., Arafat Go Home, the Skull Maker Was Here. The Arabic script is gorgeous even in hasty spray paint. It is about Suicide Sam the Car Bomb Man. . . . The car moves slowly through narrow streets and up into dirt alleys and Brita thinks this place is a millennial image mill. (DeLillo 229)

⇒街の外観は、広告や落書きなどのイメージで埋め尽くされ、アラブ系のテロリスト（あるいは見方を変えればレジスタンス）がトレードマークとして使っているとおぼしき頭蓋骨のイメージがそこらじゅうに溢れている。「殉教者や聖職者や闘士たち、そしてタヒチで過ごす休日」の写真が、脈絡もなく並べて張り出されている。これはまるで「至福千年紀のイメージ工場」のようだと Brita は感じる。

Now there are signs for a new soft drink, Coke II, signs slapped on cement-block walls, and she has the crazy idea that these advertising placards herald the presence of the Maoist group. Because the lettering is so intensely red. The placards get bigger as the car moves into deeply cramped spaces, into many offending smells, open sewers, rubber burning, a dog all ribs and tongue and lying still and gleaming with green flies. and the signs are clustered now, covering almost all the wall space, with added graffiti that are hard to make out, overlapping swirls, a rage in crayon and paint, and Brita gets another crazy idea, that these are like the big character posters of the Cultural Revolution in China—warnings and threats, calls for self-correction. Because there is a certain physical resemblance. The placards are stacked ten high in some places, up past the second storey, and they crowd each other, they edge over and proclaim, thousands of Arabic words weaving between the letters and Roman numerals of the Coke II logo. (DeLillo 230)

⇒そこで目に飛び込んでくるのは、コカコーラの新製品の広告だ。それは見た目の連想から、毛沢東主義や中国の文化大革命を思い起こさせる。（あまりに鮮明な赤い色と、壁という壁を覆いつくすように無数の広告が貼られていることなどがその理由。）辺りに漂う悪臭や、ハエにたかられた痩せこけた犬などの現実の情景と、Brita の心に去来する場違いなイメージの対比が鮮明だ。コカコーラのロゴにからまるように、いくつものアラビア語の言葉が重ね書きされている。どこにでもある（遍在的）イメージとしてのコカコーラは、世界戦略の果てに、「アメリカ文化の象徴」としての機能を失い、別の文化のなかで書き換えられていくことになるかもしれない。

資料３　（出典：Bill Bryson, *The Lost Continent: Travels in Small-Town America* (1989) (London: Black Swan, 1999); Ry Cooder, "Suitcase in My Hand," *My Name Is Buddy,* 2007）

＜引用７＞

I drove on. The road was completely unsignposted. They do this to you a lot in America, particularly on country roads that go from nowhere to nowhere. You are left to rely on your own sense of direction to find your way. . . . (44)

I drove and drove, through flat farming country and little towns devoid of life. . . . I was only slowly adjusting to the continental scale of America, where states are the size of countries. Illinois is nearly twice as big as Austria, four times the size of Switzerland. There is so much emptiness, so much space between towns. You go through a little place and the dinette looks crowded, so you think, "Oh, I'll wait till I get to Fuddville before I stop for coffee," because it's only just down the road, and then you get out on the highway and a sign says FUDDVILLE 102 miles. And you realize that you are dealing with another scale of geography altogether. There is a corresponding lack of detail on the maps. On British maps every church and public house is dutifully recorded, Rivers of laughable minuteness—rivers you can step across—are landmarks of importance, known for miles around. In America whole towns go missing—places with schools, businesses, hundreds of quiet little lives, just vanish, as effectively as if they had been vaporized.

And the system of roads in only cruelly hinted at. You look at the map and think you spy a short cut between, say, Weinerville and Bewilderment, a straight grey line of country road that promises to shave thirty minutes from your driving time. But when you leave the main highway, you find yourself in a network of unrecorded back roads, radiating our across the countryside like cracks in a pane of broken glass. (60-61)

＜引用８＞

I headed for Cairo, which is pronounced Kay-ro. I don't know why. They do this a lot in the South and Midwest. In Kentucky, Athens is pronounced AY-thens and Versailles is pronounced Vur-SAYLES. Boliver, Missouri, is BAW-liv-er. Madrid, Iowa, is MAD-rid. . . . At Cairo I stopped for gas and in fact I did ask the old guy who doddered out to fill my tank why they pronounce Cairo as they did.

"Because that's its *name*," he explained as if I were kind of stupid.

"But the one in Egypt is pronounced Ki-ro."

"So I've heard," agreed the man.

"And most people, when they see the name, think Ki-ro, don't they?"

Not in Kay-ro they don't," he said, a little hotly.

There didn't seem to be much to be gained by pursuing the point, so I let it rest there, and I still didn't know why the people call it Kay-ro. Nor do I know why any citizen of a free country would choose to live in such a dump, however you pronounce it. Cairo is at the point where the Ohio River, itself a great artery, joins the Mississippi, doubling its grandeur. You would think that at the confluence of two such mighty rivers there would be a great city, but in fact Cairo is a poor little town

of 6,000 people. The road in was lined with battered houses and unpainted tenements. (77)

⇒カイロではなく「**ケイ**ロー」、アセンズ（アテネ）ではなく「**エイ**センズ」、ヴァーサイ（ヴェルサイユ）ではなく「ヴゥァ**セイ**ルズ」などなど、短いアの音を「エイ」と長く、もったりと発音するのが特徴。次に聞く曲でも、（ライ・クーダー自身はカリフォルニア出身であまり訛りがないはずだが）“Hand”が「ヘィィン」という風に歌われていたりと、一昔前のアメリカの田舎の雰囲気が再現されている。

＜引用９＞

“Suitcase in My Hand”

When I was a little kitten, daddy told me, Son,
There’s just one thing that you should know.
As through this world you ramble and through this world you roam,
Just take this little suitcase when you go.
And when the evening sun goes down and you’re tired of rambling around,
Just set her on the ground and climb right in.
You won’t ever have to worry about the cold night wind
When you got your little suitcase in your hand.

Little suitcase in my hand, I’m rolling through this land.
A mansion is much too big for me.
When the stars come out at night everything will be alright
’Cause I got my little suitcase in my hand.

A hard-boiled egg’s yellow inside,
There’s some in every crowd you will find.
They’re afraid to have to do an honest day’s work,
So they blame the workingman every time.
But the harder they come, the bigger they fall.
Just you hold your ground and take your stand.
’Cause the free and independent life’s still the best of all,
When you got your little suitcase in your hand.

(Chorus)

⇒歌を何度か聞いて、発音の気になるところなどにチェックを入れてみてください。
また、スーツケース片手に故郷を旅立つというイメージが、アメリカではどう受け取られるか考えてみてください。日本の演歌や歌謡曲との比較も面白いかもしれません。

資料１　オーストラリアの英語

＜引用１＞　オーストラリア英語の特徴

They speak English, don't they? Well, yes. . . but it is often a very special brand of English. The earliest Australian immigrants[1] were a mixture of Irish and English convicts, soldiers (comprising a lot of Cockneys and other Londoners, a few north countrymen, and some Scots), and a number of educated naval officers. Then better-educated free settlers began to arrive, particularly in South Australia and Western Australia. This mixture of tongues has mutated into a general Australian English, or "Strine"[2] ("Australian," said in Australian English), with some regional and elective differences. Rather than adding to or altering the language very much, later immigrants from Europe, and even later ones from Asia, have generally adopted Strine, but in keeping their own accents have often produced amazing results.

Be warned—it's very catching. Immigrants with children are often quite horrified, to begin with, when their children become fluent Strine speakers within months of meeting their new mates at school and playing with them "on Sat'di arvo" (on Saturday afternoon).

In an endeavor to capture the tone, actors from overseas are advised to raise the pitch a bit (speaking at a slightly higher level), breathe the words out through the nose, and end sentences with the upward lilt English normally reserves for questions. Try it, for fun—but caution: Strine is very individual, and is difficult to copy—it's better simply to let it happen. If you manage to master it you will be a hit at parties.

The accent is the butt of much humor, e.g.: Patient to doctor: "Did I come here to die?" Doctor: "No, mate, you came yesterdie."

The art of brevity, reducing any word to its diminutive,[3] is an essential part of speaking Strine. Postman is usually "postie," car registration is "rego," journalist is "journo," musician is "muso." Even a U-turn (when driving a car) is a "u-ie." And we "chuck a u-ie" when we make a U-turn (chuck being to throw). G'day mate," "ow yus goin?" and "Where's ya bin?" are diminutive of another type.

Names are also subject to diminution. Charles becomes Chuck, and when Prince Charles married Diana Spencer it was referred to as "the Chuck and Di show." (Penney 148-50)

註１　1788 年１月、囚人を乗せた最初の船団がオーストラリアに到着した。もともとはアメリカへと送られていた囚人が、アメリカの独立に伴い、オーストラリアへと送られることになったのである。彼らが安全な港を探してシドニー入り江に到着した翌日の１月 26 日が、後にオーストラリア・デイとして、建国を祝う日と定められた。当時のことがほとんど分からないせいで、オーストラリアの国としての起源は、あいまいなまま残されることになる。

註２　1964 年に作られた新語。オーストラリア英語を冗談めかして表現したものだが、自分のことをもの笑いの種にするのが好きなオーストラリア人自身、喜んでこの言葉を使う。

註３　指小辞、指小語。-ie、-ette など、単語と結びつくことで「より小さい」「愛らしい」という意味を付け加えるのが指小辞で、そのようにして作られた言葉が指小語。

＜Strine の例＞

Barbie, bar-b-que　バーベキュー　／　**Bather** (swimmers, togs, cossie)　水着 ／　**Battler**　労働者
Beaut　凄い、素晴らしい（感嘆語）／　**Bottle shop**　酒屋　／　**Chook**　チキン、鶏肉
Chrissie　クリスマス　／　**Cocky**　農夫、牧童　／　**Crook**　具合が悪い
Dinkum　正直な、本当の（fair dinkum）／　**Dob in**　告げ口する、裏切る　／　**Dough**　お金
Dunny　屋外トイレ　／　**Esky**　持ち運べるクーラーボックス　／　**Footie**　フットボール（ボールも）
Globe　電球　／　**Gong**　メダル　／　**Jarmies**　パジャマ　**Larrikin**　乱暴者、粗暴な（褒め言葉ともなる）／　**Ocker**　ひどくあか抜けないオーストラリア人（ビール腹にサンダル履き）
Pokey　ポーカーマシン、スロットマシン　／　**Poofter**　同性愛の男性　／　**Prezzie**　プレゼント
Ratbag　馬鹿な人　／　**Root**　気を付けろ／　**Sandgroper**　西オーストラリア人（砂漠が多い）
Sheila　女の子　／　**Shout**　一杯分の酒をおごる　／　**Sickie**　（一日分の）病欠
Smoko　喫煙、一服　／　**Spit the dummy**　カッとなる　／　**Strides**　ズボン
Stubby　ビールの小瓶、男性用半ズボン　／　**Tassie**　タスマニア　／　**Throw a wobbly**　自制を失う
Tinnie (tube)　缶ビール　／　**Uni**　大学　／　**Whinger**　めそめそする人（Pommy whinger）
Wowser　清教徒、興ざめなやつ　. . .　その他いろいろあります

＜引用２＞　オーストラリア英語事情

もちろん生活習慣が違うといっても、オーストラリアの猫も紅茶は飲みません。実は、オーストラリアでは、ティーという言葉が、紅茶にも食事にも、果ては猫のえさにも使われるのです。ところで、妻［香港出身の中国人］がこんなありきたりの表現を聞いたことがなかったのは、オーストラリアでは、階層によって異なる英語が話されているからです。

オーストラリアは、多文化社会とはいっても、現実には人口の 80%は英語しか話せません。また、人口の 97%は英語を話す、英語社会です。オーストラリアが英語社会になったのは、オーストラリアへの移民の大多数が、長年にわたってイングランドやスコットランド、ウェールズ、アイルランドからの移民で占められてきたからです。数え方にもよりますが、とりわけイングランドからの移民とその子孫は、現在の人口の半分近くを占めています。イギリスの英語が文化の基底をなしている所以です。

オーストラリア英語は、ロンドンの下町の英語コックニーがもとになっているとよく言われます。『マイ・フェア・レディー』の主人公イライザの話すようなイースト・エンドの英語です。ロンドンを中心とした地域からの移民が多かったことから、この地域の労働者階級の発音や表現が、オーストラリアの庶民の言葉に多く取り入れられました。A の発音がアイになるのはその典型です。エイトがアイト、トゥデイがトゥダイと発音されます。ティーが食を意味するのもその一例です。（藤川『猫に紅茶を』　66-7）

⇒今回の資料作りで大いに参考にさせていただいたので、ひとこと。

藤川隆男先生は大阪大学の教授で、西洋史、特にオーストラリアの歴史を研究されています。「大阪大学西洋史学研究室」のサイト内で、オーストラリア関係のデータベースを公開しておられます。ぜひご覧になってください。（http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/australia.html）

＜リスニング練習＞

Interview with Steve, Age 47 (Australia) Part 1

I grew up in an inner suburban city of Melbourne called Coburg, and our family home was approximately 200 meters from Her Majesty's Prison Pentridge,[4] which was the main prison for the. . . Melbourne, if you like. But, yes, ah. . . a family of father, mother, two sisters, older and younger sister. And it's a very multicultural[5]suburb in that there's probably a larger population of Greeks, Italians, Lebanese and Turkish than English-speaking people. Yes, so it was quite different. So state school was quite a hodge-podge[6] of cultures, and probably I was in the minority being a native English-speaking person. So my best friends at school at a young age were Greek, and Turkish guys, actually, oh and an Italian guy. That's pretty much just that suburb in Melbourne attracted the other cultures, being close to the city center and a relatively non-expensive suburb to live in.

We'd go to the beach, we used to go to the beach fairly frequently, actually. And that would be about a one hour's trip. Yeah, we'd go to the Dandenongs[7] to look at the forests, or we used to go to the races, horseracing a lot.

My goal after leaving secondary school was actually to do law, but I didn't get sufficient marks to do law, so actually my second option was to go to accounting. But I always had a, I found it very easy. It was a very easy subject at school, and I quite like working with numbers and had a mathematical bent,[8] and yeah, so I ended up being a finance person.（コールマン　121-2）

註４　「女王陛下のペントリッジ刑務所」。1850 年～1987 年、凶悪犯を収容した。イギリス統治時代に建てられ、イギリス女王に敬意を表す名前になっている。後にみるように、刑務所も、オーストラリアにとっては文化遺産・歴史的建造物となることがある。

註５　「多文化の」。オーストラリアの重要なキーワード。　**註６**　「ごたまぜ」

註７　「ダンデノング山地」。メルボルンの東に広がる低い山地。

註８　「数学の才能があった、数学が好きだった」

⇒先の引用にもあったように、オーストラリアでは大多数の人々が生活の中で英語を話す。しかし、非英語圏からの新しい移民が集中する地区では、英語を話す子供の方が学校で少数派に転じることもあるという。全国的にはアングロ＝ケルティックの英語圏だが、移民の密度が高いロンドンだけが、イギリスの中で際立った多文化都市の特徴を備えているのと似ている。

⇒発音の特徴に注意。Melbourne が「メウバン」、home が「ハーウム」、main が「マイン」、native が「ナイティヴ」など。“. . . older and younger sister”の最後が語尾上がりで発音されるなど、リズムも独特である。

Interview with Steve, age 47 (Australia) Part 2

[Question: Are there great differences between regions in Australia?]

Not between New South Wales and Victoria. They're very similar, certainly there's no differences in food, aside from beer—they're very loyal to their state beers.[9] New South Wales has Tooheys, and Victoria has their Victoria Bitter and Melbourne Bitter, they're very loyal, the states, to their beers. The other contradiction which is in the football: New South Wales plays rugby, and Victoria is very much an Australian Rules [10]state, so they're very parochial[11] about their sports as well.

One incident stuck in my mind as demonstrating the difference between city living and country living. Our cars were delivered by courier on the back of a truck, and in the city, you would never leave cars without the owner signing for them. But because the cars actually reached our house before us, the truck driver looked across the street, saw a neighbor mowing his grass,[12] and threw him the keys. And that always stuck in my mind as the difference between country and city living in Australia. The security is far more relaxed, and people trust each other far more, where in the city the cars would have been stolen for sure. It's a great way to meet your neighbor, 'cause he, as soon as he saw us arrive, he runs across the street and says, "Hey, here you go, mate,[13] I've got your car keys." And of course he jokes, "Oh, you know, I've already been around the block a few times." But yeah so it's a bit different.

Yeah, I've been to all the states in Australia, and all the capital cities, and there are subtle differences. The people in Queensland tend to put "eh" on the end of their words, or on the end of their sentences. They'll say, "What do you think about this, eh?" That's a subtle difference. The Adelaide people tend to speak very similar to New Zealanders, in that they've got a slightly different accent. And the people from Sydney speak a little bit differently, a little bit ritzier[14] or colorful with their language. (コールマン　171-2)

註 9　「自分の州のビールに忠義を尽くしている」。オーストラリアの州はそれぞれ、もともと別の植民地だったもので、かなりの自治権を有している。オーストラリア連邦政府は、日本はもちろんアメリカの中央政府よりも限られた権限しか、それぞれの州に対して持っていない。

註 10　「オーストラリア・ルール・フットボール」。ラグビーに似ているが、ルールの異なる、オーストラリア独自のゲーム。1858 年に始まった。投げてパスすることは禁じられ、キックでのパスしかできないが、オフサイドがないので前方にパスしても構わない。空中戦やフィールドを大きく使ったダイナミックな戦略など、見た目の派手さで人気を呼んだ。

註 11　「地方的な、その地方だけの」

註 12　オーストラリア人は、芝生の手入れや家のインテリア装飾にとても力を入れる。ひとからどう見られているかを、非常に気にするからだといわれる。

註 13　「マイト」と発音。オーストラリアを語る上で、避けては通れない言葉。（後述）

註 14　「優雅な、贅沢な、気取った」を意味する ritzy の比較級。高級ホテルの Ritz からきている。

資料２　オーストラリア文化概論

＜引用３＞　植民地化、白豪主義、文化多元主義を貫くオーストラリアの心性

マイトシップとフロンティア・スピリッツの違い

英国は世界の陸地の半分を植民地化したといわれる。そのほぼ全てが今日では独立し、英領連邦（コモンウェルス）と称している。英国と英領連邦の絆は固く、例えばオリンピックの間の年、四年毎に英国・英領連邦だけでミニ・オリンピック（コモンウェルス・ゲームズ）を開催してきた。1911 年、ジョージ五世（エリザベス二世の祖父）の戴冠式を祝して、英国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカ（南ア）が開催したのが始まりだが、正式には 1930 年、カナダのハミルトンで開催されたものが第一回となった。

しかし後に英領連邦となる植民地は、明確な特徴で二つに分けられる。まず先住民が圧倒的多数で、英国の支配層がその上に乗っかった植民地であり、その典型がインドやマレーシアである。次に、先住民が圧倒的少数の植民地で、典型はカナダ、オーストラリア、ニュージーランドである。南アは、英国系とオランダ系（アフリカーナ）が合わせて 400 万強と、圧倒的少数でも多数でもない点で、二つのタイプの中間種になる（だからこそ、20 世紀の土壇場まで人種差別が国是になったともいえる）。

アメリカ合衆国も、この二番目のタイプ、先住民が圧倒的少数である。この四つの国々のうち、最も明瞭な国家的・国民的特徴を打ち出してきたのが、対英独立戦争によって母国との絆を断ち切ったアメリカだった。カナダはそのアメリカと国境を接しているため、アメリカナイゼーションの被害が大きく、特徴的な文化をはぐくみにくかったのに対して、はるか太平洋を隔てたオーストラリアは、明確にアメリカと異なる特徴を培養してきた。他方、ニュージーランドは、アメリカに対するカナダと同じく、オーストラリアの影響下にアイデンティティを際立たせにくかった。

いずれにしても、先住民が圧倒的少数である、これらの＜新世界国家＞の特徴は、開拓期に培われる＜辺境エートス＞が背骨となる。四国の中でアメリカとオーストラリアが一番明確なエートスを育て上げた。アメリカはフロンティア・スピリッツ、オーストラリアはメイトシップ（以降、オーストラリア式発音でマイトシップと表記）である。

フロンティア・スピリッツは、アメリカ人らが東から西へと押し寄せた攻撃的な運動律が特徴で、あっという間に西海岸に達すると、太平洋を越えてアジアへと突き進んだ。一方、マイトシップは流刑囚が官憲から身を守る気質（かたぎ）が原型だったから受動的で、その最大の外延が世界の人口の半分が集中するアジアから有色人種が流入することを防ぐ＜白豪主義（ホワイト・オーストラリア・ポリシー）＞となった。二つの辺境エートスの強度の違いは、両国の鉄道建設のダイナミズムの差に如実に表れている。アメリカの東西横断鉄道の開通は 1869 年なのに対して、オーストラリアの東西横断鉄道開通は実に 1970 年と、100 年余も遅れている。

しかもアジアを＜近北（ニア・ノース）＞に控えるオーストラリアでは、大事なのは東西ではなく、南北縦断鉄道なのだが、これの全線開通はつい最近のことだったのである。

この差は、二つの辺境エートスの差だけでなく、アメリカでは大金鉱が西海岸で発見されたのに対して、オーストラリアではメルボルンのすぐ北部で発見されたことにも起因している。オーストラリアへ押し寄せた金掘りたちは、大陸北端のダーウィンまで長い旅を経る必要がなかったのである。

文化多元主義――マイトシップの他民族集団への拡大

英国やヨーロッパと大西洋を隔てただけのアメリカに比べて、はるか太平洋とインド洋を隔てたオーストラリアへは、移民の到来がぐんと少なく、アラスカを除くアメリカとほぼ同じほどの面積（日本の21 倍）の国土に、いまだに、東京都の人口より 700 万余を上回る程度の人間［註：2006 年時点で、19,727,500 人＝約二千万人］しか住んでいない。アメリカは三億人弱である。人口密集地帯アジアのすぐ南に人工的空白を抱えてうずくまるオーストラリアには、常に脆弱感があり、それが彼らの受動性を一層強めた。その脆弱感から白豪主義がはびこり、1970 年代半ば、保守のフレーザー政権が公式廃棄を宣言するまで続いた。

しかしマイトシップは相互扶助、平等主義の精神の祖型を形作り、最初はそれらが英国系同士の間に広がり、さらには差別されていたアイルランド系が英国系に抗議する形で彼らの間にも広がっていった。マイトシップと並んで有名なのが＜フェア・ゴー＞だが、これは「公平にやれ」という要求である。当然、この気質は、この国の労働組合、刑務所、軍隊など、男性だけが集合する場所で強く育まれた。オーストラリアの労組と軍隊の結束力は、政界に冠たるものである。

しかし、オーストラリア人はリーダーを内部から選べず、外部からのリーダーに「一応は従う」という特徴が出てきた。過度な平等主義のせいで、仲間が自分を追い越すのが許せなくなるのだ。頭角を現すものを叩く意味で、これを＜ノッカー現象＞と呼ぶ。ノッカーとは＜けなし屋＞のことである。

一般に、アメリカ映画の主人公は、ギャングも権力志向の人物も、明確な目的をもって行動するが、オーストラリア映画の主人公は目的からそれ、不覚悟な側面を露呈しがちである。開拓の方向がしかと定まらなかった歴史が、いまだに国民生活に反映しているのだ。

また、女性が入ってくると、マイトシップがぐらついた。差別されてきた女性は地位の高い男性を結婚相手に選ぶことで社会主流化を遂げるしかなく、それが逆差別となって男性同士のマイトシップを蝕んだのである。ただ、開拓という男性的な仕事ではアルコールが男らしさを強調するのと、作業の疲れにも酒が欠かせないため、男性のアルコール依存症が多かったのは、アメリカと同様で、女性たちは夫や息子をその悪癖から救出すべく、牧師を中心に禁酒運動を展開、これが女性参政権運動へと拡大していった。この運動はアメリカの方が激しかったが、まずニュージーランド（1893 年）、ついでオーストラリア（1902 年）が世界に先駆けて女性の参政権を認めたのである。

しかし第二次世界大戦で日本軍の侵攻に怯えた結果、オーストラリアは人口増を目指して英国やアイルランド以外のヨーロッパ諸国から、さらには中東、アジア、南米などからの移民や難民を受け入れて、小型の多民族社会になっていった。「オーストラリアは文化多元主義（マルタイカルチュラリズム）を国是とする」というフレーザー政権の決断は、その必然的帰結だといえる。文化多元主義とは、マイトシップの輪を英国系やアイルランド系以外の民族集団にも広げることを意味し、白豪主義の廃棄につながったのである。（越智　17-20）

⇒オーストラリアの地理的条件や、植民地としての成り立ちなどの歴史的背景、イギリスや周辺の国々との関係のなかで、常に「気を使い」続けてきたことなどが、現在のオーストラリアの文化的特徴を決定している。オーストラリアには、イングランドやアイルランドから持ち込んだ文化が、場所を変えて発展していった部分と、そうした外来のものではない独自の文化を創り出そうとしてきた部分があり、常に「オーストラリア人」であることの意味を探求してきた経緯がある。国民的アイデンティティの探究といってもよい。その点をもっと具体的に考えてみることにする。

資料３　国民的象徴の探究

＜引用４＞　正式国名、Commonwealth of Australia

Australia is still a member of the British Commonwealth. About 50 percent of Australians are monarchists, and emotional links with the “mother country” are strong. However, immigration has brought with it emotional ties to many other European and Asian countries.

Not so fixed are the economic links. Since the formation of the European Economic Community, Australia has lost much of its European export market and has turned to Southeast Asia. Japan is now the biggest foreign investor in Australia, mainly through massive tourism and property investment, much of it in Queensland. In the 1980s, Asia took about half of Australia’s exports. There have lessened recently, while exports to the U.S.A. have grown hugely. The key to Australia’s psyche is, again, diversity—of cultural, emotional, and economical links. (Penney 158)

註 15　「君主制主義者」。つまりイギリスを宗主国として、イギリス国王を君主として戴くことを支持する人々。君主制を廃して共和制に移行するかどうかを決める国民投票が 1999 年 11 月に行われたが、結果は君主制存続の意見が多数だった。

註 16　イギリスが大陸ヨーロッパとの経済的協調を志向したことで、オーストラリアは、「母国」から見放されたも同然だった。この国家的アイデンティティの危機に直面し、アジア・太平洋地域との経済協力へと重点がシフトした。（APEC やアメリカとの関係が重要になった。）

註 17　「多様性」が主要テーマとなる点は、他の英語圏の国々と同じである。ただし、ここで言われているように、オーストラリアにとっては、文化・感情（イギリスに対する愛国心など）・経済的つながりなどが、分かちがたく結びついていることに注意したい。それらの各方面において、オーストラリアは、様々な可能性に向けて「開かれた」国であると言える。

＜引用５＞　建国神話の不在

1901 年にオーストラリア連邦は成立しました。オーストラリアという国が生まれたのはこの時です。でも、オーストラリア連邦の結成は、アメリカ合衆国の場合とは異なり、参加した各植民地（州）の自発的意思に基づく平和的なプロセスでしたから、国民の歴史としては重視されませんでした。合衆国には、独立戦争という血の犠牲があり、建国の神話を謳いあげるのに好都合な素材があったのに対し、オーストラリアにはハリウッド映画向きの材料がなかったのです。（藤川『猫に紅茶を』　134）

国家の神話、国民の神話とは不思議なものです。国民を最も尊重した行為や出来事、成功した歴史には関心を向けずに、暴力や血の犠牲に焦点を合わせます。オーストラリア連邦の歴史は、あまりにもうまく行きすぎたがゆえに消された歴史だと言えるでしょう。（藤川『猫に紅茶を』　137）

現在では各地の観光案内所が「歴史の散歩道」というような簡単な地図を用意していますが、当時はそうやすやすとはいきませんでした。多くの町が「歴史的」という名を冠するようになる歴史ブームは、つい最近の現象なのです。ちなみに、日本人の子供はすべて、日本の歴史を学びますが、オーストラリアには、オーストラリア史を体系的に学ぶような必修科目はありません。（藤川『猫に紅茶を』　135）

⇒国の始まりの様子を今に伝える「建国の神話」がないというのは、特に国民の共通の記憶として残るようなつらい経験がなかったからだともいえる。「ハリウッド映画向き」でないというのは確かで、レンタルビデオ屋の棚を見るだけでも、オーストラリアの歴史に焦点を当てた映画はほとんどない（あったとしても日本ではあまり認知されない）。オーストラリア出身の俳優として思いつくままに名前を挙げても、ニコール・キッドマン、ケイト・ブランシェット（エリザベス一世を演じていた）、メル・ギブソン、サム・ニール、ヒューゴ・ウィーヴィング（『マトリックス』のエージェント・スミス）、ガイ・ピアースなど豪華な面々がいるが、彼らはもはやハリウッド・スターとして認知されている。オーストラリアの歴史への関心が薄いのは、国内だけに限ったことではないといえる。ところが、その反動として...

＜引用６＞　自分探しとナショナリズムの発揚

現在オーストラリアは、アイデンティティの時代を進んでいます。多文化社会の中で、文化的・民族的な集団とされるエスニシティに属する人々は、集団として独自のアイデンティティを主張します。これに対し、これまで社会の主流にあり、自分自身の存在について問う必要のなかったイギリス系の人々は、アイデンティティの喪失に悩むようになりました。イギリスが故郷で、イギリス文化とオーストラリア文化が一致した時代は終わりました。多くのイギリス系の人々が、自分の血縁者や家系に、アイデンティティのよりどころを求め、家族の歴史を捜し求めるようになりました。古文書館が繁盛する理由です。（藤川『猫に紅茶を』　62）

オーストラリア・ルールのフットボールは、ヴィクトリア州を中心に最も人気のあるスポーツです。その［...］メルボルン郊外のチームの対抗戦は、4 月 25 日のアンザック・デイに開催されます。これは 1995 年に生まれたオーストラリアの新しい「伝統」の一つです。

この新しい伝統が興味深いのは、オーストラリア・ナショナリズムの二つの流れを結びつけた点にあります。オーストラリアは、いかなる国にもまして、スポーツに秀でていることを誇りとする、スポーツ・ナショナリズムの国です。もう一つの伝統は、アンザック・デイの伝統です。アンザック・デイとは、第一次世界大戦でオーストラリア軍がトルコのガリポリ半島に上陸したのを記念する日で、戦没者慰霊と愛国主義を発露する日として祝われてきた記念日です。AFL は、兵士とフットボール選手をダブらせることで、フットボールとナショナリズムへの関心を増幅させました。（藤川『猫に紅茶を』　166）

⇒イギリス系（Anglo-Celtic）の人々が家族の歴史をさかのぼる場合、その多くは流刑囚へとつながっている。もともと流刑植民地としての過去は封殺される傾向にあったが、最近では、刑務所が文化遺産に登録されるなど、その過去を積極的に自己のアイデンティティ形成に役立てる動きが出てきた。アンザック・デイ（アンザック ANZAC＝the Australian and New Zealand Army Corps オーストラリア・ニュージーランド連合軍）は、自国とは無関係な戦争に参加し多大な犠牲を払ったことで、ようやく国際世界に貢献する国になれたという自意識を象徴する、歴史上の出来事を記念するものである。スポーツ立国と並んで、こうした一連の変化がメディアを通して喧伝され、政治的に利用されるなかで、ナショナリズムの発揚に寄与しているというのが現状である。国民性を象徴する伝統が存在しないなら、新たに作ってしまうところが、オーストラリア文化の特徴のひとつだといえる。

＜引用７＞　理想化されたオーストラリア人像

ブッシュ［市街地から外れた森林地帯。より奥地の荒野はアウトバックと呼ばれる。］は古くからある言葉です。しかし、19 世紀末になると、国民主義的な文学者などが、オーストラリアの独自性を象徴する地域や生活様式、精神としてそれを描写するようになります。しかも、その表記にはしばしば、大文字で始まる固有名詞が使われるようになりました。こうしたブッシュに住む、その理想的イメージを体現した典型的オーストラリア人が、ブッシュマンと呼ばれる人々です。確かに生まれたのは古い時代です。しかし、ブッシュマンは、オーストラリアの文化にあって、現在でも繰り返し、しかも驚異的な浸透力で現れ続けるヒーローです。

1980 年代のオーストラリアを代表する映画に、ポール・ホーガン主演の『クロコダイル・ダンディー』があります。アウトバックに住むクロコダイル・ハンターを描いた映画です。ホーガン演じるミック・ダンディーは、ブッシュマンそのものでした。［...］

80 年代末には、ブッシュ・タッカー・マンが現れます。彼はブッシュのいろいろな食べ物（タッカー）を紹介し、ブッシュでどう生き延びるかを伝授する番組の主人公です。オーストラリア人なら誰でも知っていると言っても過言ではありません。［...］

両者ともに先住民の知恵の重要性、土地との結び付きを強調しますが、19 世紀末に理想化された白人男性開拓者をそのまま体現しています。カウボーイとランボーを足して、二で割ったような感じとでも言いましょうか。多文化主義のスパイスがきいたブッシュマンが健在なのです。（藤川『猫に紅茶を』112-3）

⇒イギリスならばカントリー・ジェントルマン、アメリカならカウボーイや開拓者というように、その国の典型的な人物像というものが存在する。オーストラリアでは、それがブッシュマンや、あるいはネッド・ケリーに代表されるようなブッシュレンジャー（荒野で暴れまわる盗賊）のような、自然と対峙しながらたくましく生きる（基本的にマッチョな）人間として思い描かれる。実際に荒野に分け入った人びとは、下層階級のアイリッシュ系の労働者や農民であり、それらの人々が生き抜くうえで、「先住民の知恵」に気を配っている余裕はなかった。現代のブッシュマンのイメージでは、特定のエスニシティが希薄になり、先住民との友好的な関係がほのめかされいる。「文化多元主義のスパイスがきいた」というのは、そういう意味だろう。オーストラリアのシンボルを再発見し、現代のニーズに合うように作り変えるという最近の風潮の、典型的な例である。

※オーストラリア先住民の呼称について：日本では一般的には「アボリジニ」（Aborigines）という呼称が用いられるが、この古くからの呼称は、最近のオーストラリアでは、差別的なニュアンスがあるとして用いない傾向にある。代わりに、それぞれの地域ごとの名称で呼ぶか、総称としては「アボリジナル」（the Aboriginal, an Aboriginal man/woman）が良いとされる。

資料４　オーストラリアの伝統文化

＜引用８＞　マイトシップ

You will notice a form of address that is used by many Australian men toward all males: “mate.” “G’day, mate,” “What can I get you, mate?” This is simply a casual, cheerful greeting, with no great overtones of friendship.

True “mateship” was traditionally something quite different; in fact it was almost mystical. It grew out of a feeling of fellowship between men who were facing or had lived through extreme or difficult conditions or great adversity together. It was the brotherhood that came from the sharing of any significant experience, such as fighting together in wartime. At a later stage, perhaps, mateship could come from a different kind of hardship, such [as] getting drunk together, and one man having the courage to take his mate home to face an irate wife. Aussies think, “Only a real mate would do that.” Women were excluded from mateship: a man would never think of addressing a woman as “mate,” and he would never consider her to be one. Women themselves would never use the term.

Nowadays this kind of exclusiveness has made mateship seem rather old-fashioned. . . The reality of mateship today is that it comes to the fore in times of crisis, and is manifested as a general sense of cooperation and a “fix-it” attitude among all Australians, men and women. . . . Australians are proud. . . and independent, but they come together in a crisis, lending a hand to help their mates. (Penney 34-6)

⇒一般的に会話にまじる「マイト」は、本来の「マイトシップ」とはあまり関係がない。もともとは戦友など、困難や大事件をともに乗り越えてきた仲間との絆のようなもので、その場合の最大の困難といえば、オーストラリアへの植民事業そのものだったと考えられる。今では、酒を飲んで意気投合したような時に、その相手を「マイト」と呼ぶ。しかし、実体が失われたからだめだということではなくて、むしろそのように無意味になってしまった言葉の中にこそ、より深いオーストラリアらしさを見出すことが出来るのではないだろうか。ここでは、最後の行にあるように、「いざという時には協力し合って、自分たちのマイトを助ける」という人間同士の連帯感に注目したい。

＜引用９＞　相互扶助の精神――サバイバルの知恵

オーストラリアという世界は面積的には広いのは確かです。でも同時に社会的には驚くほど狭いとも言えます。人と人をつなぐ関係の密度が濃厚、もしくはそう望んでいるのです。この社会的な狭さは、時代を遡ればいっそう顕著になります。人と人のつながりに関する意識は、囚人社会であったこと、移民社会であったこと、イギリスをモデルにしたこと、人口規模が小さかったことなどの歴史的産物でしょう。（藤川『猫に紅茶を』　13）

ブッシュの人々は、都市の人々よりも他人に対してはるかに親切です。見知らぬ日本人の若者を受け入れてくれた農家の話を、人口 20 人程度の州境の村でも聞くくらいです。このようなブッシュの暖かいもてなしは、ブッシュ・ホスピタリティと呼ばれています。［. . .］困ったときの協力がなければ、ブッシュでは生活できません。それはアジア人にも適用されます。（藤川『猫に紅茶を』　125）

＜引用 10＞　パブでの社交

An old Australian saying had it that the worst thing you could do to a man was to steal his beer. Not his wife, or his tucker (food), or his horse, or his good name—but his *beer*.

There is a carry-over into today's culture, when Australians in a group at a bar take turns buying the next round of drinks. It is called "shouting." The term probably comes from early time, when bars were very noisy places and you had to shout to get the barman's attention. To miss out on your shout—by going to the toilet, or suddenly remembering that you are supposed to be somewhere else, and leaving—means the end of your reputation. (Penney 67-8)

⇒最近ではオーストラリア・ワインも世界的に人気があり（オーストラリアには紙パック入りのワインというのがあるらしい）、国内でもビールが主流ではなくなってきている。もともとはアイルランド系の習慣が持ち込まれたものだと思われるが、参加者が一人づつ順番に全員に酒を振る舞うようなことが、今も盛んにおこなわれているようだ。（アイルランドの場合は、酒をおごるだけでなく、ちょっとした小話を聞かせなければならないらしい。）他愛もないと言えばそれまでだが、特に男同志で平等に責任を分担して飲む行為は、一種の社会的な儀礼なのではないだろうか。Penney の本やその他の解説書の類でも、酒場でのマナーはかなり詳細に説明されている。マイトシップの何たるかを知るためには、こうした飲み会に参加してみるのもいいかもしれない。ただし、ひとりペースが遅いと和を乱すことになるので注意が必要である。

＜引用 11＞　伝統的食文化、or a lack thereof

第二次世界大戦後の南ヨーロッパ系新移民の流入や最近のグルメ・ブームにもかかわらず、19 世紀以来の食をめぐる状況は大きく変化していないように思われる。オーストラリア人の食事が肉食に偏っており、その料理法もごく単純なものである点や、質よりも量が食事における重要な尺度であることも同じである。とりわけ真にオーストラリア料理と呼べるようなものが存在しない状況は嘆かわしいとしか言いようがない。

しかし、オーストラリアでおいしいものが食べられないというわけではない。シドニーのキングス・クロス周辺のエスニック・レストランでは、国際的な味を楽しむことができるし、メルボルンのギリシア料理や各地のチャイナ・タウンの広東料理は、本場の味を満喫させてくれる。しかし、これらは例外であって、同じようなことは 19 世紀にもあった。ゴールドラッシュの頃には、現在以上にコスモポリタンな料理が町にあふれていたとも言える。（藤川『オーストラリア歴史の旅』　192）

私の主張に対しては、オーストラリア的な食物があるという反論が当然予想される。ベジマイト（パンなどにつけるこげ茶色の物質）、ビリーティー（ビリーという容器でわかすティー）、パヴロヴァ（ニュージーランドで始まったデザート、ウェイトレスの前置きは長かったが、家内に言わせると「えらい甘い」とだけ覚えているという代物）、ミート・パイとトマト・ソース（説明するまでもない）、ダンパー（醗酵していないパン）などがオーストラリア的であることは私も認める。しかし、このリストは逆にオーストラリア料理が現在もないことの証拠でもある。（藤川『オーストラリア歴史の旅』　194）

オーストラリアほど新鮮でしかも安価な果物に恵まれている国は少ない。それにもかかわらず、ホテルや大学のカレッジ［学寮］、一般の家庭でさえも、デザートや朝食に缶づめのパイナップルや黄桃が出されることが多い。市場へ行けば、数十個のオレンジを 200 円程度で買えるのに、彼らが飲むジュースはほとんど加工された混合ジュースである。肉類の付け合わせにはグリーンピース、ニンジン、コーンの冷凍ミックス野菜がしばしば使用され、カリフラワー、ブロッコリ、カボチャ、大豆なども缶づめが用いられることが多い。新鮮で安価なタイが入手できるのに、魚といえばヨーロッパ産の冷凍タラが代表的である。オーストラリア人は、日本人よりも冷凍食品や缶づめ類に依存することが多い。これには［. . .］近代化された生産や流通のシステムの影響も大きいように思われる。

オーストラリア的と呼ばれる食物についても同様のことが当てはまる。ベジマイトやミート・パイは、オーストラリアを代表する食品であるが、いずれも工場で生産されそのまま消費されている。彼らの国民的な食物は、近代化された食物生産のシステムが生みだす産物であって、オーストラリアの土壌に根づいた食の文化ではない。（藤川『オーストラリア歴史の旅』　205-6）

⇒かなり厳しい意見だが、オーストラリアといえばバーベキューしか思い浮かばないのも事実である。そもそもの始まりから多文化が合流する場所であったことを考えれば（中国からの移民も、19 世紀の中頃には増え始めていた）、多国籍料理の見本市のようになるのも当然だったといえる。その点は、アメリカも似たような事情かもしれない。肉食の弊害が、過剰なまでのスポーツ振興や、ベジマイト（オーストラリア人は大好きらしいが、とにかく不味いという声しか聞かない）によるビタミン補給などの特殊な（オーストラリア的）現象を生み出してきたのは確かだ。しかし、現在のようにオーストラリアのナショナル・アイデンティティーが盛んに議論される状況で、国を代表する食べ物がないというのはかなり困ったことに違いない。

資料１　リスニング練習

Interview with Cheryl, age 45 (South Africa)

As a child we could do things like ride bicycles, go down to the rivers, into the parks by ourselves, and come home after dark, it was no problem. But there is a problem now with the crime and the violence that's going on.[1] It's widely talked about. And one of the reasons why we left South Africa was because of that issue. We didn't feel our children would be safe by themselves going to school, they couldn't walk to school, whereas moving to other countries, you're still able to do that.

There was a lot of optimism at the time that Mandela took over[2] and a lot of foreign investment, but they just haven't been able to solve this whole crime problem, so a lot of companies that wanted to invest didn't invest. And there has been quite an exodus of people leaving South Africa[3] for those safety reasons. They've also got problems with education[4] and that sort of thing, which they're still trying to solve. So I think it's an ongoing process[5] there.

My parents are still in Pretoria,[6] I have a sister there as well. And my husband, his mum is still there and his sister, and a lot of my relatives, cousins and extended family are in Capetown.[7] So, we still keep in contact with them. We have been back. We've actually preferred that they've come to visit us in the various places we've been living, to give them a bit of holiday as well. But also that we didn't have to go back to South Africa. But we have been back.

註１　「現在犯罪と暴力が問題となっている」。現在でも年に２万件の殺人、少なくとも５万５千件のレイプ事件が起きているとのデータがある。銃火器の蔓延による武装犯罪も増加している。註４の教育問題や、エイズの問題とならび、南アフリカにとっては頭の痛い社会問題となっている。

註２　「マンデラが（大統領に）就任した当時の大きな楽観主義」。後述するが、この出来事は新生南アフリカにとっては、一種の「建国の神話」となっている。

註３　「南アフリカからの大規模な国外脱出」。Exodus はもともとユダヤ人のエジプト脱出（映画『十戒』を参照のこと）を指し、旧約聖書の「出エジプト記」の英語訳ともなっている。今では一般的に集団的な脱出を指すのに使われる。

註４　「教育の問題」。特に教育の場での使用言語の選定と、歴史教育が争点となっている。

註５　「現在進行中の出来事」。ここでは上に挙げたような問題のことを言っているが、現在の南アフリカ全体を理解するためにも、「現在進行」という表現は大きなヒントになる。

註６　「プレトリア」。南アフリカ共和国東北部の都市。行政上の首都。現在は Thwane と改称。

註７　「ケープタウン」。同南西部の都市。Cape Town と離して書くこともある。立法上の首都で、議会も開催される。他の都市圏がおおむね国土の東側に集中しているなかで、この古くからある街は離れた所にポツンと存在しているように見える。

※プレトリアが行政、ケープタウンが立法、そしてブルームフォンテイン（Bloemfontein、中部の都市）が司法上の首都である。国家の三権が三都市に分かれて置かれていることからも、南アフリカの特殊性が見てとれる。長らく連邦制をとっていた南アフリカでは、それぞれの州や地方ごとにかなりの違いが存在し、自治の気風も根付いているのである。

資料２　南アフリカの言語事情

＜引用１＞　多言語の国――レインボウ・ネイション

Nowhere is the Rainbow Nation[8] more evident than in the line-up of official languages. There are now no fewer than eleven official languages in South Africa—in alphabetical order, Afrikaans, English, isiNdebele, Sepedi, Sesotho, Setswana, SiSwati, Tshivenda, isiXhosa, Xitsonga, and isiZulu. The lingua franca for most spheres of life is English, although Afrikaans is widely spoken in most communities.[9] As far as home language is concerned, isiZulu is by far the most widely spoken (about 25 percent of the population), followed by Xhosa, and Afrikaans (spoken not only by Afrikaners, naturally, but by most of the Colored community as well). English as a home language is spoken by about 7 percent of the population. That is not the end of it, however. The San or Bushmen peoples speak many different languages and there are other languages among indigenous peoples such as the Nama of the Northern Cape. Local communities with origins elsewhere make a linguistic contribution too. Indians speak a variety of their own languages, as do Chinese South Africans, and then there is the huge Portuguese community, the Greeks, Italians, Germans, and many others. There are many different languages from the rest of Africa too, as immigrants, legal and otherwise, stream southward to the alleged pot of gold at the end of the Rainbow.

South Africans are remarkable linguists. Most are bilingual at least, speaking their home language plus one other, or more, and many Blacks will speak their home language and English and Afrikaans as well. There is now a definite move toward encouraging the culture of the African languages, in terms of literature and education,[10] for example. (Holt-Biddle 152-3)

註８　Rainbow Nation については後述するが、ようするに虹の様に多彩なものからなる国ということである。

註９　Afrikaans「アフリカーンス語」はオランダ系の話す言語。英語と並んで特に広く用いられる。右の画像のように、看板などが二言語で書かれていることも多い。道路標識などは英語が主なようだ。（この看板には、「ヒヒに餌をやることは禁じられています。違反すると罰金を科せられます」とある。）

註 10　英語やフランス語などの植民地時代の宗主国の言語ではなく、土着の言語を積極的に用いようとする動きは、アフリカ各地で起きている。文学の場合、高く評価される現地語作家もいるが、多くの場合読者が限定されてしまうという難点もある。

⇒　確かに英語を公用語とする国ではあるが、これらの事情を考慮すると、南アフリカを単純に英語圏のカテゴリーに入れてしまうことがためらわれる。

＜参考資料＞　Some Common South African Terms

南アフリカで良く使われるという独特の表現を、いくつか見ておきたい。

Ag!—particularly, *Ag, man!* Simply a South Africanism from the original Dutch
Boer—literally, a farmer, but also a derogatory term for Afrikaners used particularly by Blacks
Dankie—"thank you" in Afrikaans, *baie dankie,* "thank you very much"
Eish!—an African exclamation
Hau!—an exclamation of surprise
Howzit?—hello and how are you?
I beg yours?—I beg your pardon?
Ja—pronounced "ya," is simply "yes" in Afrikaans, but almost universal in use
Ja/nee—yes/no, or maybe
Jol—pronounced with a J as in Jim, means play, game, fun—"It's a jol!" "It's a fun!"
Just now—not right now, but in a little while, although that could mean a considerable period of time
Lekker—anything from great! to nice
Loose—if you are asked for "a loose," it means a single cigarette. "Looses" are often sold by pavement vendors, or at traffic lights
Man—this is used as punctuation in white English, particularly as an exclamation "Man, it's hot!"
Now now—almost immediately, although it could mean a considerable period of time
Sefrica and **Sefafticans**—it's an accent thing, simply South Africa and South Africans
Shame, or **Ag, shame**—a gooey expression of pleasure like, perhaps, "Sweet!" when applied to a baby or a puppy
Sharp, or **Sharp sharp**—great! good!
Too much!—especially, *Hau, too much!* May not mean an excessive amount, but rather "plenty." It may also mean "great!"
Viva!—"long live," a revolutionary hangover
Waitron—the ultimate in political correctness, this is neither a waiter nor waitress, both apparently sexist, but a super, gender-free *waitron*!

その他もろもろ。英語として南ア独特の表現もあるが、英語以外の言語から来ている表現も多い。なかでは、"Waitron"がいかにもお国事情を反映していると思えるが、"Just now""Now now"の説明は今ひとつピンとこない。南アフリカの人々は、あまり急がないということだろうか。

資料３　南アフリカ小史

＜引用２＞　17 世紀、オランダ東インド会社の時代

1602 年、オランダ連邦議会は、対東インド貿易の主導権をめぐって前世紀末から乱立していた多数の貿易会社を統合して、オランダ東インド会社（連合東インド会社）の設立を決めた。

新会社は政府から特許を受け、東インドはもちろん、喜望峰以東、マゼラン海峡以西に及ぶ広大な海域と沿岸部で、諸施設（城砦、住宅など）の建設、警察権・課税・裁判を含む行政・司法上の各種権限、条約の締結、宣戦講和などの外交上の権限を認められた。このほか貨幣鋳造の許可までも付与されており、あたかも一つの主権国家と言えるほどで、資本金は、それより二年前に設立されたイギリス東インド会社の 10 倍以上だった。実際それは世界最初の株式会社と言えるものだった。（宮本、松田編　354-5）

⇒当時のオランダは非常に勢いのある国だった。15 世紀末には、既にポルトガルの探検家ディアスが南岸に上陸を果たしていたが、すぐに立ち去った。

さて会社は、設立から 50 年近くも経過した頃、東インド航路の補給基地建設の必要から、ある人物を抜擢して、アフリカ南端ケープの地で指揮を執らせることを決めた。その人物がヤン・ファン・リーベックであった。彼の名はヨーロッパ人による南部アフリカ支配と入植の歴史を象徴するものとして、おそらくのちのセシル・ローズに次いで有名となり、長く人々の記憶に残ることになった。（宮本、松田編　355）

⇒Jan van Riebeeck の肖像が、1993 年まで紙幣のデザインに用いられていた。いわば、古い南アフリカを象徴する人物である。（画像は 20 ランド札）

奴隷制社会となったケープでは、安価な労働力によって農作物の生産があがり、やがて会社経営は黒字に転じた。しかし、年月の経過とともに白人と奴隷の混血が増えるなど、新たな問題も生じてきた。

異人種間の結婚については、ファン・リーベック自身が当初は白人と現地人の結婚を奨励していた。たとえばファン・メールホルフなる人物は、コイコイ人（ホッテントットの蔑称で知られるが、今ではサン人とあわせてコイサンの名称が使われる）の娘を初めて妻にした白人として、その名を歴史に残した。こうした接触が深まるにつれて、グリカ、コラナなどと呼ばれる、白人とコイコイ人やサン人（ブッシュマンの蔑称で知られる）との混血集団が誕生した。1707 年、会社は白人男性と現地女性との結婚を禁止したが、言語的、宗教的、民族的に多様な現地住民はもちろん、アフリカ、アジア各地出身の奴隷を抱え込んだケープ社会は、次第に複雑な人種問題の芽を育てていくことになった。（宮本、松田編 357-9）

＜引用３＞　18 世紀～、イギリス台頭の時代、奴隷解放

［経緯：三度にわたる英蘭戦争（1652 年～74 年）を経て、オランダの海上支配権が衰え、代わりにイギリスが台頭してくる。その後オランダ東インド会社も 1794 年に破産、98 年には解散してしまう。］

ナポレオン戦争中にあったイギリスはこの機を逃さず、ケープがフランスの手に落ちることを懸念して、1795 年にケープを占領、2700 名の軍隊を駐屯させた（第一次ケープ占領）。

1802 年、フランスとの和睦を図る条約（アミアンの和約）によって、ケープは一時的にバタビア共和国［オランダ王国の前身、1795 年成立］に戻されたが、その四年後に英仏戦争が再発し、イギリスは再びケープを占領した（第二次ケープ占領）。[...]

イギリス領ケープ植民地が正式に宣言されたのは、第一次世界大戦勃発のちょうど 100 年前にあたる 1814 年のことだった。以後、土地・法律・教育制度の改革、各種政治組織の再編成、通貨の整理など、全般にオランダの諸制度が改められ、イギリス式の諸政策・制度が実施に移された。

1820 年には、イギリスから約 5000 人の移民が送り込まれた。「1820 年の入植民」として知られるこの大量移民を送り出すことで、イギリス政府は国内の経済問題を外へそらせると同時に、東部フロンティア地方でのオランダ系入植民のそれ以上の拡大を食い止めて、アフリカ人との衝突を避けようとの狙いがあった。1828 年には公用語として英語が採択され、従来のケープ・オランダ語（のちのアフリカーンス語）の地位を低いものにした。

このほかケープ社会に著しい変化を誘発した要因として、コイコイ人に対する虐待の問題や奴隷解放の是非をめぐる議論があった。

宗教的な選民意識を育て、奴隷労働に依存してきた保守的なオランダ系入植民は、比較的リベラルなイギリス政府の諸政策に次第に反発を強め、時代の推移に危機感を深めていった。（宮本、松田編　363-5）

1838 年には奴隷解放令が発布され、労働力の不足にさらに追い打ちをかけた。同年以後四年間に、3 万 9021 人の奴隷が自由を獲得したが、貴重な財産であり、生産手段でもあった奴隷を手放したオランダ系入植民の痛手は大きかった。奴隷解放にともなうイギリス政府の補償は満足には行われず、彼らの間には激しい反イギリス感情が広まっていった。（宮本、松田編　365）

⇒つまりオランダ系を押しのける形でイギリス人が支配権を獲得したわけである。奴隷解放を進めるなどリベラルな一面もあるイギリスは一見正義の味方のようだが、実際には植民地争奪戦において相手に勝ったということに過ぎない。先住のアフリカ人にとっては、どちらでも同じだといえる。

＜引用４＞　19 世紀～、ボーア人の迫害

グレート・トレック（Great Trek）とは、ケープ植民地を離れて、イギリス人の支配の手の届かない自由の天地を求めて、北へ北へと向かったオランダ系入植民（ボーア人とも言う）の大移動のことである。彼らは 1830 年代後半から 40 年代初めにかけて、そのつど 200～300 人の一団を組み、幌馬車を連ねてケープを脱出した。[...]

しかし、このようなボーア人の動きに警戒を強めていたイギリスは、1842 年にナタール共和国を攻め、これを滅ぼした。このため多数のボーア人がナタールを脱出し、オレンジ川の彼方の仲間に合流した。彼らはその後もイギリス勢力と戦い続けながら、1852 年にトランスバール共和国、1854 年にオレンジ自由国を建設した。（宮本、松田編　366-8）

オレンジ自由国のグリカランド・ウェスト内キンバレーの地で、ダイアモンド鉱が発見されたのは 1867 年のことだった。オレンジ自由国とトランスバール共和国という二つのボーア人国家の勢力拡大を警戒し、同時にインド洋戦略を重視していたイギリスは、1871 年にグリカランド・ウェストを、1877 年にはトランスバール共和国を併合してしまった。しかし、その二年後のイサンドルワナの戦いで、イギリ

ス（総兵力約１万）はズールー軍に敗れ、1881 年のマジュバヒルの戦い（第一次ボーア戦争）でもボーア人に敗れるなど、辛酸をなめた。その結果、1881 年のプレトリア条約によってイギリスはトランスバールの自治を認めざるを得なくなり、その内陸部制服の野望は後退したかに見えた。[...]

その後 1899 年から 1902 年にかけて、当時のケープ総督ミルナーは第二次ボーア戦争をしかけて、これら二つのボーア人国家と戦い、これに勝利した。その結果、トランスバールとオレンジ川植民地（自由国）はイギリス王領地となった。次いで 1910 年には、ケープ、ナタール、トランスバール、オレンジ自由の四州は、南アフリカ連邦を結成することになった。

この結果、リンポポ川の南では、スワジランドとバストランド（現レソト）がイギリス保護領として命脈を保ったものの、実質的に南アフリカ全土でアフリカ人は独立を失い、イギリスの支配が完成することになった。（宮本、松田編　372-3）

＜引用５＞　20 世紀、アパルトヘイトの展開

アパルトヘイト[apartheid, 発音は apart-hate]とは、1925 年以来、南アフリカで英語と並んで公用語の地位を獲得してきたアフリカーンス語（元のケープ・オランダ語）で「隔離」を意味している。それは、有色人、特にアフリカ黒人を劣等と決めつける人種差別思考の上に成り立つ考え方であったが、経済的には、白人には高級職種と熟練労働を、白人以外には低賃金職種と非熟練労働をあてがう搾取のメカニズムでもあった。それは、南アフリカ資本主義の発達を支えることになる根本原理でもあった。

1948 年の総選挙でこのアパルトヘイトをスローガンに掲げ、主として保守的なオランダ系白人（アフリカーナー）［Afrikaner］に支持を訴えた国民党が政権を握ってから、「集団地域法」（人種別居住を定めたもの）、「人口登録法」（住民を白人・カラード・原住民に分類。カラードにはアジア人も含まれる。原住民はのちにバンツー、さらに黒人と呼ばれた）、「投票者分離代表法」（非白人の参政権を奪うもの）、「バンツー教育法」（人種別教育を定め、さらにアフリカ人の教育を民族［部族］単位ごとに分断するもの）、「共産主義弾圧法」、「破壊活動防止法」などが矢継ぎ早に法制化された。1959 年には全面的アパルトヘイト構想が打ち出され（「バンツー自治促進法」）、民族（部族）単位ごとにアフリカ人に自治を付与しようという分離政策が実施された。これによりアフリカ人地域は 10 に分割され、外交・防衛・治安などの権限を除いて、各地域に自治を付与しようとの構想（バンツースタン計画）がスタートした。[...] しかし、国際社会はこれらのどれ一つも独立国家として認めなかった。（宮本、松田編　375-6）

第二次大戦後まもなく、アジアでは植民地主義から解放されて独立が達成された。1960 年代には、世界中が人種差別撤廃へ向けて大きく動きだした。[...] 人種差別撤廃は国際的な道徳的規範となりつつあった。

だが、こうした世界の動きに逆行して、南アフリカ政府は徹底した人種隔離政策（アパルトヘイト）を推し進めるための法案を作り、白人の利権を必死で守ろうとした。[...] 1961 年、こうした法律を国家基盤に据えて、南アフリカ共和国が誕生した。それは、イギリス連邦からの離脱を意味し、国内的にはアフリカ人を人種別のホームランドに隔離し、白人少数者が独裁的にアフリカ人多数を巧妙に支配することを宣言するものだった。（宮本、松田編　377-8）

⇒1910 年の連邦成立を機にイギリスとのつながりは弱くなり、オランダ系も再び社会の主流に再進出を果たしていた。1961 年の共和制移行は、その流れを決定的に推し進めることになった。アパルトヘイ

トの背後にも、こうした保守的アフリカーナーの政治力が働いており、南アフリカ史を通じて、オランダ系＝保守派という図式は根強く残ったのである。注目したいポイントは、南アフリカの人種差別は、もともとは土地や資源の奪い合いから始まり、基本的に経済的原理に基づくものであったことと（宗教的な意味合いはあまり強くない）、特にアパルトヘイト期の南アフリカにとっては国際社会との関係が常に大きなテーマであったことの二つ。

＜補足：南アフリカにおける「土地」の重要性について＞

Land, this most primary of all resources, has been an issue for two thousand years. There has always been disputed ownership of land. The original inhabitants, the San, believed no one could own the land, then the KhoiKhoi and later the Blacks arrived and needed land for their cattle, and then, of course, came the Whites. Land remains perhaps the most contentious issue today. (Holt-Biddle 39)

＜引用６＞　20 世紀、アパルトヘイトの廃絶と新南アフリカの誕生

アフリカ人の側はこうした馬鹿げた法律にわざと違反した。夜間外出禁止令やバス法などを無視して、白人の街を無言で行進し、進んで逮捕されたのだった。こうした非暴力抵抗は、不服従闘争として知られ、マハトマ・ガンジーが南アフリカで体験した人種差別への抗議から始まり、インド独立の闘いでも、アメリカ公民権闘争でも用いられた戦略だった。

人々は不服従の挑戦をし、アフリカ人としての人種の誇り、自立精神、自己主張を基盤にした闘いの哲学を発展させた。アフリカ民族会議（ANC）は、白人支配層の意識が変わるのを待つのではなく、積極的な闘争を通じてアフリカ人の権利を獲得する運動へと方針を転換させていた。（宮本、松田編 378-9）

⇒その方法論をみても、アパルトヘイトへの反抗は、世界的な流れと協調するものだったことがわかる。

その後、政府の弾圧が強化するにつれ、アフリカ人青年層の間で不服従闘争に不満が高まっていく。1985 年、ロバート・ソブクウェは ANC と袂を分かち、パン・アフリカニスト会議（PAC）を結成し、「アフリカ人による、アフリカ人のための、アフリカ人の政府」をスローガンに掲げた。（宮本、松田編　380）

⇒アメリカ公民権運動でも、キング牧師からマルコム X、ブラックパンサー党と、次第に武闘派へと運動のスタイルが変わっていった。この点にも、特にアメリカとの類似性の強さがうかがえる。PAC のスローガンは、言うまでもなくリンカーンのゲティスバーグ演説のパロディ。

この頃には ANC は非暴力抵抗運動では勝ち目がないと見て、暴力を避けることはできないと判断した。1961 年 6 月、マンデラらは政府との全面対決に向けて、ANC 内部組織の再編成に取り組み、武装闘争部隊「ウムコント・ウェ・シズ」（「民族の槍」の意）を結成した。[...]

1962 年、マンデラは「東および中央アフリカのためのパン・アフリカ自由運動」の総会に出席するために、パスポートを持たずにアジスアベバ（エチオピア）に向かった。このとき初めてマンデラは、独立の熱気にむせ返るアフリカ諸国を肌で感じ取り、これまで経験したことのない安堵感と解放されたアフリカへの帰属意識を感じた。のちにマンデラに苛酷な獄中生活を耐えさせたのは、この時に実感したアフリカ民族主義への揺るぎない確信だったという。（宮本、松田編　382-3）

⇒ナショナリズムあるいはトライバリズム（tribalism）の高揚は、20 世紀の民族独立運動全般に見られる傾向。「アフリカ人」というアイデンティティは、アメリカ黒人やカリブ海地域の黒人たちにも共有されることになった。

［...］1960 年代の後半、スティーヴ・ビコら若い大学生が指導する黒人意識運動が台頭し、アフリカ人若者の意識に革命を起こした。［...］それまで ANC の活動の中心を担ってきた白人リベラル派の考えは、白人が作った社会体制内での改良を進めようとするもので、人種差別を根本的に解決するものではないと考えられた。それに対してこの運動は、アフリカ人を自らの民族意識に目覚めさせ、アフリカ人としての誇りを回復させた点で大きく評価され、それまでの闘いの流れを変えたと言える。

1976 年、政府はアフリカ人中等教育の教授用言語として、英語と並んで、アフリカーンス語を大幅に導入しようとした。しかし黒人意識運動の影響を受けた中高生たちは、支配者の言語であるアフリカーンス語による教育に反対して、抗議行動に立ち上がった［...］

1977 年 9 月、ビコは拷問を受け、惨殺された。警察はハンガーストライキによる自然死だと発表した。彼の死因に疑問と抗議の声が上がった。南アフリカは多数の国々から国交断絶と経済制裁を受け、国際社会からますます孤立していった。（宮本、松田編　384-5）

⇒ビコの事件はアパルトヘイトの暗部を世界に知らしめる象徴的な出来事だった。ピーター・ガブリエルが「ビコ」という歌を発表した他、日本でもザ・ブルーハーツの「青空」という反アパルトヘイト・ソングが作られるなど、ポップカルチャーをも巻き込んでの世界的非難が巻き起こったことはご承知のとおりである。また 1987 年の映画『遠い夜明け（*Cry Freedom*）』は、まさにビコの事件を扱ったものである。

この頃［1980 年代半ば］には世界中から、マンデラ釈放を最高のシンボルとして反アパルトヘイト運動が盛り上がっていた。マンデラは、まさしく南アフリカの解放運動の象徴として人々をつなげていた。［...］1989 年、病気で倒れたボタ大統領の後任として、フレデリック・デクラークが大統領に就任した。以来、事態は急転した。1990 年 2 月 11 日、マンデラは無条件で釈放された。［...］

1991 年 1 月 12 日、政府は 19 の政党とともに民主南アフリカ会議（CODESA）を開き、新憲法制定のための討議を開始した。長い交渉と議論の末にようやく、1994 年 4 月、南アフリカ史上初めて、全人種が参加する制憲議会選挙が実施された。［...］世界中が注目する中、ANC が圧倒的勝利を収めてマンデラが大統領に選ばれ、新生南アフリカがスタートした。（宮本、松田編　388-9）

⇒ファン・リーベックが古い南アフリカの象徴だとすれば、ネルソン・マンデラは新南アフリカの象徴である。現在の南アフリカの法的制度が整ったのは、マンデラの大統領就任以降だから、見方によっては、南アフリカは非常に新しい国だといえる。一方でこの地域はもともと人類の祖先が最初に生まれた場所、人類の故郷でもあるわけで、先住民族の頃から考えるならば、非常に歴史の古い場所でもある。いずれにしても、現在の南アフリカは、先にリスニング練習でも触れたように、「現在進行」で変化に直面している国であることは間違いない。次に、その南アフリカがいかにして一つの国として統一されているのかを見ておきたい。

資料４

＜引用７＞　レインボウ・ネイション

“The Rainbow Nation” was a term first used by Nobel Prize Winner Archbishop Desmond Tutu, around the time of the birth of the new South Africa, and therefore a new nation. The term is a celebration of the distinctive racial and cultural mix that is South Africa. . . .

Although there are around 46.9 million South Africans, it is safe to say that there is no such thing as a typical South African. There are, for example, eleven official languages, but many more are spoken, and there is a great diversity of racial types, tribes, cultures, religions, and ways of doing things. The status of the population is currently: Blacks, 37.2 million, or 79.4 percent; Whites 4.4 million, or 9.3 percent; Coloreds 4.1 million, or 8.8 percent; Asians 1.1 million, or 2.5 percent. (Holt-Biddle 27)

⇒虹のように多様な人種や文化が共存するレインボウ・ネイションであるために、「典型的南アフリカ人」というものは存在しないのである。それは良いとしても、異文化理解のために調査する身としては、いかにも南アフリカらしい文化的特色がないというのは困ったことである。しかし、中心となるものがないということは、かえってその何かが必要とされるということでもある（私たちは、その例をオーストラリアに見た）。

＜引用８＞　象徴としてのマンデラ、新旧南アフリカの統合

In a country of such diversity, unifying symbols are clearly of great importance. There was much uncertainty in many communities about the future of the country when in February 1990 President F. W. de Klerk announced the lifting of the ban on the ANC and the release of political prisoners, including the most famous of them all, Nelson Mandela. Nelson Rolihlahla Mandela, now affectionately known as Madiba by virtually all South Africans (*Madiba* basically means, respectfully, “Old Man,” but it is also the name of his Xhosa clan), had been in prison for twenty-seven years. . . . Madiba has become the Grand Old Man of African statesmanship, and is universally recognized as the father of the new South Africa. (Holt-Biddle 47-8)

⇒ “Old Man” は普通老人や父親を指すわけだが、ここでは「老師」というようなニュアンスだろうか。「Old＝老」が良い意味で用いられるのは、何も東洋だけに限ったことではなく、アフリカの部族社会では、年長者を敬い共同体の中心に置くという伝統がある。一方では、それらの部族社会では父権制が一般的であり、“Old Man” にはそうした権威主義的な意味合いもなくはない。象徴としてのマンデラが絶妙なのは、（彼の人種的バックグラウンドゆえに）そうした部族的な伝統も感じさせつつ、父親的な権威を力強いリーダーシップと結びつけ、現代のニーズにマッチさせたことだろう。旧から新へと移行する過渡期に、まさに必要とされた人材だったといえる。

＜引用９＞　意識の変化

キャンペーン・ロゴ

There is a campaign, called "Proudly South African," aimed at promoting South African companies, products, and services that are helping to create much-needed jobs and economic growth in the country. Proudly South Africa is not, as it might seem, jingoistic,[11] but rather a genuine pride in things South African. . . .

South Africans of all backgrounds are justifiably proud of what this new nation has achieved. It is a marked attitude that visitors cannot help but notice. In the old days there was a certain cynicism to the question, "So what do you think of South Africa?" usually asked of someone who had been in the country for less than an hour, because in the old days everyone seemed to be an expert on South Africa and its problems.[12] Today, the question is far more likely to be genuine and based on an obvious pride in the country. . . .

The nature of Proudly South African, of patriotism, has changed in South Africa. There was a time when people were proud to be South African, but they might also have been more proud to be a Black, or an Afrikaner, or a member of any of the other many groups. Today, Black South Africans are overtly proud to be Africans, by which is meant a citizen of the continent, then proudly South African, then proudly Zulu, Xhosa, of Swazi. The same can be said for just about everyone else. Those unifying symbols have generally done their work, and South Africans now tend to be South Africans first, then proud members of their own community. (Holt-Biddle 50-2)

註 11　「愛国主義的な、排外的な」。第三段落に出てくる"patriotism"と違い、"jingoism"は、愛国心の裏返しとして外国のものや人々を見下す、あるいは警戒する形で排除するという意味がある。

註 12　ここもやはり、南アフリカが長年世界の関心（と非難）の的であったことを指している。

⇒これも統合のためのシンボルの一つである。こうしたシンボルの大きな効果は、まず感情に訴えかけることだろう。誇りとすべき南アフリカの現実が先にあるのではなく、誇りを持つことでそれが現実になるということである。大声で笑うと楽しい気分になるとか、健康に良いというのと原理的には同じだ。最後の段落にもあるように、その効果は確実に表れているようだ。

＜引用 10＞　そしてやはりスポーツ

South Africans are without doubt a spots-mad nation. The big team sports, like football (soccer), rugby, and cricket, have a loyal following, both at matches and on television and radio, but there is also a loyal following for other sports, such as golf, tennis, and swimming. Remember that South Africa has over the years produced some of the world's greats, both teams and individuals, and the country is proud of that. Attend a soccer match—it's a real South African experience (35,000 Zulus and 35,000 Xhosas shouting for their respective teams!), but make sure you go in an organized group, as it can get quite exuberant! (Holt-Biddle 126)

⇒最近のツアーゴルフの中継などを観ていても、南アフリカのゴルファーの活躍は目覚ましい。またラグビーに関しても、オーストラリア、ニュージーランドと並んで三強の一角を担い、本場イギリスが目立たなくなって久しい。イギリスとの関係が深い新興国は、スポーツに夢中になる傾向があるようだ。

資料５　ケーススタディ

＜引用 11＞　娘の暮らしぶりと南アフリカ史の関係

Dog and gun; bread in the oven and a crop in the earth. Curious that he and her mother, cityfolk, intellectuals, should have produced this throwback, this sturdy young settler. But perhaps it was not they who produced her: perhaps history had the larger share. (Coetzee 60-1)

A frontier farmer of the new breed. In the old days, cattle and maize. Today, dogs and daffodils. The more things change the more they remain the same. History repeating itself, though in a more modest vein. Perhaps history has learned a lesson. (Coetzee 62)

⇒David から見て、田舎の農場で暮らす娘の Lucy は、ともに都会人である両親から生まれたとは思えない。ここで彼女が settler（移住者）と呼ばれている点に注目。移住者植民地であり、ヨーロッパ人同士、あるいは先住民との土地の争奪戦を繰り広げてきた南アフリカにとって、この言葉は特別な意味を持ち、そうした歴史を想起させるイメージとなっている（frontier farmer というのも似たようなイメージである）。Lucy は、南アフリカの歴史が産み落とした子供であるという風に描写されている。あるいは、若い世代の Lucy がその歴史に対して責任を負わされていると言い換えることもできる。

＜引用 12＞　レイプ事件の後――「借りを返す」

She broods a long while before she answers. “But isn’t there another way of looking at it, David? What if. . . what if *that* is the price one has to pay for staying on? Perhaps that is how they look at it; perhaps that is how I should look at it too. They see me as owing something. They see themselves as debt collectors, tax collectors. Why should I be allowed to live here without paying? Perhaps that is what they tell themselves.” (Coetzee 158)

⇒再度の襲撃に怯える David と Lucy。David は娘に、農場を去るよう勧める。しかし Lucy は、白人の settler である自分には、黒人のレイプ犯たちに対して借りがあると主張する。つまり、彼らは本来の権利を取り戻すためにやってくるのであり、自分にはそれを支払う責任があるということだ。したがってここには、いち白人女性と黒人たちの関係を越えた、南アフリカ植民史の全体が投影されているのである。

＜引用 13＞　Melanie の父親との面会――David の弁解

In my own terms, I am being punished for what happened between myself and your daughter. I am sunk into a state of disgrace from which it will not be easy to lift myself. It is not a punishment I have refused. I do not murmur against it. On the contrary, I am living it out from day to day, trying to accept disgrace as my state of being. (Coetzee 172)

⇒David は、罪を認め日々恥辱を感じながら生きていると主張する。しかし小説を通して彼の人柄を知れば、これも体の良い言い訳にしか聞こえない。Lucy が罪悪感を認めてそれに対処しようとするのに対して、David は悲劇の英雄を気取って責任逃れを図るのである。両者の態度の違いからは、ポスト・アパルトヘイトの南アフリカ白人の複雑な立場と感情が浮かび上がる。誇りを持って前進することも必要だが、過去とどう向き合うかも、今後の南アフリカが避けては通れない問題だと言える。

資料１　リスニング練習

Interview with Seán, age 43 (Ireland)

[In answering the interviewer's question as to whether he plans to live in Japan forever]

No, we won't stay forever, but it's. . . it's relatively flexible. It depends on, it depends on what we want to do, and it depends on what the company wants to do, but as long as there's a sort of a common understanding, then. . . But we're certainly not on a fixed block like it is, for other people it's very much fixed, for us it's not really fixed.

I think Japan is probably one of the more interesting places to live, and I think at least for us it suits us because Japan is a country which, on the one hand is very unique, but on the other hand it's very flexible. It tends to accommodate a high degree of flexibility, if you compare that to, let's say, Germany, where Germany is very, very rigid. Germany would be, from our perspective, much more difficult to live in Germany than in Japan. Germany is a very structured society, everything must fit in its place, if you like. Japan, while it's a, it's a structured culture to a certain extent, there's a huge gray zone.

So yeah, Wicklow is a sort of a mountain area. It's about 70-80 kilometers from Dublin. But even within a county like Wicklow, there's mountains in the middle and the accent on the west of the mountains and the east of the mountains is very different. And <u>even though Ireland is not that big a country, I mean the variation of the accent throughout the country is very significant</u>,[1] and. . . Because <u>English in Ireland is. . . is imposed</u>,[2] and <u>there's also a Gaelic language behind it</u>,[3] we tend to use a lot of words that are Gaelic mixed into it or derived from the Gaelic words, so that also makes it difficult sometimes for people to understand.

註１　「アイルランドはそれほど大きな国ではありませんが、各地のアクセントの違いはとても顕著です」。国土面積のことだけでなく、人口密度の低さからもそう言える。アクセントの違いは、この夫婦の話す英語の違いにも聞き取ることができる。

註２　「アイルランドの英語は. . .（イングランドに）押しつけられたもの」。当然予想されることだが、強大な隣国の存在は、アイルランドの歴史と文化形成に大きな影響を及ぼしてきた。特に影響が大きかったのは、言語と宗教の分野である。

註３　「その背景にはゲール語もあります」。ゲール語というのは、

<u>The Gaelic language</u>, generally called <u>Irish</u>, is <u>the oldest of the group of Celtic languages</u> that includes Scots Gaelic, Welsh, and Breton, and like them has characteristics that seem strange to English speakers. For instance Gaelic is inflected at the start of words, not the end. So, for example, the word *bad* ("bard") means boat: "his boat" is *a bad*, but "her boat" sounds completely different—*a bhad* ("vard")—and "their boat" is *a mbad* ("mard"), different again! (Scotney 89)

とあるように、ケルト系の言語のひとつで、英語とはかなりかけ離れた言語体系に属するものである。ゲール語も歴史のなかで紆余曲折を経てきたが、後ほど確認するように、現代アイルランド社会の様々な分野でゲール語が使用されている。

Interview with Siobhan, age 38 (Ireland)

In Cork city, a very small city in Ireland. It's the southwest. And Kinsale is very famous around the world, people know it. And I went to school in Beaumont, an all-girls school. I had five sisters, no brothers. Yeah, and we just really went to school, my mum didn't drive so we walked everywhere we had to go. And everything is so central, you go to school ten-minutes, five-minutes walk from your house, the shop is five-minutes walk from your house, the local shop. Yeah, everything is in your area that you need to do.

If you go to Ireland now, it's more multicultural.[4] You have a lot of Polish in Ireland. Yeah, when we were growing up it was all Irish,[5] like my kids used to say to Sean, like, how many Irish were in your class, but of course it was all Irish people in Irish schools, there was no, nobody else there. And even if you saw a foreigner down the street you'd recognize them. But today it's changed. Because just different colored skins, different color, different accents, different languages on the street, you never heard this in Cork. And now we go back after just. . . is it, yeah, since three years. . . it's changed. It's become more multicultural, more. . . yeah. Maybe being part of the EU?[6]

And we also had the Celtic Tiger, which was a boom where people started coming into Ireland rather than, you know, emigration out of it.[7] Yeah, the lifestyle started going up. I think education, everyone has now has third-level education in Ireland, a lot of people.

註 4　「いろんな文化が入ってきている」。これは英語圏の諸国に当てはまることだが、アイルランドの場合は特にこの 30 年ほどの変化の急激さが群を抜いている。

註 5　「私たちが子供のころはまわりはみんなアイルランド人でした」。「アイルランド人」の定義もいろいろあるとは思うが、それについては後ほど考えてみたい。

註 6　「EU の加盟国だからでしょうかね？」。加盟は 1972 年。アイルランドと北アイルランド（連合王国の一部として）が共に加盟した。ヨーロッパとの関係が重要になり、その影響がアイルランドの社会に大きな変化を引き起こすことになった。

註 7　「『ケルトの虎』と呼ばれる好景気もあって、アイルランドから人びとが出ていくというより、人々がアイルランドにやって来るようになりました」。「ケルトの虎」は、1990 年代～2000 年代初めにアイルランドが経験した急激な経済発展を指す。その 10 年前からアジア諸国に見られた好景気を指す「アジアの虎」（Asian Tiger）をもじったもの。上に挙げた EU 加盟とあいまって、アイルランドの産業の構造的変化やグローバル経済への参入、海外資本の流入などの要因が複雑に作用して起きた現象。現在は勢いが弱まってきているとはいえ、これがアイルランド社会を劇的に変えてしまったことは疑いようがない。また、移民はアイルランドにとって常に重要なファクターだったが、19 世紀以降に問題とされたのが出ていく方の移民（emigrants）なのに対して、現在では入ってくる方の移民（immigrants）が重要になっている。面白いのは、この逆転現象がある意味で大昔に起こったことの繰り返しとなっていることだ。それについても後述する。

※ここまでのところで「古くて新しい国」の意味が少しは伝わったと思う。次にアイルランドの基本的データを確認して、さらにポイントを明確にしたい。

資料２　Key Facts of Ireland

＜アイルランド（The Republic of Ireland）＞

・**名称：Eire** または **Ireland**――1937 年制定の憲法に、“The name of the states is Eire or in the English language, Ireland” と明記されている。共和国（The Republic of）は付けないのが通例で、これは北アイルランドも含め統一されて初めて「共和国」である、という意識の表れだとされる。Eire は AIR-uh（エィア）と発音される。アイルランドの古い呼称だが、由来はよく分からない。

・**公用語：**英語、ゲール語

・**通貨：**ユーロ

・**宗教：**9 割がローマ・カトリックで、残りは主にイギリス国教会に属する

・**人口**：約 370 万人（2006 年の時点で）。そのうちの 100 万人近くが首都ダブリンに集中している。

・**政治システム：**議会制民主主義。上下二院からなる議会は **Oireachtas**（ERR-ockh-tuss、エロクタス）と呼ばれ、上院が **Seanad Eireann**（SHAN-ud-AIR-un、シャナデエィラン）、下院が **Dail Eireann**（DAW-il AIR-un、ドウィル・エィラン）。首相は **Taoiseach**（TEE-shock、ティーショック）で、現在は **Fianna Fail** 党（「我々だけ」を意味する。発音は Fina-fall、ファイナフォール）の Bertie Ahern が務めている。それとは別に選挙によって選ばれる大統領職（President）もあるが、政治上の権限は実質的に持たない、象徴的役職である。1990 年に Mary Robinson、その後任に Mary McAleese と、続けて女性大統領が誕生したことは、大きな話題となった。

＜北アイルランド（Northern Ireland）＞

・**名称**：**Province of Northern Ireland**。もともとの県名をとって Ulster とも呼ばれるが、アルスター県の全てが含まれているわけではないので正確ではない。現在もイギリス連合王国の一部となっている。

・**公用語**：英語

・**通貨**：イギリス・ポンド（Pound Sterling）

・**宗教**：6 割がプロテスタント（イギリス国教会の流れを組むアイルランド国教会と、長老派［Presbyterian］）で、4 割がカトリック

・**人口**：約 160 万人（2006 年の時点で）。主に東部に人口が集中し、首都ベルファストは 30 万人都市である。

・**政治システム：**イギリス連合王国の一員として、英国議会に 17 名の代表を送っている。

※まず基本的なこととして、アイルランドが南北に分かれていることは確認しておきたい。上のデータからも分かるように、両者はかなり異なった社会体制を持つ、別の国である。しかしそれと同時に、南北が統一するのか別の道を行くのかという問いは、今もなお重大な問題となっている。また南北合わせても 500 万そこそこの人口だが、国外に暮らすアイルランド系の人口は、優に 7000 万を超えるといわれる。単に国内だけを見ていても、アイルランドの全容は理解できないだろう。

なお授業の中でアイルランドという場合は、現在のことであれば主に南の方を指すが、南北の分離以前のことであれば、全体を指すこともある。

続いて、アイルランド人の国民性を概観する。

資料３　アイルランド人の国民性

＜引用１＞　アイルランド人の国民性

If the Irish do not seem austere,[8] remember they are capable of going on hunger strike and "suffering infinite pains" to the extent of starving themselves to death for a cause they believe in.

They are often holy, and Ireland is a land of saints, but also one of scholars, writes, poets, and playwrights. The Irish are proud of their ancient and rich culture: poetry, drama, music, singing, and dance are not something special to be separated as "the Arts," but part of everyday life[9] shared by the whole community. They are the means by which they express their own identity.

Then there is Irish folklore, with its heroes, larger than life characters such as Finn McCool; its stories of the Leprechauns and other fairies. People may or may not believe in them, but they are important as part of the national consciousness.

Are the Irish vainglorious?[10] They speak proudly of their status as "a nation once again" and of the centuries-long struggle that won that freedom. You will find the ordinary people of Ireland much more aware of their nation's history than are most Europeans. . . .

Their religion matters to the Irish. Again history provides the key. For years the penal laws proscribed Catholicism, yet 90 percent of those in the southern counties of Ireland remained true to the old faith. More people attend church in Ireland than anywhere else in Europe. And not just Catholics: the Protestants of the North also see their faith as a central reality in their lives and in their identity as a community.

Everyone in Ireland speaks English, but 100,000 or so also speak the ancient Irish language and everyone learns it in school. And if some have resented the long hours spent studying its complex grammar, they would still hate to see it disappear. They like to use a few familiar phrases in everyday conversation—even if it is only to wish you *slainte* ("SLARN-cha"), good health! On the other hand, you may sometimes see someone with a little gold badge in their lapel; this is the *fainne* ("FARN-nya"), a symbol that they are a fluent Irish speaker. (Scotney 61-3)

cvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvvccccccc

註８　「厳格な、質素な」。厳しい自然環境や、イギリスによる圧政に耐えしのんできたことから、こうした国民性が培われた。

註９　通常いわゆる「芸術」と考えられる文化活動において、アイルランドは他のヨーロッパ諸国と比べてもひときわ輝かしい伝統を誇る。しかし、そうした「芸術」は特別なものとは見なされず、日常生活の一部とされてきた。現代アイルランドにおいては、こうした文化的生産物が、大きな経済効果を生むコンテンツとして重要視される。例えば、芸術活動による所得は税金を免除されるなどの優遇措置がとられ、国内での芸術活動の振興と同時に、海外から芸術家を呼び寄せる誘因ともなっている。

註 10　「うぬぼれの強い」。これはむしろ、本文中にもあるように、自分たちの伝統や文化、歴史への関心の強さと考えるほうが良い。

⇒その他、宗教の大切さやゲール語の現状について言及されている。そのあたりは別項でより詳しく見ていくことにする。

＜引用２＞　アイルランド人は酒好き？

近所においしそうなレストランなりパブがあれば、そこに行ってビールを飲み、夕食を食べる。食前か食後に一杯――二杯でもいいけれど――アイリッシュ・ウィスキーを飲む。

“You need cube?（氷はほしい？）”と尋ねられる。

“No thanks. With just water, please.（いや、水だけでけっこう）”と答える。

主人は「うむうむ」という顔でにっこりと微笑む。おおぶりなグラスにアイリッシュ・ウィスキーがたっぷりとダブルはいって出てくる（トリプルくらいはあるな）。そのとなりには、小さな水差しに入った水がついてくる。もちろんタップ・ウォーター（水道の水）だ。ミネラル・ウォーターなどという無粋なものは出てこない。タップ・ウォーターのほうが生き生きとして、ずっとうまいのだから。(村上　80)

要するにそこには「これが正しい」という、いわば定番的なビールのサーブ・スタイルはない。そのパブの主人が「うちゃ、これで正しいけん」と思えば、それがそのまま局地的に正しいことになる。というわけで、このアイルランド世界には無数のパブ的正義が並立的に存在している。これほど人口が少ない国で、これだけたくさんのパブがあってよくまあやっていけるものだと、僕なんかは感心してしまうのだけれど、でもちゃんと成り立っているのだからたいしたものだ。よほどみんなよく酒を飲むのだろう。よほどみんな好みがはっきりしているのだろう。（村上　93-6）

Nobody works harder to promote an image of wild excess surrounding Irish pub culture than the Irish themselves. However, the sober statistics tell another story: the Irish are among the most modest consumers of alcohol in the world. There are a number of reasons for this. The Irish are slow drinkers and can nurse a pint, or a whiskey and water, for a very long time. Then the Irish do not as a rule drink every day, or with their meals. And the Catholic temperance movement, the Pioneers, is quite influential.

A reflection of the changes in Irish society and attitudes is the way, in the last thirty years, that Irish pubs have been transformed from essentially male-dominated drinking haunts to social centers where both sexes are equally welcome. (Scotney 131)

⇒アイルランド人とアルコールは切っても切れない関係にあると考えられている。また一般にスコッチが有名なウイスキーも、もともとはアイルランド発祥であり、ギネス・ビールはアイルランドを象徴する飲み物となっている。しかし、アイルランド人が大酒呑みだというのは、ややステレオタイプ的なイメージかもしれない。何しろカトリック教国であるアイルランドでは、アメリカに負けず劣らず禁酒運動が盛んだった（今でも盛んである）わけで、宗教的な抑制は強く働いていると考えられるからだ。むしろ、酒を楽しみ、友人と飲み語り合う時間を楽しむような「パブ文化」の方に注目すべきだろう。オーストラリアと同じように、アイルランドのパブでの社交は、伝統的に男性中心の文化を育ててきた（皮肉にも、修道院も同様の役割を果たした）が、最近では女性の社会進出や性の解放も進み、そうした旧来の文化は大きく様変わりしてきている。また、パブは大衆文化の中心として、歌や踊りを楽しみ、物語をやり取りする空間でもあった。それを理解することは、アイルランドを理解するための近道かもしれない。

資料４　アイルランドの歴史と風土

＜引用３＞　イギリスとは別の国

アイルランドは有史以前から人々が居住していた古い国であるが、長い間、イギリスの一部としてその支配下にあり、独立したのは 20 世紀になってからであるためか、現在でもアングロ・サクソンとは異なる独特の文化を持つ、イギリスとは別の国であることを理解していない人がいるのは残念である。（波多野　ii）

⇒1801 年にイギリス連合に組み込まれたが、経済大国イギリスとの自由貿易圏形成はアイルランドにとって有利に働かず、逆に地場産業としての農業が衰退するなどの思わしくない結果を招いた。

＜引用４＞　アイルランドの風土

古代からアイルランドは山地と森に囲まれた沼地が多く、耕作にはあまり適していなかったが、夏の間は牛、馬、羊などの放牧に向いていた。こうした肥沃とはいえない国土がアイルランド人の性格・特徴の形成に少なからぬ影響を与えてきたことは否定できない。彼らは陽気で、あまり物事にこだわらないようにみえる半面、消極的で運命論者のようなところがある。（波多野　3）

⇒土地がやせている半面雨が多く、穀物栽培には向かない（だから、私たちが思うほどビールの生産が盛んなわけではない）。しかし至るところに草が生い茂っており、牧畜は盛んに行われている。こうした土地でも育つジャガイモが昔から主食として重宝されてきたが、そのことがある重大な歴史的事件と関わってくることになる。一方で沼地に多く見られる「ピート」（peat＝泥炭）は燃料となるだけでなく、アイリッシュ・ウィスキーの独特の風味（「スモーキーな」といわれる）を醸し出すのに一役買っている。

＜引用５＞　エメラルド・グリーンの島

極端な言い方をするなら、アイルランドから戻ってきてはじめて、「ああ、アイルランドってほんとうに美しい国だったんだな」と実感する。もちろんそこに実際にいるときだって、「美しいところだな」ということは頭では理解できているのだけど、その美しさがしみじみと身にしみてわかるのは、むしろそこを離れたあとのことだ。［...］僕らは、「ああ、アイルランドの緑はなんと鮮やかで、なんと広く、なんと深かったのだろう」と溜息をついて思い返すことになるわけだ。（村上　73-6）

Ireland is famous for its greenness, and this greenness has become part of the Irish national identity: the national flag is green, white, and orange; the sportsmen and women play in green; even the telephone boxes are green. (Scotney 14)

シャムロック：竪琴（ハープ）とともに、アイルランドを象徴するものとして紋章化されているマメ科の植物で、我が国の桜と同様、国花と考えられている。シロツメクサ、コメツブツメクサ、ウマゴヤシ、ミヤマカタバミなどともいう。三つ葉のクローバーに似ているが、形が若干小さい。アイルランド人はこのシャムロックの葉をセント・パトリック・デーに胸に飾りつけて祝う。

この植物はアイルランドの広い原野を覆うように至るところに拡がっており、人びとの目を楽しませてくれる。この国が「エメラルド・グリーンの島」と呼ばれるようになった所以である。5 世紀の昔、聖パトリックがキリスト教を布教するために、アイルランドにやってきたとき、彼はまだ異教徒であった人々にシャムロックを見せて「葉が三つに分かれているのは、父（神）と子（キリスト）と聖霊が三位一体（trinity）であることを示しているのだ」と説教したという。首都ダブリンにあるトリニティ・カレッジは創立 400 年の名門大学であるが、その名に「三位一体」を冠しているところが、いかにも模範的カトリック国であるであるアイルランドらしい。

シャムロックの生えている原野は、アイルランド人にとって故郷の思い出につながるものらしく、アイルランド独立運動に関わった国事犯を描いたグレゴリー夫人の戯曲『月の出』の中で、この国事犯が「シャムロックの歌」を歌うシーンがあり、これがなかなか感動的である。（波多野　41）

⇒緑色がアイルランドの象徴であるのは有名で、それはシャムロックとももちろん無関係ではない。ハリー・ポッターのシリーズ 4 作目、*Harry Potter and the Goblet of Fire*（2000）の序盤で描かれる魔法使いのスポーツ（Quidditch）のワールドカップの場面でも、シャムロックや緑色がアイルランド的なものとして使われている。またこれらは、アイルランドの守護聖人である聖パトリックとの縁も深い。聖パトリックについては後述する。また、アイルランドが緑に恵まれているのには、雨が多いことも影響している。

もう一点重要なことは、こうした故郷の自然景観が、アイルランドを離れた者にとって忘れがたいイメージとなって残り続けることである。アイルランドの放つ楽園的なイメージは、外部の人々をひきつけるだけでなく（次の引用を参照）、国外に住むアイルランド系の人々と本国の間の連帯感を強めてきた。

アイルランドが 80 ないし 100 の大小封建諸侯国に分かれて相争っていた、8 世紀ごろのスカンディナヴィアの状況はあまりよくわかっていない。このため、なぜヴァイキングが大挙してアイルランドに来寇し始めたのかも、必ずしも明らかではない。しかし当時、アイルランドで高い教育を受けたあと、ヨーロッパ各地で布教に当たっていたアイルランド人宣教師が故国を偲んで書き残したさまざまな望郷の文書には、いかにアイルランドが素晴らしい国であるかが記述されており、アイルランドを知らない外国人がこれを読めば、きっと憧れたに違いないと思われる。（波多野　29）

＜引用６＞　1845 年の大飢饉――アイルランドを揺るがした大事件

［状況説明：過去にもたびたび飢饉に見舞われてきたアイルランドだが、1845 年から三年にわたって続いたジャガイモの不作（ジャガイモを枯らす病気が広まった）は、決定的な打撃となった。］

人々は生き延びるために、先を争ってイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドへ移民となって出ていった。それは移民というよりは難民というほうが相応しかった。今日のボート・ピープル同様、「棺桶船」［coffin ship］といわれたほど粗末な船に乗って国外に脱出する者も跡を絶たなかった。そのうち五分の一は目的地に達する前に死亡したといわれる。

こうした飢饉と国外脱出の結果、アイルランドの人口はみるみるうちに半分以下に激減したが、その

後遺症はきわめて深刻で、今日に至るまで続いており、アイルランドの人口の停滞を招いている。1990年現在、アイルランドの人口は350万人強、北アイルランドを入れても500万人そこそこといった状態であるが、一方、アメリカには4300万、全世界には7千万ものアイルランド系の人が住んでいる、といわれる。（波多野　169）

⇒このように故郷を離れ外国に暮らすようになったアイルランド人とその境遇を、もともとバビロン捕囚後のユダヤ人の離散を指す言葉を用いて、「ディアスポラ」（diaspora）と呼ぶことも多い。民族が散り散りになったプロセスの速さと規模を考えれば、これは決して誇張ではない。

The "Great Hunger" sowed in Irish hearts a profound bitterness not toward the English people but toward the English government. It is the central defining event of Ireland's history.

By contrast huge gratitude was felt toward the people and government of the United States for taking in so many of its victims. Both these feelings remain a very significant factor in Irish life even today. (Scotney 39)

飢饉のときのイギリス政府の対策のまずさはアイルランド人の心の中に深刻で永続的な反英感情を残した。しかし日常生活上の必要から英語がますます一般アイルランド人の間で普及していった反面、アイルランド語は辺鄙な遠隔地を除き、次第に話されなくなっていった。（波多野　170）

⇒英国との関係悪化と合衆国への親近感の高まりが、大飢饉の結果として同時に起こった。映画『タイタニック』はやや時代が下ってからのお話だが、新天地アメリカへの移住の途上、粗末な三等客室で飲み騒ぐアイルランド人たちの様子が生き生きと描かれている（ちなみにタイタニック号もアイルランド北部の町で建造された）。実際アメリカはアイルランド系難民の最大の受け入れ先であり、今でも世界で一番多くのアイルランド系住民が暮らす国である。これはユダヤ系についても同じであり、アメリカにおけるそれらディアスポラの影響力の大きさが想像される。

　またこの時点で、ゲール語は衰退の一途を辿っていた。かつてのノルマン王朝時代のイギリスにおけるフランス語と英語の関係と同じく、支配者側の言語である英語が、次第に優れたもの、上流を象徴するものと見なされるようになったこともその原因である。

＜引用７＞　ゲール語とケルト、そしてアングロ・アイリッシュ

ケルト語はインド・ヨーロッパ語族の一つで、「ケルト」とは「すぐれた者」を意味するといわれる。しかしギリシャ人やローマ人と違って、彼らは自分たちの文字を持たず、みずからの歴史を書き残していないので、ケルト人の風習、生活などに関しても他民族が残した記録から間接的に推測するしかない。（波多野　9）

⇒文字を持たないがゆえに、古来アイルランドでは口承文化が発展した。民謡やダンスは現代に至るまで様々なヴァージョンで伝えられており、各地で活躍する吟遊詩人（bards）によって語り継がれた神話や伝説が、今もなおアイルランド人の無意識の中に息づいているといわれる。

アイルランド、スコットランド、マン島のケルト系住民をゲール人と呼ぶが、14 世紀以降のアイルランドにおいてイギリス王朝の勢力が相対的に後退したのに伴い、ゲール人の復興ともいうべき現象が社会制度や習慣などいろいろな面に現れた。ゲーリック（ゲール語、現在ではアイルランド語といわれる）で書かれた文献はこの時期から各段に増えている。それはゲール語を話す地域が拡大するにつれて、アイルランド貴族のなかにゲール系の芸術家や詩人、歴史家、法律家などを保護育成しようという機運が高まったからである。[...]

もっともゲール系貴族のみならず、アングロ・アイリッシュ系貴族も彼らに劣らず、ゲール文化を保護した。三代目のデズモンド・フィッツジェラルド伯は自分でもゲール語で詩を書いたほど、その力量は素人ばなれしたものであり、ゲール文芸・学問に心を寄せた元イギリス貴族の典型として有名である。こうして一部のアングロ・アイリッシュ植民者たちは「アイルランド人以上にアイルランド的」といわれるほど、地元に同化してしまっていた。彼らは早くからゲール人と結婚し、その言葉を学び、アイルランド人になっていった。後世アイルランドがイギリスから独立したとき、その運動を熱心に推進した人々のなかに、こうしたアイルランド化したイギリス人、いわゆるアングロ・アイリッシュが多数いたことは周知の事実である。（波多野　80-2）

The Norman barons intermarried with the Irish, adopted Irish ways and laws, and even learned to speak Gaelic, so that Norman surnames like Fitzgerald, Costello, or Butler, now seen as Irish as O'Connor or O'Brian. Indeed they were accused of being *Hibernicis ipsis Hibernior*—"More Irish than the Irish." Be warned: the visitor who tries too zealously to copy Irish ways is often today ridiculed as "More Irish than the Irish." (Scotney 31)

⇒先にインタヴューのところで指摘したように、「アイルランド人」とは誰のことを指すのかというのはかなりややこしい問題である。もともとイギリス系の入植者や荘園経営者でありながら、次第にアイルランドに溶け込んでいったアングロ・アイリッシュの存在がその理由のひとつ。アングロ・アイリッシュの人々はアイルランド社会の中、上流社会を形成することになったわけだが、その彼らがアイルランドの伝統文化との関係で意外な役割を果たすことになる。

In 1893 the Gaelic League was founded to assert the Irishness of the Irish people. The Irish language was to be learned, Irish dances, Irish poetry and song, Irish mythology, even Irish clothes, were encouraged. Its moving spirit was a delightful man called Douglas Hyde, the son of a Protestant clergyman and another Trinity College graduate.

It would be hard to overestimate the importance of the Gaelic League on the future of Ireland, even though it was founded by middle-class Protestant intellectuals. (Scotney 110)

⇒伝統的アイルランド文化の復興を目指すゲール語連盟の創設は、アイルランド文芸復興の運動とも連動していた。こうした運動の中心となったのがダブリンのトリニティ・カレッジだった。聖パトリックとの関わりを先ほど指摘したが、この大学はもともとエリザベス一世が、アイルランドでのプロテスタンティズムの発展のために設立したもので、そこで育成される知識人もアングロ・アイリッシュが主だった。つまり、本来の「アイルランド人」ではない人びとが、先頭に立ってアイルランドの伝統を守ろうとしたのである。

＜引用８＞　アイルランドのキリスト教

今日のアイルランドの国民的祝日であるセント・パトリック・デー（3 月 17 日）は、このアイルランドの守護聖人といわれる聖パトリックを偲ぶ日で、世界各地のアイルランド系カトリック信者が緑の服装で街頭行進をするお祭りとして知られている。聖パトリックはアイルランドから毒虫と蛇を追い払った聖人で、現在アイルランドに蛇がいないのはこのためだとされているように、多分に伝説的な人物でもある。しかし彼は実在の人物で、5 世紀初頭から中頃にかけて、アイルランドのキリスト教化に努力した伝道者の一人であったことは確かである。（波多野　18）

⇒「世界中のアイルランド系カトリック信者」であることに注目。宗教的行事が、世界中に散らばった人びとの心理的なつながりからなる「想像の共同体」（Benedict Anderson の概念）としての「アイルランド」を維持していくための、文化的祝祭として機能しているのである。

のちにアイルランドの修道士は大勢大陸各地に派遣されて布教活動に当たるようになるが、[...] こうした海外での布教活動は多くの困難を伴うところから、修道士自身にとっても修行の一部と考えられていた。彼らはスコットランドのみならず、遠くイングランド、フランス、ドイツ、ベルギー、スイス、イタリアなどまで足を伸ばした。すなわち聖パトリックによってキリスト教の洗礼を受けたアイルランドは、その数世紀後に、その恩恵を大陸諸国へ及ぼすことによって「恩返し」をしたのである。（波多野 23-4）

⇒聖パトリックはローマ系のイギリス人だが、子供のころにアイルランド人にさらわれて奴隷となった経験を持つ。彼の布教活動は、そうした過去の行いに赦しを与える行為でもあり、なおさらアイルランド人のハートに訴えかけたと考えられる。彼の教え子であるアイルランド人による「恩返し」は、アイルランドの情報を海外に伝えただけでなく、模範的なカトリック国家としてのイメージをも定着させることになった。

18 世紀のアイルランドでプロテスタントであるか、カトリックであるかは単に宗派の違いというだけにとどまらず、政治・文化・社会および歴史観の違いをも意味したのであった。日常生活においても、カトリックはプロテスタントの優位を脅かさないように多くの制限の下に置かれた。カトリックは公職から排除され、違反者には刑法上の罪が適用された。（波多野　131）

The problem of Northern Ireland remains to plague the island and there has been much blood spilled since it flared up again in 1969. The issues are immensely complicated yet also simple. Two-thirds of the people are of Scots or English stock, Plantation Protestants who have no desire to break with Britain and join the Catholic Irish of the Republic. The rest are native Irish Catholics, most of whom would prefer to be part of a united independent Ireland. (Scotney 56)

⇒イギリスの支配下でのカトリック迫害は、今なお禍根を残している。それは特にかつての IRA のテロ事件で顕著であったように、南北アイルランドの関係をめぐる問題としてたびたび表面化してきた。その根底には、「プロテスタント＝連合支持＝王党派」対「カトリック＝共和制支持＝民族主義」の対決の図式がある。アイルランドを統一しようという動きは、今後も続いていくだろうが、もともと異なる民族・文化からなる南北を「ひとつに」まとめる作業は、容易なことではない。

資料５　現代アイルランドの劇的変化

＜引用９＞　階級のない社会

If yesterday the English were the ruling class and the Irish were the ruled, today the most obvious characteristic of Irish society is its openness and lack of any class structure. . . . The Anglo-Irish, once the landowning gentry, still exist, but are tolerated rather than revered—especially since Irish farmers are no longer tenants but own their land. (Scotney 23)

⇒かつてのイギリス系地主とアイルランド人小作人という搾取関係はなくなり、アングロ・アイリッシュの特権も失われた。つまり、社会的階級がなくなったということである。しかし、この 30 年あまりの間に、土地の所有と経済的豊かさが必ずしも同義ではない時代が到来し、経済的格差という新たな階級差が生まれてきた。先進国（特にアメリカ）がたどった道を、いまアイルランドが猛然と追いかけている。

＜引用 10＞　驚きをもって迎えられたアイルランドの急成長

For Ireland, it is the rate of change in the last thirty years of the twentieth century that is most bewildering. Partly because of the archaic nature of life in Ireland up to then, the shock of the new could only be all the more radical. Much as the sheer lack of accumulated industrial encumbrance enabled the Irish economy to leapfrog into the microelectronic age, the sudden embrace of revised moral codes allowed the new Irish laws on homosexuality to become, at a stroke, more liberal than those in Britain. Perhaps because so much of the Irish stereotype (and the tourist brand-image) conjures up an unchanging land where time stands still, the Irish faculty for changing practices or expectations with bewildering rapidity has been underestimated. (Foster 3)

⇒産業革命を経験していないアイルランドでは、もともと産業的な基盤整備が遅れていた。そこに“Waiting for Microsoft”(Foster 4)とでも言うような、国際資本のハイテク関連企業誘致熱が高まったのである。いきなり最先端産業の洗礼を受け、急激な変化に誰よりもアイルランド人が戸惑った。また EU 加盟からの流れとして、ヨーロッパ諸国から、そのあまりにも厳格な道徳的規範への批判を受けたこともあり、経済的開放とともに社会的規範の解放も大きく進んだ。特に女性の社会進出や同性愛や人工中絶に対する規制緩和など、ジェンダーやセクシュアリティーに関わる分野での変化が顕著である。これらがカトリックの教義と相容れないこともあり、以前に比べると、教会の発言力は弱まってきていると指摘されている。

＜引用 11＞　変化の恩恵

Ireland has been declared by the National Competitiveness Council, at the time of writing, the most globalized country that ever yet was seen. What has changed, perhaps decisively and for ever, is a question of attitude. In 2004 the *Economist* cheerfully ranked Ireland's "quality of life" as the best in the world. . . . Gratifyingly for many Irish people, the UK languished at twenty-ninth. As this vividly illustrated, Ireland was now identified as the location of happiness—an increasingly fashionable concept for economists and sociologists. After centuries of victimhood and misfortune, by the early

twenty-first century the Irish had got lucky: not only in lifestyle and earning power but in sport, music-making, international literary acclaim and even (thanks to global warming) the weather. (Foster 4-5)

⇒アイルランドが「過去最高にグローバル化した国」であるという評価には様々な理由が考えられる。世界中に離散した同胞の存在もあるし、多国籍資本の流入で国内総生産（GDP）が国民総生産（GNP）を大きく上回るという空洞化した経済の現状もある。また芸術やエンターテインメントの分野で、世界に向けて自国産の文化を輸出する側に立ったことも大きな要因だ（次の引用も参照のこと）。問題はアイルランドの生活水準が世界最高という評価である。これはコンピューターがはじき出した結果だそうだが、経済格差の拡大や都市部での麻薬取引などの犯罪の増加といった負の要素は、この数値からは見えてこない。後ほどケーススタディーとして、映画を参考にこれらの問題を考えてみたい。

＜引用 12＞　文化輸出――質的変化と桁違いの規模

The post-sixties era that saw economic bust and boom, social upheaval and political rollercoaster rides in the Republic, as well as near revolutionary conflagration in the North, were remarkable in other ways too. Again as in the French Third Republic, political crisis and social disorientation were counterpointed by cultural achievements that suggested a dramatic development in confidence and innovation. For the Irish to conquer the English-speaking world through literature was, of course, nothing new. . . . But from about 1970 Irish cultural achievement came into focus once more. This time production happened within Ireland, by artists based at home—though they were addressing a global audience that owed much to the diaspora and its continuing connection with the homeland, enabled by the communications revolution. . . . The scale changed; the “classic” Irish short story. . . was replaced by the expansive, teeming world of the novel. (Foster 147)

⇒自国文化の輸出に関して言えば、アイルランドには長い伝統がある。しかし前世紀後半からの文化輸出には、大きな違いがある。まず、発達した通信メディアを通して、国内で創作された作品を世界中の（主にアイルランド系ディアスポラの）オーディエンスに向けて発信し、消費させるというシステムが確立したこと。これは質的な変化である。もう一つは、それまでは基本的にアイルランド人向けにこじんまり制作され流通することの多かった文化作品（短編小説にたとえられている）が、グローバルな市場に向けて展開されるようになったこと（これは長編小説にたとえられている）である。U2 などのポピュラー・ミュージックや、後ほど読んでみる Cecilia Ahern などの大衆小説も、アイルランド的なイメージを喚起しつつ、世界中で受け入れられるだけの普遍性を備えている。

＜まとめ＞

「ケルトの虎」と称されるほどの経済発展とそれに伴う社会構造の変革は、その長い歴史の中でも初めて経験されるであろう劇的な変化をアイルランドにもたらした。当地の事情に詳しい人の話を聞くと、一様に返ってくる答えは、今のアイルランドは「なんでもあり」の状態だというものである。つまり、従来のアイルランドらしさがなくなりつつあるということだが、その一方で、長い伝統はそう簡単に消えてしまうものでもない。今日のグローバル化した世界のなかでは、アイルランドが本来持っていた「らしさ」が、むしろアイルランド以外の場所で強く認識されつつある。

資料６　ケーススタディー

＜Cecilia Ahern, *Love Rosie* を読む＞

作者は現職アイルランド首相の娘として話題になっているが、それとは関係なしにいまや世界的人気作家の仲間入りを果たしている。処女長編 *PS, I Love You* (2004)は 2007 年に映画化されヒットを記録、三作目の *If You Could See Me Now*（2005）の映画版も現在製作中である。

＜あらすじ＞

ダブリンで育った幼馴染の Rosie と Alex のラブストーリー。アレックスは親の仕事でボストンに移り住み優秀な心臓外科医となり、一方のロージーは一夜の過ちから 10 代にしてシングル・マザーとなってしまう。運命のいたずらですれ違いを繰り返しながらも、強い絆で結ばれたふたりの人生を、E メールや手紙の文章だけで綴った現代の書簡体小説。

＜解説＞

そもそも小説のプロットが興味深い。まず高校の卒業パーティーで、ロージーはたいして好きでもない同級生と酔いに任せて関係をもち妊娠してしまうのだが、その後は中絶騒ぎや子供の父親の責任問題も何もなしに、子供を産み育てていく。カトリック国ならではの事情があるかもしれないが、重大な事件や不幸な出来事もごくさらりと流しながら、日々の暮らしのこまごましたことに話が集中していく語り口からは、妙にアイルランド的な態度が感じられる（深刻な話をユーモアでカムフラージュするのが、アイルランド文学のひとつの特徴)。また彼女の最愛の人アレックスがアメリカに渡るという設定も「いかにも」という感じである。アメリカに憧れを感じるアイルランドと、置き去りにしてきた故郷に思いをはせるアメリカが、ふたりの関係のなかで寓話的に描き出されているというのは深読みだろうか。さらに、しっかりものの女たちと、妙に理想ばかり高くて役に立たない男たちという人物設定の傾向は、現代アイルランドの実情を反映しているとも考えられる。

＜引用 13＞　セント・パトリック・デー、ダブリンの賑わい

The hotel is completely booked out this weekend because of the St. Patrick's Day parade, the place is jammed. There's been a steady flow of big groups of people arriving all day so I've been constantly checking them in. It has quieted down now for a little while so I'm pretending to be really busy on the computer with reservations right now so don't make me laugh whatever you do or my cover will be blown.

Well, when I say *quiet* I mean no one is bothering us at reception, the noise level of the hotel is a completely different story altogether. There's a huge group of Americans in the bar singing along to old Irish songs, would you believe they got the *Paddy Band* in to the hotel as a special treat? I've never seen so many green faces and dyed red hair in my life. (Ahern 142)

⇒これはロージーが夫（子供の父親とは別人）とネット上でチャットしているところ。彼女は昔からの夢がかないホテルで働いている。この日はセント・パトリック・デーで、本場ダブリンには信じられないほど数の観光客が殺到し、ホテルは殺人的な忙しさである。顔に緑のペイントをほどこし浮かれ騒いでいるアメリカ人の観光客の様子が皮肉っぽく語られる。一般的な解釈をはなれて視点を変えてみると、こうした国境を越えたお祭りはどこかばかばかしくもあり、ダブリン市民であっても対して思い入れの

ないロージーにとっては、ただ迷惑なだけである。

＜引用 14＞　性の解放、時代遅れの男たち

At the end of class Ricardo called me and Gary up to him and said Gary was a star in the making and that he and I made a great team. Who would have thought a lorry driver from inner city Dublin would be a salsa dancing god! Teddy wasn't too impressed when I shared the good news. Well I was so excited when I got home that I just blurted it out but I didn't realize that Teddy's fellow truck driving union friends were in the room having a "beer and porn night" and they were all equally unimpressed. Teddy went even redder in the face than usual and ranted and raved about all male dancers being gay and that I shouldn't be influencing Gary to fancy boys. I told him I was trying to help him come out of his shell a bit not to literally "come out." But the lads wouldn't understand, they think crashing beer cans against their heads, farting (then sniffing the air and laughing), screaming at the football players on TV (as if they would do any better themselves if they got on that pitch), commenting on all the overweight women on TV (like they don't have big beer bellies and haven't let themselves go ten years ago), calling me every ten minutes to serve them more cans of beer (of the fifty cent per dozen variety), and then having the audacity to *lecture* me on what makes a *real* man. The lazy selfish bastards— (Ahern 276)

⇒ロージーと彼女の友人 Ruby のチャットから、ルビーの発言。ふたりは最近サルサ教室に通っている。ある日ルビーが息子の Gary（かなりニートっぽい小太りの若者）をレッスンに連れて行ったところ、息子の意外なダンスの才能を発見する。帰宅後にさっそく夫 Teddy に報告するが、彼はトラック運転手仲間と「ビールとポルノ鑑賞の夕べ」の最中で、彼女の知らせに冷たい反応を示す。それに怒りを覚えたルビーが、ロージーに男どもがいかにダメな奴らであるかを報告している。

まず面白いのは「ダンサーの男＝ゲイ」というテディの偏見だろう。同じことがイギリス映画『リトル・ダンサー』でもいわれていたが、いかにも昔ながらの道徳観をひきずっている感じがして、逆に笑えてしまう。また、男同志の社交のくだらなさに愛想を尽かしたルビーとロージーの対話が、女同士の連帯を強めるコミュニケーションとなっているところにも注目したい。変化を拒む男たちが古いアイルランドを象徴しているとすれば、性的なタブーをものともせず、アイルランドでは依然避けられる傾向にある罵り言葉（bastards など）を使いこなす女たちは、新しいアイルランドを体現しているといえる。

＜映画『父の祈りを』、『ヴェロニカ・ゲリン』を観る＞

前者は、IRA のテロリストと間違われ投獄されたアイルランド人ジェリー・コンロンとその父親の裁判闘争を描くもので、コンロンの自伝を元にしている。また後者は、ダブリンの麻薬犯罪を追跡取材するさなかに、組織の元締めにより殺害された記者ヴェロニカ・ゲリンを題材にした映画であり、元の事件の余波によって法改正が進み、麻薬犯罪減少が現実となった。どちらも深刻な映画だが、実話に基づく物語であるという共通点で、この二作を選んだ。現代アイルランドの、あまり日本には伝わってこない側面を、これらの映像作品から感じ取っていただきたい。

資料１　ジャマイカらしさとは？

＜引用 1＞　“Very, very Jamaican!”

During a rehearsal for a dance performance in Kingston, Jamaica, I was stretching and talking with members of one of the country's premiere concert dance companies. I noticed a fair-skinned woman with long, dark, slightly wavy hair who was warming up with some of the other dancers in the opposite corner of the studio. She looked familiar to me, so I asked the artistic director whether she was the British woman who had performed with the Company some years before. “Who? She?” the director responded. “No, she is very, very Jamaican!” When I asked what it meant to be “very, very Jamaican,” the director replied, “You know, very, very Jamaican. You eat plenty of ackee and saltfish. You love reggae music. You talk patois.” I probed further, asking whether one had to do those things all the time to be “very, very Jamaican.” “Jamaica very broad you know,” she answered. “Very cosmopolitan. Plenty Jamaicans even eat lasagna, but them don't love it more than them ackee and saltfish. And there are plenty Jamaicans in America who are more Jamaican than Jamaicans here. Some high class Jamaicans don't act very, very Jamaican at all.”

By this time, another dancer had joined the conversation. “Let me tell you,” she offered, “I am so into my culture, the least thing will bring tears to my eyes”:

> Going to a craft fair, seeing the women selling dukoonoo and wearing them traditional headwrap. Going to a dance, jooksing in a corner, reasoning with a Rastaman while him smoke him herb, watching the dancehall girls skinning out on the floor. We are very brash, brash and colorful. It's the way the dancehall girls dress, the way them leave them belly out, the way them walk, the way them wear them big earrings, the way them color their hair. It's a true and natural expression of how we are deep inside.

A third dancer ultimately had the last word. “In Jamaica,” she said, “we are a culture of tricksters, we are a culture of loud mouth people, we are a culture of expressive people. . . ..” (Thomas 1-2)

＜解説＞

・**ackee and saltfish**　「アッキ＆ソルトフィッシュ」。ジャマイカの国民的料理。アッキは卵のような味がする果物。それを乾燥させたタラの塩漬けまたはスパイスの効いたスケトウダラに合わせたものが「アッキ＆ソルトフィッシュ」（右の写真を参照）。

・**reggae**　「レゲエ」。今や世界的人気を誇るジャマイカ生まれの音楽。第二次世界大戦の前後にアメリカの黒人音楽がジャマイカで人気を博し、やがてジャマイカでも独自の現代音楽が発展した。ビートの 2 拍目と

4 拍目を引きのばすように強調した「ズンチャッ・ズンチャッ」のリズムを特徴とするスカと呼ばれる音楽から発展し、より政治的なメッセージ込めた歌詞でジャマイカの社会問題を歌った曲が多い。ジャマイカ独立とほぼ同じ時期に登場したこともあり、政党政治のプロパガンダのために利用されてきた歴史がある。

・**patois**　「パトワ」。後述するように、ジャマイカ独自の方言のこと。「パトワ」とはもともとフランス語で「お国訛り」「方言」を意味する言葉。

・**high class Jamaicans**　「上流階層のジャマイカ人」。ジャマイカではまず人種の違いが問題になる。人口全体の 9 割をアフリカ系の黒人が占め、その他のヨーロッパ系の白人、アジア系、混血は少数派である。それと関係の深いのが社会階層による区分で、白人が主である上流支配層と、社会活動の中心的役割を担う中流階級、そして田舎や都市の貧民街などにくらす大多数の下層階級に分けられる。人種的な対立はさらに、裕福な uptown と貧しい downtown の間の階層的対立とも連動しているため、しばしば複雑なものとなる。

・**dukoonoo**　調理した食べ物だと思われるが詳細は不明。ジャマイカでも通じないことがあるという。

・**jooksing**　これも詳細は不明。パトワでは jook は「突き刺す」という意味で、また広東語由来の jook sing という言葉がアメリカなどでも使われているが、そちらも良く意味が分からない。街角で歌ったりすることかもしれない。

・**reasoning**　「話し合うこと」＝discussing

・**Rastaman**　「ラスタマン」。Rastafarian とも。ジャマイカ独自の信仰である Rastafari（Rastafarianism）を実践する人のこと。後述するように、独特の生活習慣をもち、もともとジャマイカでは異端視されていたが、レゲエの隆盛とともにジャマイカを象徴するイメージとして広く受け入れられるようになった。エチオピア国旗をモチーフにした派手な色の服や、伸ばした髪を固く編んで束にしたドレッド・ロックという髪形なども、ファッションとして世界中に広まった。レゲエのスーパースター、ボブ・マーリーをイメージすると分かり易い（右の写真を参照）。

・**herb**　「マリファナ」を指す隠語。ガンジャ（ganja[h]）ともいう。現在ジャマイカでは大麻の所字は禁じられているが、もともと宗教儀式などで使用されてきた伝統もあって、マリファナはジャマイカ、特にラスタファリアンと結びつけてイメージされることが多い。

・**dancehall**　「ダンスホール」。ダンスを踊る場所、またはダンスのための音楽や集まりのことを指すが、ジャマイカでは特殊な意味で用いられる。詳しくは後述するが、ダンスホールをジャマイカ大衆文化の中心とする意見は多い。

・**skinning**　これまた不明。ダンスホールで行う行為なのは間違いないが...

・**a culture of tricksters**　「トリックスター文化」。トリックスターとは、奇矯な言動や悪知恵で社会の秩序を混乱させる人物で、各地の民話や伝承に繰り返し登場する。ここでは、支配的なシステムに反抗し、その裏をかこうとするジャマイカ人の気質をユーモラスに表現するために使われている。

資料２　パトワについて

＜引用 2＞　パトワ、ジャマイカの公用語

The official language of Jamaica is English. All written communication and official business are conducted in English. However, the spoken language can either be English or, as in most cases, in our dialect known as Jamaican Patois.

Patois is largely comprised of mispronounced words and incorrect grammar from the English language, influenced by various West African dialects as well as European languages such as Spanish and French. More recent influences in the evolution of Patois have come from the Rastafarian culture and Dancehall Reggae DJs. . . . Jamaican Patois is a language that is almost impossible to teach and is best learnt by assimilation.

Fortunately, Jamaican Patois, like the Japanese language, is very phonetic and a Japanese person will be able to pronounce the words like a native Jamaican almost immediately. (ゴールドソン　9)

⇒説明にあるように、基本的には英語が変化したものだが、それ以外の様々な言語からの影響も含まれる。パトワの成り立ちそのものが、ジャマイカの歴史を物語っている。また、前述のラスタ文化やダンスホールの中でも新たな言葉が生み出され、パトワは日々変化し続けている。辞書の類を見てもよく分からない表現が多いのはそのためである。しかし解説にあるように、発音自体は英語を簡略化したもので、文字で書いたままに発音（phonetic）することが多いので、日本人にも馴染みやすいらしい。ただし、英語だと思って聞くと何を話しているのか全く分からない。

＜パトワの基本文法＞

・現在形

（肯定文）Im nyam nuff.（イムニャムノッフ）　He eats a lot.

（否定文）Im no nyam nuff.（イムノニャムノッフ）　He does not eat much.

・過去形

（肯定文）Im nyam yesideh.（イムニャムイエスィデ）　He ate yesterday.

（否定文）Im neveh nyam yesideh（イムネヴァニャムイエスィデ）　He did not eat yesterday.

・未来形

（肯定文）Im wi nyam latah.（イムウィニャムレータ）　He will eat later.

（否定文）Im nah nyam latah.（イムナーニャムレータ）　He will not eat later.

・現在進行形

（肯定文）Im a nyam.（イマニャム）　He is eating.

（否定文）Im nah nyam.（イムナーニャム）　He is not eating.

・過去進行形

（肯定文）Im wehna nyam.（イムウエナニャム）　He was eating.

（否定文）Im neveh wehna nyam.（イムネヴァウエナニャム）　He was not eating.

・勧誘
（肯定文）Mek we nyam. （メックウィニャム） Let's eat.
（否定文）Mek we nuh nyam. （メックウィノニャム） Let's not eat.
・複数形は、名詞の後（または前に）dem（them）を加える。
（単数）Di book cheap. （ディブックチープ） The book is inexpensive.
（複数）Di book dem cheap. （ディブックデムチープ） The books are inexpensive.
・a の様々な用法
（be 動詞）She a teacha. （シアティーチャ） She is a teacher.
（前置詞 to）She a go a school. （シアゴアスクール） She is going to school.
（前置詞 of）She buy a bax a pencil. （シバイアバクサペンスル） She bought a box of pencil.
（前置詞 at）She deh a school. （シデアスクール） She is at school.
（現在進行形）She a cry. （シアクライ） She is crying.
・th-音の t 音・d 音化
Think が tink、thing が ting、that が dat、them が dem と発音される。

＜パトワの語句＞
・**Apprecilove**（アプレシラブ）感謝する（＝appreciate、-ate は hate に通じるから）
・**Babylon**（バビロン）警官・圧政的な人・（悪い）政治／体制
Babylon will arres yu fi ganja. (Police will arrest you if you're caught with marijuana.)
・**Bwoy** （ブワーイ）男の子・男性への呼びかけ
Bad bwoy（チンピラ）や rude bwoy（ギャングの一員）など、良く bwoy が使われる。
・**Big up**（ビゴップ）ようこそ・おめでとう・よろしく・感謝する
・**Chaaklit** （チャークリトゥ）チョコレート
Try some bonifide Jamaican chaaklit tea; a baas! (Try some authentic Jamaican hot chocolate; it's excellent!)
・**Downpressor**（ダウンプレッサ）圧政者・抑圧する者（＝oppressor、op-は up に通じるから）
・**Everyting is everyting** （エブリティングイズエブリティング）大丈夫・万事順調
・**Forward**（フォーウォドゥ）全く逆に back の意味
Call me forward. (Call me back.) / Me wi come forward. (I will come back.)
・**I an I** （アイアンアイ）私（の）・私たち（の）・あなた（の）・あなたたち（の）
I an I trodding Africa. (I/We are going to Africa.) /Jamaica is I an I country. (Jamaica is my/our country.)
・**Ketch up**（ケチョップ）喧嘩する
Wifey and matey ketch up a street. (The wife and her husband's mistress got into a quarrel in public.)

An bans more (and many more) . . .

資料３　ジャマイカの歴史

＜引用 3＞　ヨーロッパ人の到来と奴隷制

The original inhabitants of Jamaica, the peaceful Arawak Indians welcomed Christopher Columbus to the island's shore in 1494 but were soon eliminated by disease and the Spaniard's abuse. Their extinction necessitated the importation of slaves from Africa to work the plantations that supplied the ships plying between Spain, Europe and North & South America. The Spaniards' accumulated wealth attracted plundering by British pirates, who eventually made the town of Port Royal their base, to which they brought their loot—mainly stolen gold. Port Royal, once regarded as the richest and wickedest city in the world, was destroyed by a massive earthquake in 1692 which swallowed up two-thirds of the city and over 2,000 people. Plans are currently in the making to create an underwater museum which would allow visitors to view the only "sunken city" in the western hemisphere. (ゴールドソン　14)

黒人が卓越する当時の人口構成においては、白人たちにとって黒人たちはつねに叛逆する可能性を持つ脅威でもあったので、白人たちは出自と言語を同じくする黒人を別々の農園にバランスよく振り分けた。異なった言語では意思の疎通が困難であり、結果的に黒人たちの蹶起の可能性は摘み取られていく。（森 178）

⇒カリブ海地域の島々を「西インド諸島」（the West Indies）と呼ぶのは、コロンブスがこのあたりをインドだと勘違いしたからだといわれる。先住民は、虐待や伝染病、苛酷な奴隷労働がもとで早くに絶滅状態となり、代わりにアフリカ人が奴隷として連れてこられた。いわゆる三角貿易の一角として、この講義でも見たようなラム酒の原料としてのサトウキビなどを栽培する農園の経営が行われたのである。他の産物としてはブルーマウンテン（ジャマイカの最高峰がある山脈）で有名なコーヒーがある。ジャマイカは 1655 年ごろまでスペインの統治下に置かれていたが、その後は 5 年にわたるスペインとの戦争を制したイギリスが、20 世紀に至るまで同地を支配することになる。奴隷貿易は 19 世紀初めまで盛んに行われ、そのころまでに延べ 100 万人がジャマイカに連れてこられたという。ジャマイカでの奴隷制は 1834 年に廃止され、1850 年ごろには元奴隷で土地を所有する者が増加した。それに伴い、インドや中国からより賃金の安い労働者（coolie と呼ばれる）が流入し始め、その子孫が現在に至るまでジャマイカ社会の一部を成している。

農園での奴隷は故郷の文化と切り離されていたが、奴隷制が行われていた当時から、アフリカの伝統的打楽器とヨーロッパ人が持ち込んだ様々な楽器を組み合わせて、音楽の演奏とダンスがかなり頻繁に行われていたようである。こうして新世界で生み出されていった黒人たちの音楽は、今日のダンスホールに至るまでの長い伝統の始まりとなった。

ちなみに引用中にあるポート・ローヤルという街は、映画『パイレーツ・オブ・カリビアン』の舞台にもなっている。「世界一豊かで邪悪な街」の異名を取ったように、往時の海上交通や貿易の要所であった。

＜引用 4＞　ラスタファリアニズム

とくに福音主義のジャマイカ人宣教師マーカス・ガーヴィ[Marcus Garvey]が1914 年に「全黒人地位改良協会」[UNIA- ACL]を結成し、北米に移住したことは重要である。彼は黒人ナショナリズムとプロテスタントにもとづいたキリスト教を混ぜ合わせた教えを展開し、1920 年代までに 200 万人を入信させ、その黒人運動は当時最も巨大なものになった。とくに彼は、黒人はアフリカから強制的に奴隷として連れてこられたため、「祖国」のアフリカに戻らねばならないのだと説いた。ただし、それがアフリカのどこかが明示されることはなかった。

M・ガーヴィ

1927 年、アメリカからジャマイカに追放されたガーヴィは、そこでアメリカの時ほど多くの支持者を得ることはなかったが、そこからのちに独特の聖書解釈をほどこすラスタファリアニズムが生み出された。とくにラスタファリアニズムの契機となったのが、1930 年に行われたエチオピア最後の皇帝ラス・タファリ[Ras Tafari]（「ラス」はエチオピア王室に与えられる称号で、「タファリ」は姓である）の戴冠式であり、彼はその後ハイレ・セラシエ[Haile Selassie]（「神、イエス、聖霊の三位一体の力」という意味）と名乗る。[. . .]

皇帝ハイレ・セラシエ

ガーヴィの考えに共感する人は、独立アフリカ国家の最初の近代的国王となったハイレ・セラシエをイエス・キリストの蘇りであり、黒人の救世主だと考えた。この考えは、ジャマイカの聖職者に大きな影響を与える。またラスタファリアニズムは旧約聖書と新約聖書を多様に解釈した。たとえば旧約聖書に記されているユダヤ人のバビロンへの強制的な移動と労働への従事、いわゆるバビロン捕囚を、奴隷制による自分たちの祖先のアフリカからの強制的な移動と重ね合わせ、セラシエが国王となったエチオピアを自らの帰還すべき「祖国」とする考えが強く主張された。（森　181-2）

ラスタファリアニズムの特徴的な点は、内面の自己規律を求めたこと、<u>不条理な社会状況を改革する必要性を説いた</u>こと、<u>自分たちを抑圧する力に対して戦闘的な意思を持つ</u>こと、自らのアフリカからの系譜に誇りを持つこと、救世主による救済、エチオピアという約束の地に帰還する、などがある。1940 年には、ほとんどの男性メンバーが髪を切ったりひげを剃ったりするのをやめるといった独特の生活習慣も先鋭化していく。（森　183）

Was it not true that 90 percent of the country was black, that blacks had built and suffered for the country, and that they had created the common culture of the society? The only solution was to leave <u>Babylon (the West and its utterly bankrupt system</u>), in order to find <u>Zion (heaven on earth)</u> in the land of <u>Ethiopia (sub-Saharan Africa</u>). (Stolzoff 79)

⇒アフリカへの回帰を目指すラスタファリアニズムには、なぜかユダヤ教的な考えが強くにじんでいる。

バビロンを西洋世界全般、さらにはジャマイカを支配する西洋的なシステムを指すのに用いたり、ユ

ダヤ人にとっての魂の故郷であるシオン（ザイオン）をエチオピアに求めたりというように。実はこのように既に存在するものを作りかえ並べ替えて、本来の文脈とは離れたところで新たなものを生みだす＜Remix＞の精神が、ジャマイカの宗教や音楽、ひいては文化を理解するための重要なキーワードのひとつなのである。

ラスタファリアニズムとハイレ・セラシエの関係でいえば、1966 年の皇帝のジャマイカ訪問は所長的なイヴェントだった。押し寄せる興奮した群衆から皇帝を守るボディーガードの役目を果たしたのがラスタの人々だった。そうした出来事を経てラスタは次第にジャマイカ全体に浸透していったのだが、1975 年のハイレ・セラシエの死後は、年々その社会的影響力は衰えてきている。現在では、ラスタはレゲエやジャマイカの大衆文化一般と同一視され、ファッションやライフスタイルのひとつのモデルとして、世界中で認知されている。

＜引用 5＞　サウンド・システムとダンスホール

当初のスカはモダン・ジャズやブルースの影響を強く受けていた。なぜなら、ジャマイカに立ち寄る多くのアメリカ黒人たちが、ジャマイカにこれらの音楽を持ち込んだからだった。彼らが残したジャズやブルースのレコードはまたたく間にジャマイカ中に広まり、中古レコード市場ができあがる。また 1950 年代、R&B を流すマイアミの小さなラジオ局から届く電波は、アメリカの黒人音楽への関心をさらに強めた。こうしたアメリカの黒人音楽への強い関心の一方、ジャマイカの中にその水準の音楽をきちんと演奏できるグループは存在しなかった。その代りに、ダンスホールを借り切って輸入された R&B のレコードを流す「サウンド・システム」という移動型ディスコが作られたのだった。（森　187）

⇒写真は 1960 年代のある有名なサウンドシステム。サウンドシステムといっても規模は様々で、大出力のスピーカーを何段も積み上げたような大掛かりなものもある。トラックやトレーラーで機材を移動させて、どこにでも即席のダンスホールを作り出してしまう。基本的にはこうした機材のことをサウンドシステムというが、さらにひとつのシステムを共有して活動するグループ（それぞれにファンがいて、システム同士の競争もある）や、こうした形式で楽しむ音楽の形態そのものもサウンドシステムと呼ぶ。最初はアメリカから輸入された部品を組み合わせて独自のサウンドシステムを構築し、それでアメリカ製レコードを流していた。ジャマイカ黒人が聞きたい音楽を、当時のラジオ（中産階級の趣味に合わせた番組編成がなされていた）は流さなかったので、サウンドシステムは、下層階級の大衆文化を形成するうえでの主要なメディアとなった。また生バンドによる演奏よりも安上がりであったことも、サウンドシステムの隆盛の大きな要因であった。とはいえ、本当に貧乏な人びとは機材を買うこともできないので、サウンドシステムの主な担い手は、中産階級の人々だった。ジャマイカの大衆音楽文化が、常にそうした社会階層のあいだのギャップによって推進されてきたことも、見逃がせない事実である。

Dancehall—from the urban ghettos of Kingston to the rural districts of the countryside—is the most potent form of popular culture in Jamaica. For Jamaica's ghetto youth (the black lower-class masses), from among whom come its most creative artists and avid fans, dancehall is their favorite recreational form. Yet dancehall is not merely a sphere of passive consumerism. It is a field of active cultural production, a means by which black lower-class youth articulate and project a distinct identity in local, national, and global context; through dancehall, ghetto youth also attempt to deal with the endemic problems of poverty, racism, and violence.

ダンスホールの雰囲気を伝えるイラスト。
背景にハイレ・セラシエの顔が浮かぶ。

In this sense, dancehall is a multidimensional force, at once symbolic and material, that permeates and structures everyday life in Jamaica. It is almost impossible to move through Kingston's urban public spaces without encountering dancehall in some form. . . . (Stolzoff 1)

In the early 1960s, the dancehalls started to attract the interest of uptown youth who came to downtown sessions in unprecedented numbers. The dancehall became a meeting place for young people who lived on opposite sides of the uptown/downtown social divide. As teenagers of different social backgrounds began to mingle in the dancehall setting, the music of the dancehall became a force of social cohesion—a cultural bridge—rather than one of social stratification. (Stolzoff 66)

⇒ダンスホールも単にダンスを踊るための場所ではない。それはサウンドシステムを活用した音楽の形態でもあるし、イヴェントに参加することで形成されていく文化や、参加者たちの中に芽生える意識や連帯感をも包み込む概念である。ダンスホールは社会にはびこる不正への問題意識を啓発する場でも。本文中にもあるように、ダンスホールは「象徴的でしかも物質的」なのであり、単に形だけを整えても決して真のダンスホールとはならない。

また、既に述べたように、ジャマイカの音楽業界では、社会階層の間のギャップが常に問題となるが、ダンスホールは、そうした階層間の交流も生み出してきた。そもそも奴隷制の時代においても、祭りの日などには奴隷と農園経営者が共に音楽と踊りを楽しむ習慣があった。つまり、普段の価値観や制度が一時的にひっくり返されてしまうそうしたカーニヴァル的な空間が、長い時を経てダンスホールに今も存在しているのである。

Except for a few powerful women, dancehall production is overwhelmingly male-dominated, and women are discouraged from becoming singers and DJs. In addition, many dancehall songs written by male DJs and singers aim violence toward women and homosexuals. Whereas the representation of women has become a matter of some debate in Jamaican society (especially among middle-class

activists), gay-bashing has not been politicized because homophobia is widely accepted throughout the society. (Stolzoff 8)

⇒しかし、そうした極めて平等なようにみえるダンスホールにも、ジャマイカ的な差別の問題は存在する。女性蔑視と同性愛嫌悪がそれである。来年 1 月に DVD が発売されるドキュメンタリー*Man Ooman* では、そうした現状も余すところなく描かれている。

＜参考映像資料＞

Man Ooman の予告編を MySpace で、サウンドシステムとダンスホールを題材にした Discovery Channel の特集（“Jamaican Sound System Stone Love Reggae Dancehall”）を YouTube で観る。

＜引用 6＞　レゲエの登場と政治の季節

1960 年代のジャマイカは経済成長を謳歌したが、一方で人口の約三割が仕事を持たず、しかもたとえ雇用されていても、その八割はわずかな賃金しか受け取っていなかった。他方でボーキサイト産出、観光、金融など主要な産業は外国企業に押さえられており、国民の不満は高まる一方だった。（森　189）

By 1966, Jamaica's honeymoon following Independence was all but over. The lower class's rising expectations could not be met by the ruling JLP. Frustration with government policies was coming to a boil, and it eventually culminated in a series of violent political disturbances. The ensuing political rivalry between the PNP and JLP would shape the social landscape for the next thirty years. (Stolzoff 83)

レゲエが登場する 1960 年代末、ジャマイカは、上流階級、中流階級、下層階級の三つにはっきりと分けることができた。上流階級には高級官僚、大学教員、専門技術者、政治家などが含まれ、人口の一割を占めていた。この階級が 1854 年に創刊された新聞『デイリー・グリーナー』を通じて輿論をコントロールし、政治を動かしていたのである。

　小規模店舗経営者、小規模土地所有者、技術者、ホワイトカラー、熟練労働者のほか、先述のボーキサイト労働者によって構成される中流階級は人口の二割を占め、政治に関して言えば、上流階級がイデオロギーを構成しメディアを通してそれを流布するのに対して、中流階級はそれを消費し、あまつさえ政治の実質的な運動員として活躍する役割を担った。そして、残る人口の七割は下層階級に位置づけられる。中流階級と、実質的に人口のほとんどを占める下層階級が選挙の勝敗のカギを握っていたので、どのようにこれらの層を取り込むかということが重要だった。レゲエが展開するのはこうした階層構造と選挙戦略においてだった。（森　179-80）

⇒ジャマイカは 1962 年にイギリスからの政治的独立を果たすが、依然イギリス式の階級システムは存続し、黒人の地位向上も果たされなかった。好景気で潤ったものの、その利益は公平に分配されず、むしろ世界経済への参入が深刻な労働問題を引き起こした。また、新生独立国家ジャマイカを統一するスローガンとして“Out of Many, One People”が提唱されたが、これもクレオール（ヨーロッパ系の

移住者）中心の国家としての多文化主義を謳いあげるもので、大多数の黒人の感情を反映するものではなかった。二大政党であるジャマイカ労働党（the Jamaica Labor Party, JLP）と国民国家党（the People's National Party）の指導者はともに海外で教育を受けた上流階級のクレオールで、両者の間の政争に、黒人や下層階級の人々が駆り出され、ジャマイカは熱い政治の季節を迎えることになった。独立と時を同じくして登場したレゲエもまた、この時代の流れに巻き込まれるのである。

政治的な不平等の是正という左翼的な公約を掲げた人民国家党は、選挙による政権奪取を目指すべく、政府によって禁止されていた多くのレゲエ曲をカセットテープに録音し、積極的に選挙キャンペーンで利用した。[. . .] 選挙の前年にあたる 1971 年には、政党は週に一度バンドを乗せたワゴンを各地に送り込み、そこで講演会兼コンサートを開催した。農村部ではコンサートは無料、首都キングストンのスタジアムでは通常のコンサート料金が徴収されたという。党はミュージシャンを雇い、キャンペーンで用いるための現状打破をテーマとする曲を書かせたのである。党が抱える 14 人のアーティストのうち実に 8 人が 1971 年のトップ 25、あるいはある日のトップテンに入るという、豪華なラインナップだった。実際、会場にはアーティストの顔写真が貼られ、毎回の平均観客数は 2 万人にもなり、結果的には人民国家党がジャマイカ労働党よりも多様な階層の支持を取り付け、勝利を収めたのである。音楽という文化的要素を巧みに全面に押し出しながら、人びとのアイデンティティを作り上げ、政治的イデオロギーを浸透させようとする戦略は、まさに文化と政治の近しさ、あるいはその区分の不可能さを示していると言えるだろう。（森　194-5）

In addition to the Rastafari, another influence that shaped the dancehall after independence was the emergence of a rebellious youth movement of disenfranchised urban males—rude boys. Beginning around 1961, and blossoming three years later, the rude-boy movement erupted as a distinct force among the unemployed male youths of Kingston. According to Garth White, these young males from the ghetto "became increasingly disenchanted and alienated from a system which seemed to offer no relief from suffering. Many of the young became *rude.* 'Rude boy' (bwoy) applied to anyone against the system." (Stolzoff 80)

⇒大衆文化としての音楽がこれほど政治にコミットした例は、世界中を見回してもまれである。しかも大衆文化の政治的利用は単なるプロパガンダに終わらなかった。キングストンなどの都市の貧民街に住むもっとも虐げられた若者たちが「ルード・ボーイズ」と呼ばれるギャング（ポシー＝posse ともいう）を結成し、抑圧的なシステムへの反抗心をむき出しにするようになると、政党はこれらの若者を兵隊として子飼いにし、政敵への暴力的攻撃（暗殺など）を開始するのであった。政党同士の争いが、ストリートでギャングの抗争として再生産され、犯罪者と警察権力の癒着などの由々しき問題をも生じさせた。次項では、そうしたギャングによる暴力犯罪のその後の展開をはじめ、現代ジャマイカの抱える問題を確認する。

＜参考映像資料＞

レゲエを通してジャマイカ文化を紹介したドキュメンタリー、『Roots, Rock, Reggae』を観る。

資料 4　現代ジャマイカの抱える問題

＜引用 7＞　束の間の平和

［状況説明：1978 年、対立関係にあったポシーの間で停戦協定が結ばれたのを記念して、ジャマイカで伝説的な「ワン・ラブ・ピース・コンサート」が催される。両ポシーのリーダーがステージで握手を交わしたほか、二大政党の党首 Michael Manley（PNP）と Edward Seaga（JLP）もボブ・マーリーの呼びかけでステージにのぼり、手をつなぎ合った。］

このとき、レゲエは平和へのメッセージを伝えるアイテムとしてたしかに機能したように思われた。しかし、コンサートの数週間後にマソップが警官に射殺され、マーシャルもまた 1980 年の選挙直前に死亡すると、束の間の平和は終焉を迎える。結局二つのグループは再び政党の支配下に収まり、抗争を続け、800 名もの人が命を落とす血みどろの戦いへと突き進んでいったのだった。実はこの当時マーレィ自身も、政治的な暴力の主要な標的にされ、1977 年には身の安全を守るためにジャマイカを去ることを余儀なくされていた。（森　198）

⇒問題のシーンはネットでも見ることができる。YouTube にアップされたビデオのナレーションにあるように、マンリーとシアガにとっては、これは宣伝のためのチャンスでしかなかった。ジャマイカの情勢にそぐわなくなっていた社会主義路線の PNP は 1980 年に政権の座を追われ、翌 1981 年には、平和の象徴であったボブ・マーリーがガンのため 36 歳の若さでこの世を去り、次第に政党政治と結びついたレゲエの活動は下火になっていく。JLP によるアメリカ型自由経済路線は、ジャマイカの内政や経済状態を悪化さた。またマリファナに代わってコカインの密売が盛んになり、ギャングによる組織犯罪も凶悪になっていく。

＜引用 8＞　アメリカを手本にしたジャマイカのギャング文化

アメリカに移住するまで、ジャマイカのギャングはハリウッド映画からバッドマン・スタイル（ギャング風のふるまい）を学んでいたようだ。彼らはジャマイカの腐敗政治、“くそシステム　shitstem”（ラスタは不正のはびこる政治を指してこう呼ぶ）の申し子で、彼らのガンマン気質やスタイルはアメリカ映画からきており、これもカリブの雑種文化を端的に表すものだ。熱帯地方のバッドガイはキングストンの盛り場で毎晩上映されていたマカロニウエスタンやカンフー映画、「ランボー」シリーズや「ゴッドファーザー」の代表されるマフィア映画をそのまま真似していた。そしてそんな映画を見る若者の目はキラキラ輝いていた。ポシーは自分たちを「ダーティー・ハリー」のクリント・イーストウッドや「スカーフェイス」のアル・パチーノに重ねたり、年配の者であればサム・ペキンパーの「ワイルド・バンチ」に出てくる暴れ狂うアウトローを自分にダブらせていた。（ガンスト　15-6）

Outlaws have long been romanticized as Robin Hoods and defenders of their ghetto communities. Today's gangsters have inherited this heroic role, even though their criminal associations constitute something of a terrorizing police force within the borders of their own ghetto areas. . . . For instance, since the late 1960s, gangs of outlaws have been affiliated with one of two rival political parties, and they control their home turf both for themselves and for their patron political bosses. Although with

the advent of the cocaine trade, the tie between these posses and their political sponsors has weakened since the 1980s, many ghetto communities are still fraught with politically motivated gang warfare. However, now that gangs no longer are completely dependent on local political patronage, the situation has taken on an even more sinister cast. (Stolzoff 10-1)

⇒映画『ハーダー・ゼイ・カム』も、まさにアメリカの西部劇にインスパイアされた若者が銃を片手に犯罪者となり、そうした無法者のイメージで人びとの人気を得ていく様を描いている。無法者（outlaw）は、先に言及したトリックスターと似ていて、権威的なシステムに対抗し、既存の社会秩序に揺さぶりをかける存在と見なされる。つまり、強きをくじき弱きを助ける義賊的な存在である。ジャマイカ人でない私たちから見ると、なぜ主人公アイヴァンのようないい加減でケチな悪党に庶民があれほど肩入れするのかが分かりにくいが、ジャマイカの歴史と重ね合わせてみれば、少しは理解が進みそうである。

『ハーダー・ゼイ・カム』は 1970 年代初めの状況を背景としているが、その後 1980 年代から今に至るまでのジャマイカのギャング文化も、基本的には同じような美意識に支配されているといえる。これはいわば西部劇の無法者そのままの、権威に屈しない悪党をカッコいいと感じるような美意識である。そうした外来の文化を輸入し、自国の状況に合わせてリミックスするところが、ジャマイカの「雑種文化」（hybrid culture の訳か）たるゆえんである。しかし国の政治や文化とは切り離されてジャマイカらしさを失い、国際犯罪の一部に組み込まれた現代のギャングは、逆にアメリカを活動の拠点に変えていこうとしている。

＜引用 9＞　楽園の裏側

1985 年 1 月初頭、エドワード・シアガが議会でガソリンを 1 ガロン 11 ドルまで値上げしたことで、ジャマイカの現実は一つ明らかにされたと言っていいだろう。島民はこれが全ての物価上昇につながることを知っていた。シアガは「全ての人々が感じているだろう苦しみ」と切迫した状況を認めたものの、「IMF によってジャマイカドルの価格が下げられてしまったので、インフレは避けられません。しかしアメリカ人に有利な為替効果で旅行業は最高の時を迎え、4 百万ドルの利益が上がるはずですから心配には及びません」と語った。しかしシアガが発表を終える前から島中でデモが開始。朝までにキングストンは怒った市民で一杯になり、切り倒された木、燃えるタイヤ、黒くこげた自動車で交差点は遮られた。［...］

しかしシアガはこの騒ぎの最中、マクニール・レーラー・ニューズアワーに出演してジャマイカの安全をアピールするため、マイアミに向かっていた。怯えるアメリカ人観光客を安心させるためだった。その時は丁度観光客が一番増える冬の真っ最中で、島の暴動はシアガにとってこの上ない悪夢だった。アメリカのテレビ局はキングストンに入って叫び狂うギャングや燃えるバリケードなど恐ろしい映像を本国に送り、ジャマイカを南アフリカの縮図のように映し出していた。そして島民は自分たちのリーダーがジャマイカをほったらかしてアメリカ人と会談する姿を見てさらに怒りを増す。（ガンスト　84-5）

⇒今ではジャマイカもすっかり様変わりし、観光に最適な楽園のイメージが盛んに宣伝されるようになっている。あまりネガティヴなイメージばかりを強調するのは良くないが、一方でギャングの抗争な

どの現実を無視して、レゲエが叫ぶラヴ＆ピースのメッセージを無批判に受け入れるのも問題である。引用の例からも分かるように、ジャマイカは今や世界に向けて文化を発信する立場にある。グローバルなものとなったレゲエやダンスホールは言うまでもなく、

＜引用 10＞　ジャマイカ文化の Remix

レコードやサウンド・システムという物質的基盤は、明らかにアイデンティティや「文化」といった非物質的なるものの生成に深く関与している。しかもそうした非物質的なものが、サウンド・システムを強化しているのであり、つまり物質と非物質が複雑に絡まりあっているのがわかるだろう。ジャマイカとの文化的なつながりは重要であり、ラスタファリアニズムやレゲエが持つ象徴的な世界観やイメージは、イギリスに生きる移民の若者たちの日常生活において重要な役割を果たしたが、毎日身にまとう衣服という物質的基盤もまたアイデンティティの構成に関与していた。ラスタファリアニズムで採用されたエチオピア的色彩の毛糸の帽子をかぶり、特徴的な服装を身にまとう。こうした服装や生活のスタイルを共有することでも、同族意識が強化された。つまり日常的な実践が人びとのアイデンティティを強化したのである。（森　208-9）

⇒これはイギリスに移住したジャマイカ人の例だが、ジャマイカの文化が生み出したさまざまイメージやスタイルは、今やグローバルなものとして流通し、それぞれの場所の状況に応じてリミックスされる。例えば日本人にとってはラスタとはほとんどただのファッションに過ぎないし、レゲエといえば毎日新聞の CM ソングを思い浮かべる人も多そうだ。文化について考える上で、引用個所やほかのところでも言及されている「物質的なものと非物質的（象徴的）なもの」の関係は避けては通れない問題である。今回着目した音楽というものが、そもそもこの二つの側面を併せ持つものなので、異文化理解の試みの一環としては得るところの大きいテーマだといえる。冒頭で提示した“Very, very Jamaican”とは何かという問いの答えになるかどうかは分からないが、そもそも私たちがジャマイカを「ジャマイカ人らしく」理解することは不可能なのではないだろうか。ただし、日本人もおおむね外来文化をリミックスして日本の文化にしてしまう術に長けているので、形の上ではジャマイカ人に似ているところもあると言える。

資料１　インドのイメージの二極化

＜引用 1＞　メディアが取り上げる、新しいインドの典型的イメージ

Political slogans often outpace reality. When Rajiv Gandhi was campaigning in the late 1980s, he liked to say "*Mera Bharat Mahan* [My India is Great]." A TV advertisement put the phrase to a catchy tune. But few Indians had TVs in those days and while millions appreciated the sentiment, not all believed it.

It makes more sense now. Sixty years after independence, India is beginning to deliver on its promise. Over the past few years the world's biggest and rowdiest democracy has matched its political freedoms with economic ones, unleashing a torrent of growth and wealth creation that is transforming the lives of millions. India's economic clout is beginning to make itself felt on the international stage, as the nation retakes the place it held as a global-trade giant long before colonial powers ever arrived there. That success may yet act as an encouragement to Pakistan and Bangladesh, still struggling to overcome longstanding questions around Islam's role in their societies. . . .

The challenges facing the subcontinent, of course, are enormous. Indian infants are more likely to be malnourished than African ones, infrastructure is straining to keep up with the economic boom, while corruption, discrimination, religious violence, child labor, bad schools and pollution persist. When the economy tightens or when tensions with Pakistan threaten war, a new slogan appears on India's auto-rickshaws: "*Mera Bharat Pareshan* [My India is Troubled]."

But none of this means that the country's massive shift is an illusion. Twenty years ago the rest of the world saw India as a pauper. Now it is just as famous for its software engineers, Bollywood movie stars, literary giants and steel magnates. Photographer Prashant Panjiar, who took the photos for the following story on the Malhorta family, has detected a new confidence in the past few years. "A lot of people are still poor but there is a sense of purpose now," he says. "That old Indian fatalism has gone." Indeed, these days a new slogan has appeared on the back of the auto-rickshaws, a simple statement that captures the excitement and promise palpable in many parts of the country: "*Mera Bharat Jawan* [My India is Young]." (Robinson 16)

⇒ "Great" から "Troubled" へ、そして最後に "Young" とつながる論法に注目したい。インドは紀元前 2500 年以前にも遡る文明を誇る大国であり、古くから貿易の要所となっていた。1947 年のイギリスからの独立は、そうしたインドに対する誇りを再び呼び覚ますことになった。しかしそうした誇りが一方では大国主義へとつながっており、ヒンドゥー・ナショナリズムのような排外的で民族主義的な運動も大きな影響力を持っている。映画や文学、さらには独特の食文化やヨガのような宗教起源の文化で世界に知られるインドも、1990 年代からの経済自由化で逆に西洋的な文化の流入にさらされている。それに伴う急激な変化により、またはそれに取り残される人々の存在により、インドの抱える社会問題は深刻化の一途をたどっている。古い文化を誇る悠久の大地が持つ「癒し」の力がひとつの典型的なインド像であるとすれば、近年の経済的発展はもうひとつの典型として報じられる。ここには「新と旧」、または「楽観主義」と「厳しい現実」という、インドをめぐる言説の二極化がみられる。

資料２　インドの言語事情

＜引用２＞　多言語社会インドでの、公用語策定の試みと英語の使用

インドは現在 28 の州と六つの直轄地、及び首都から成る連邦国家である。州の区分は、原則として言語に基づいている。これを「言語州」と呼ぶ。インド国民議会派のネルーの政権下の 1956 年に実現した。

インドに単一の「インド語」なるものは存在しない。インドの公用語としては、連邦公用語であるヒンディー語のほか、憲法で公的に認定された言語（州公用語ではない）が 22 ある。ヒンディー語は連邦国家の公用語として、それ以外のものに優先する形になっている。しかし、ヒンディー語が名実ともに国家の共通語になるには前途多難で、イギリス植民地時代に幅を利かした英語が、いまだに準公用語のような役割を帯び、言語を異にする人々の間や都市に住む住民たちの重要なコミュニケーション手段となっている。

1971 年の調査によれば、インドには 330 の言語があり、使用人口が 1000 万人以上のものが 12、5000 人以上のものが 281 も数えられる。希少な言語などを合わせると、言語の数はおびただしいものになる。インドでダイアレクト（方言）という場合、地域による相違だけでなく、階層間やカースト間の相違も含まれる。たとえば、最高カーストであるブラーフマンたちが使用する語彙や表現様式は、不可触民のそれと厳密な意味で同じではないのである。（山下、岡光　5）

ただし南インド、とくにタミルナードゥ州は、北インドの言語とりわけヒンディー語に対する反感が根強く、ヒンディー語の国語化の動きに対し反発してきた経緯をもつ。言語を異にするインド人同士の意思疎通には、特定の言語を共通語化するより、英語で事足りるではないかというわけである。実際に、南インドに限らずインド一円で英語の普及度は高く、特に都市部のインテリ層においては英語が日常語になっていることが多い。連邦議会においても、発言の多くは英語でなされる。ただし、英語を自由に駆使することができるのは、インド全人口のほんの一部に過ぎないことも事実である。（山下、岡光　7）

かつて衛星放送が導入されつつあったとき、それによってヒンディー語がインドの津々浦々にまで行き渡り、事実上の「国語」になるのも早まるのではとの観測が流れた。ところが、多チャンネル化の蓋を開けてみれば、地方語によるチャンネルが次々と開設され、現実には逆の結果となっている。インド移民の拡散とともに、世界中でインドの地方語の放送が楽しまれている。（山下、岡光　301-2）

⇒言語の多様性がインドの特徴であり、国内でのコミュニケーションをどの言語で行うかという問題は、ずいぶん昔から議論されてきたように思うが、いまだに解決していないらしい。英語がどれほど普及しているのかを単純に数値化して判断することはできないが、インドにおける、またはインドについて考える上での英語の重要性は計り知れない。ひとつには、英語を使いこなせるかどうかが、現代インドでの社会階層の違いを示すバロメーターとなる場合が多い。英字新聞も多く発行されているし、海外からの情報は英語で入って来ることがほとんどなので、それらを通してより多くの情報にアクセスできる者が新たなエリート層を形成するのである。また逆にインドから海外に向けて情報や人材を送り出す場合にも、英語がビジネス・ランゲージとなる。文化紹介や経済発展のニュースなど、最近のメディアを賑わすインド情報への関心の大きさもまた、英語という共通項なしには考えられない。

註

・**インド**　英語では The Republic of India（インド共和国）だが、共和国と付けるのは正式ではなく、単に「インディア」というのが正しい。またヒンディー語では Bharat（バーラト）が正式国名。首都は New Delhi（ニューデリー）、最大の都市は Mumbai（ムンバイ、旧名は Bombay）。パキスタンや中国と係争中の国境地帯を含めると、総面積は 328 万 7263 平方キロ（日本の約 9 倍）で、人口は 11 億人強（2005 年、推計）。意外なことに、人口密度は日本とほぼ同じである。人種・民族構成は多様だが、インド・ヨーロッパ語族の言語グループに属する人々（アーリヤ系など）が 70%を超え、それとは別系統のドラヴィダ語族の人々（タミル人など）が 25%ほどおり、主に南部に集住している。正式に定められた国教はないが、ヒンドゥー教徒が全体の 8 割以上で、イスラム教、キリスト教、シーク教徒その他が少数派として存在する。州ごとの自治を認める連邦制をとっているが、アメリカなどに比べると、中央政府の権限が非常に強いといわれる。

・**階層間やカースト間の相違**　インド社会を象徴するカースト制（caste system）は、現在でも主にヒンドゥー社会において行われている制度だが、さかのぼれば、紀元前 1500 年ごろにインドに到来したアーリヤ人が持ち込んだとされる習俗（ヴァルナ制）に基づくものである。古サンスクリット語で書かれた聖典であるヴェーダのうち最古の『リグ・ヴェーダ』に書かれている四姓、つまり身分の高い順にブラーフマン（Brahmin、祭官）・クシャトリア（Kshatriya、王族）・ヴァイシャ（Vaishya、庶民）・シュードラ（Sudra、隷民）という区分を踏襲している。この四姓の下にさらに全体の 15%を占める「不可触民」（untouchables）と呼ばれる下層カーストの人々がいて、他の人々がやりたがらない汚れ仕事を担っている（こういう仕事は実際に汚いということもあるが、宗教的な意味での穢れから忌避される場合も多い）。マハトマ・ガンジーは、彼らのことをハリジャン（Harijan、神の民）という美称で呼んだ。最近はカースト制による差別を是正しようとする風潮もあり、不可触民などの下層カーストを「指定カースト」（Scheduled Castes）と呼ぶことが、政治的に正しいとされる。現行のカーストは 2000 から 3000 に細分化され、それぞれ特定の職業や居住地域と結びついている。都市部や若年層のあいだではカーストの観念が薄れてきているとはいえ、村落などでは依然ブラーフマンを中心とする階級社会が根強く残っている。またカーストとは別の社会階層もあり、近年では特に経済力による階層化、つまり格差社会への移行が顕著になっている。

・**多チャンネル化**　先に Bollywood とあったように、インドの娯楽の王様といえば映画である。しかし最近ではケーブルや衛星放送の普及で、テレビの影響力が増してきているらしい。しかし田舎では電気の供給も不安定な地域が多く、パラボラアンテナを付ける余裕もないことから、都市部との格差が広がってきている。映像メディアにおいても、階層による二極化が進んでいる。

・**インド移民の拡散**　歴史的に、出稼ぎで海外に出るインド人は多い。また、イギリスの植民地であった頃から現在に至るまで、イギリスなどの大学で教育を受けさせるために子弟を海外に送り出すことも少なくない。自由な暮らしや西洋的生活へのあこがれから海外に移住する人も多く、イギリスやアメリカが主な移住先となっている。その場合も英語が話せることは大きなアドヴァンテージとなる。最近では、自然科学や IT の専門家が国外に活躍の場を求める、いわゆる「頭脳流出」のケースも多い。インド在住でないインド人のことを NRI（Non Resident Indian）と呼び、中には一度もインドに行ったことのない者もいるという。こうした NRI や、海外で成功して帰国するニュー・リッチは、現代インドを語る上では欠かせない存在となっている。

資料３　インドの歴史――近現代を中心に

＜引用３＞　古代から西欧列強の到来まで

The origins of Indian civilization lie in the Indus Valley, where a highly developed urban culture was well established in Harappa, Mohenjo-daro, and Lothal by 2500 BCE. (Grihault 23)

⇒ヒンドゥーの語源ともなったインダス河の流域に現れたインド最古の文明は、インダス文明と総称される。千数百年にわたって存続した文明だが、（やはりというか）文献の記録が残っておらず、詳しいことはよく分からない。ヒンドゥーの起源はこのあたりまでさかのぼることができるらしい。

It is generally accepted. . . that five of the six major ethnic groups that make up the population of India today were already in place when the Indo-European Aryans arrived from Central Asia around 1500 BCE. (Grihault 24)

⇒「高貴な者たち」を意味するアーリヤ人はもともと遊牧民だったが、インダス河地域の先住民を支配下に収めて定着し、ガンジス平原の方まで支配権を拡大していった。彼らの持ち込んだ文化や習俗が、カースト制やインド古典哲学などの形で、今日に至るまでインドの社会構造や思想を決定してきた。

The terms “Hindu” and “Hinduism” were coined by nations outside India to designate the people and religion of the country to the east of the river Sindhu, or Indus. Ironically, the River Indus, after which India is named, is now mainly in Pakistan. (Grihault 24)

⇒そもそも、ヒンドゥー教徒やヒンドゥー教というのは、近代の西洋がインドを説明するために作り上げた概念であり、呼称である。ヒンドゥー的なものは確かにはるか昔から生活や文化・社会の基盤として存在したが、宗教としてのヒンドゥーというものは、ほとんど意識されることはなかった。したがって、ヨーロッパ人の到来までは、イスラム教などと宗教的な対立関係も特になかったといわれる。

Many Hindus believe that the coming of the Muslim rulers made it easier for the Europeans to establish a foothold in the subcontinent. The fabled riches of the East drew European traders. The Portuguese came to Goa in 1510 and stayed until 1961. As one would expect, five centuries of Portuguese influence has made Goa very different from the other Indian states. Many of the people speak Portuguese. (Grihault 26)

⇒10 世紀後半からイスラムのインド進出が本格化する。1206 年に最初のムスリム王朝が樹立され、以後は多くのムスリム王朝が現れては消えていった。1526 年に興ったムガル朝は、19 世紀半ばのイギリスによるインドの直接統治が始まるまで続いた。タージ・マハルが造られたのもこの頃である。引用中、ムスリムの支配者たちの到来が、ヨーロッパ人によるインド亜大陸進出を容易にしたとある。どういう意味かはよく分からないが、インドで花開いたムスリム文化が西洋にまで伝えられていたことと関係がありそうだ。古くはマルコ・ポーロが 14 世紀初めに東洋を見聞し、その情報をヨーロッパに持ち帰っていたし、ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見（1498 年）も、オリエントへの関心をさらにかき立てたに違いない。

Then, in 1600, Queen Elizabeth I of England granted a charter to the East India Company, heralding the arrival of the British in India. At first the British were traders like the other European nationalities. . . . [Then occurred] the battle of Plassey in 1757, after which the British established themselves as rulers in Bengal, from where they proceeded to expand across India. [. . .]

One of the last of the colonial powers to leave India was France. The Compagnie de Indes was set up in Pondicherry, about a hundred miles south of Madras, in 1674. After almost a hundred years of rivalry, scheming, and outright warfare, the British finally defeated the French in 1761. However, the story did not end there. Pondicherry was given back to France, and was not finally ceded to the Indian Republic until 1954. Even today it has a distinctly French character. (Grihault 26-7)

⇒インドというとイギリスによる植民地支配が思い起こされるが、意外にもポルトガルやフランスもインド独立後までインド国内に支配権を持ち続けていた。それらの国の影響が、言語や建築様式などの形で、いまも残っている。こうした植民地化の前段階として、国の認可を受けた会社が乗り込んでくるのはお決まりのパターンで、ジャマイカや南アフリカの場合も同じことが起こった。イギリスの場合もやはりエリザベス一世が東インド会社に勅許を与えている。ところで、エリザベス一世を主人公にした映画『エリザベス』と続編の『エリザベス　ゴールデン・エイジ』の監督は、インド人の Shekhar Kapur だった。皮肉なものを感じてしまう。

＜引用４＞　イギリスによる支配

British East India Company rule ended in 1857 with the outbreak of the Indian Mutiny, a widespread uprising led by sepoys (Indian soldiers serving in British Bengal Army). After a year of reconquest the British government decided to rule India directly as the greatest of its colonies. In 1877 Queen Victoria was crowned Empress of India—the "jewel" in the Imperial Crown.

Imperial rule was a mixture of paternalism and racism, and already in 1885 the Indian National Congress was founded in Bombay to militate against the more repressive aspects of the British *Raj*—the Hindi word for "rule." However it was not until a lawyer, Mohandas Karamchand ("Mahatma") Gandhi, succeeded in uniting the property-owning and business classes into a united National Congress Party that real opposition to the British was established. . . .

Gandhi's passive resistance campaign culminated in independence from Britain in 1947, but against his wishes India was partitioned into two separate states—India and Pakistan. Pakistan became a Muslim state. . . . The partition was marked by much bloodshed and mass migration, and tension between the two countries continues to exist to this day. (Grihault 27-8)

⇒イギリス東インド会社は、インド人による度重なる反乱のために撤退を余儀なくされ、それに代わりヴィクトリア女王を頂点とする直接統治が始まった。この体制を、「支配」「統治」を意味するヒンディー語の Raj を用いて the British Raj と呼ぶ。イギリス人にはインド文化に溶け込もうという気はさらさらなく、もっぱら本国の価値観や制度をインド人に押し付けた。そのせいもあって、Raj のごく初期から反対運動が起きたが、独立を勝ち取るための運動が本格化するには、ガンディーというカリスマあふれる指導者の登場を待たなければならなかった。またムスリムとヒンドゥーの融和を目指したガンディーの思惑とは裏腹に、独立を機にパキスタンがイスラム国家として分離してしまった。これ

が翌年のガンディー暗殺の原因にもなり、また今に至るまでの、インド・パキスタン間の緊張関係（例えば核実験競争など）の始まりでもあった。

独立後のインドに関心のある方は、インド出身の作家 Salman Rushdie の小説『真夜中の子供たち』（*Midnight's Children*、1981 年）を一読していただきたい。まさに独立の瞬間に生を享けた人々である「真夜中の子供たち」の目から見た 20 世紀後半のインドの歴史が、きわめてインドらしいスタイル（色々なものがごちゃまぜになった、いわゆるマサラ・スタイル）で描かれている。また Rushdie は 1988 年の『悪魔の詩』（*The Satanic Verses*）で、インド娯楽映画風（後述）のパロディとしてイスラム教の起源を描いたことで、イスラムへの冒涜をおこなったとして、ホメイニ師から死刑宣告をくだされた。日本人の翻訳者も殺害されたので、ご存知の方もおられるだろう。Rushdie は現在イギリスに亡命し、精力的に創作活動を続けている。

＜引用５＞　独立後のインド

[The British Raj's] Cultural imperialism has created other problems in India. For example, on the one hand there is a growing Hindu fundamentalist backlash against the advance of secular Western values, and on the other the desire to emigrate to Britain, where there is "equality of opportunity" for all, is greater than ever. There is a huge difference between the younger generation of Indians, who may have lived and worked overseas, and their fathers and uncles who have not had the opportunity to travel. (Grihault 30)

Immigration to Britain, and increasingly now to the United States, has been a major feature of life for India's trading and urban working classes. Their places in the larger Indian cities have been taken by country dwellers who migrate to the cities in huge numbers in times of draught. (Grihault 31)

⇒実際の植民地支配が終わった後も、その余波はインド社会に残り続け、インド文化を大きく変えてしまった。独立後のインドは、いわゆる文化帝国主義の段階へ突入したのである。英語の普及はその最たるものだ。さらにイギリスやアメリカへの憧れと移住、あるいは逆に西洋文化への反発を背景にしたヒンドゥー・ナショナリズムの台頭など、現代インドを特徴づける様々な要素も、イギリスの Raj の後遺症なのである。

Gandhi died in 1948, shot by a Hindu fundamentalist, leaving [Jawaharlal] Nehru totally in charge. In 1950 India declared itself a Republic with Nehru as Head of State and Prime Minister. After his death in 1964, Nehru was succeeded as Prime Minister by his daughter, Indira Gandhi, in 1966, reflecting the huge respect in which professional women are held in India. In 1984 she was assassinated by her Sikh bodyguards, and was succeeded by her second son, Rajiv. He was assassinated by Tamil Tiger guerrillas during the election campaign of 1991. . . . The death of Rajiv Gandhi ended the unbroken dominance of the "Nehru dynasty" . . . (Grihault 33-4)

⇒独立インドの初代首相ネルーの血筋は、1990 年代までインドの指導者として君臨した。インディラ・ガンディーの強権政治の様子は、『真夜中の子供たち』でも生々しく描かれている。彼らが宗教・民族対立による暗殺の犠牲となっていることも、独立後のインドの歩みの困難さを物語っている。

＜引用６＞　1990 年代～、自由経済へのシフト

［ラジーヴ・ガンディーの後を継いだ］ナーラシンハ・ラオ政権が発足直後の 1991 年 7 月に発表したのが、「新経済政策」といわれる抜本的な経済自由化政策である。この背景には湾岸戦争の勃発によるインド経済の危機があった。原油価格の上昇、輸出高の大幅な減少、中東への出稼ぎ労働者からの送金の減少など複合的なダメージが深刻化し、インドは外貨準備高が底をつく寸前の債務危機に追い込まれた。ラオ政権は、頼みの綱である IMF（国際通貨基金）からの借款を確保するために、早急に抜本的な経済改革に乗り出す必要があった。外在的要因に背中を押される形ではあれ、インドは独立以降保持してきた社会主義経済体制を捨て、経済自由化への一歩を踏み出したのである。

この経済政策による急速な市場開放は、当然のことながら、インド社会に外資系企業という新たな主体を招き入れた。これによって、都市部の多くの人はこれまで手にしたことのない最新の外国製品を次々と目の当たりにすることとなり、物質的な消費欲を急速に高めていった。［...］しかし、その一方で、この外資系企業の進出は、地場産業の圧迫に対する不安・不満や、アメリカ的文化の流入に対する抵抗感の高まりをもたらした。［...］

1991 年、サング・パリワール［Sangh Parivar、RSS と呼ばれるグループを中心とした右派ナショナリスト活動団体の総称］は、ラオ政権の経済自由化政策の導入と時を同じくして「SJM（スワーデシー覚醒組織）」を設立し、急速なグローバル化に対する反対運動とインドの地場産業の保護育成活動に取り組み始めた。この団体を設立したのは「BMS（インド労働者団体）」の設立者であるテンガーディーで、サング・パリワールの経済部門を代表するイデオローグである。彼は 1991 年の経済自由化に伴って、反グローバリズムと「スワーデシー（国産品愛用）」の主張を全面に押し出し始めた。

このようなヒンドゥー・ナショナリストの主張や活動は、圧倒的な資本の力を持つ多国籍企業の進出によって市場を脅かされることとなった在来企業の経営者の不安や不満に応えた。また消費文化の流入による急激な社会規範の変化に嫌悪感を抱く都市保守層の不満にも的確に応えることとなった。（中島 162-4）

ヒンドゥー・ナショナリストのシンボルは、「バーラトマーター」（母なるインド）である。これはインドの大地を背景に女神である「バーラトマーター」が立っており、それをライオンが守っているという図像である。これはさまざまな意味で興味深い。まずは鳥瞰的な視点で描かれた近代的インド地図が礼拝の対象として描かれていることに注目する必要がある。これは「インドの母なる大地」に対する信仰という側面が、「インドという領域国家」に対する領土認識へと翻訳されている表れである。（中島　78）

⇒1991 年の経済自由化は、決定的な出来事であった。引用した本の著者である中島岳志氏は、大阪外大の卒業生で、ヒンドゥー・ナショナリズム関連の著作もある。この本では、インドの都市に住む中間層の若い人々についての言及が多い。特に消費文化の定着は重要なポイントとして詳しく説明されている。完全にインドの伝統とは切り離された生活を送る都市生活者の実態は、次の引用で確認すると

して、ここでは中島氏のもう一つの大きなテーマであるヒンドゥー・ナショナリズムと、経済の自由化の関係をよく見ておいていただきたい。

サング・パリワールのような団体は、きわめて抽象的なイメージを用いてインドへの愛国心をかき立てる。例えば上の「バーラトマーター」である。この種の図像では、しばしばパキスタンやスリランカも、あたかもインドの領土であるかのように描かれる。宗教的な解釈が、政治的な主張と分かちがたく結びついているだけでなく、こうしたイメージはこじつけであることが多く、正確さよりも気持に訴えるかどうかが重視されている。これはヒンドゥー・ナショナリストが目の敵にする西洋型消費文化と妙に似た性質を持っている。

＜引用７＞　商品の消費から、記号の消費へ

［近年インドの出版物に掲載される典型的な広告について。］使用されるイメージ写真では若い夫婦と男の子一人・女の子一人という構成が圧倒的に多く、現代的な服装でショッピングや散歩を楽しむ明るい核家族が強調される。また、テレビ CM でもこのようなイメージ映像が多く使用されている。

これらの広告では、インドの企業がターゲットとして捉えている階層が明示されているのと同時に、現代インド人の多くがあこがれる「ライフスタイルのあり方」が提示されているのだ。

明るく健康的なファミリー。

やさしいパパとママ、元気で利発な息子と娘。

きれいな洋服とかわいいぬいぐるみ。

週末の散歩とショッピング。

消費社会が定着した現代インドの大都市においては、このような記号化されたイメージを次々と消費し、欧米風の生活を送ろうとする核家族が急速に増えている。郊外の大きな家に住み、近代的なショッピング・モールで買い物を楽しむようなライフスタイルへの憧れは広範に浸透し、その実現に邁進する人が数多く存在する。［...］

消費社会は、品質や機能の面から商品を購入するだけでなく、資本システムによって創り出された広告的イメージを消費し、それによって自己アイデンティティを構築する人々のネットワークによって成り立っている。消費社会に生きる人たちは、水泳をしたいがためにプール付きの家を購入するのではなく、「プール付きの家に住む」というコード化されたイメージを購入し、自己アイデンティティを充足させようとしているのだ。（中島　20-2）

⇒この後に別の例として、排気で空気の汚れた都心部で、雰囲気を楽しむためだけにわざわざオープン・カフェでお茶を飲むという話が紹介される。よその国の話なので奇妙に思えるかもしれないが、日本でも全く同じことがずいぶん前から起きている。日本の場合は、このように「記号化された」ライフスタイルのイメージを消費することが、当たり前になりすぎていて意識されないだけなのである。あるいは、日本で当たり前になってしまったのは、テレビの CM に映し出される「典型的な」家族のイメージを見て、それが広告としての虚構であると知りながら何の疑問も感じないことかもしれない。広告を真に受けてそれにあこがれるインド人の方が、まだピュアだといえる。中島氏は、ヒンドゥー・ナショナリズムと西洋型消費文化をともに記号性というキーワードで分析している。これはインドに限らず、グローバル化した現代の諸文化を考える上で、示唆に富むアプローチである。

資料４　現代インド文化のあれこれ

＜引用８＞　現代インドのファッション事情

現代のインドでは、ファッションのグローバル化の波が、若者を中心に、しかも大都市中心ではあるが着実に押し寄せつつある。かつての伝統的職業やカーストの別に伴う「衣の固定化」が弱まり、「衣の自由化」が現実のものになってきている。少なくとも都会においては、服装からだけでは、個人のカーストの上下などを言い当てるのが事実上困難になっている。その一方で、これまでの服装を守っている人々も決して少なくない。このことから、伝統的な「衣」にとどまる人々と、新たな「衣」のあり方を指向する人々という「衣の二極分化」が進みつつあるとも言えるであろう。（山下、岡光　110）

⇒インドの特に南部では、温暖な気候ゆえに衣類はごく簡素なもので事足りたため、服飾は文化としてあまり発達しなかった。また、カーストや職業、民族グループごとに身に付ける服や着こなしが決まっているため、保守的な伝統として昔ながらの衣類が今も着用されるという事情もある。

＜引用９＞　現代インドの食事情

［...］ブラーフマンたちの間でさえ、菜食主義の伝統が揺らぎを見せつつある今日、それに矛盾するような動きも顕在化している。村がこぞって菜食主義を採用し、集団全体のカースト的ランキングを高めようとする事例が以前観察されるのである。これは先にも触れた「サンスクリット化」と呼ばれる現象と関係している。上位カーストの生活習慣を模倣・採用して個人や集団の地位上昇を図ろうとする動きや社会現象のことである。

サンスクリット語は、最高カースト・ブラーフマンが担う文化や習慣、および彼らの価値体系を表現し象徴するものである。彼らの習俗や価値観は、権威性を帯びて社会で機能してきた。菜食主義もその一つである。下位集団は上位集団の生活習慣、究極的にはブラーフマンのそれを受け入れ採り入れることで、自らの社会的評価を高め、地位上昇に結びつけようとしてきた。歴史的にも、経済的な成功を収めつつある集団に、この傾向が顕著に見いだされる。

ところが、1990 年代はじめからのインド経済の急伸、国民の所得水準の改善、中間層の拡大は、都市部を中心に、また若者たちを中心に、外食文化とともに「食」の西洋化をもたらしている。頭脳流出などにより在外インド人が増え、外国と頻繁に行き来する人々も着実に増加している。ヒンドゥー教徒たちが培ってきた菜食の文化や習慣にも変容の波が押し寄せつつある。ブラーフマンを最上位とする従来のカースト的身分秩序も、新中間層の台頭などで、メトロポリスではかつてのように盤石なものではなくなっている。インターネットなどによる情報の越境の影響も被っている。（山下、岡光　119-20）

⇒最近菜食主義がもてはやされるのは、「インドの食文化を見直そう」というナショナリストたちによる宣伝の効果もあるが、西洋から健康食の概念が流れ込んだことがより大きな要因である。ファッションの項でも見たように、都市部に住む若い中間層が、伝統に縛られない新しい文化を形成しつつある。

＜引用 10＞　結婚

インドでは結婚をしていない成人は一人前と見なされないため、なんとしても結婚せねばというプレッシャーがきわめて強い。南インドでは、独身者は部屋探しにも苦労を強いられる。既婚でないと信用に足らないとされるのである。（山下、岡光　248）

インド人の間では、現在でも圧倒的に「縁組による結婚」［arranged marriage］が多い。［...］カーストを同じくする者同士が結婚することから、ヒンドゥー教徒の結婚形態を「カースト内婚」と呼ぶ。本来ならカーストが関係ないはずのキリスト教徒でさえ、改宗以前のカースト的な帰属をもとに縁組がなされることがある。

最近では、このような伝統的要件に加えて、膚の色や容姿も、花嫁にとって大切な要素と見なされるようになっている。（山下、岡光　255-6）

⇒インドでは昔から色の白いことが美しさの条件とされていたが、最近はさらに欧米のファッション雑誌などからの情報がたくさん手に入るようになったため、ますますその傾向に拍車がかかっている。エステサロンなどは大盛況だという。田舎はもちろん都市部でも、いまだ縁組による結婚が多いのは確からしいが、インターネットでの募集なども盛んになされるようになっている。

ダウリー［dowry、持参財、婚資］の慣習は社会問題の元凶になっている。嫁を持つ親の苦労も一塩である。特に息子がおらず娘たちだけがいるような貧しい家庭は、娘を嫁にやるための持参金を積み立てるのに精一杯で、それだけで家計が逼迫してしまう。［...］親の苦労を見かねた三人姉妹が、そろって首吊り自殺した事件もある。首を吊った三人の亡骸を映した現場写真がメディアで公表され、センセーションを巻き起こした。

ダウリーが少ないが故に、嫁ぎ先で悲惨な目に遭う事例も後を絶たない。調理中にサリーに火が燃え移ったと称して、花嫁を焼き殺す事件も報道されている。インド女性はふだん化繊のサリーを着ていることが多い。引火しやすく、火がつくや全身に炎が回ってしまう。このような化繊の性質を悪用して、巧妙に殺人が仕組まれるのである。「自殺」として届け出がなされる場合もある。より悪質なのは、花嫁を焼き殺したあと、新しい妻を娶り、再度持参金をせしめるケースである。持参金目当てに複数の女性と重婚する男性もいる。（やまし、岡光　260）

⇒ダウリーの制度には、男性優位の社会において、女性も財産分与を受けることを可能にする側面もあるが、逆に女性の家庭での役割を固定してしまうことも確かである。最近では恋愛結婚や異なるカースト間での結婚なども増えてきており、伝統的な男女の役割分担や、結婚における家族や親族への気遣いなども昔ほど厳しいものではなくなっている。ダウリーをめぐる殺人は、寡婦が夫を火葬するときの火の中に自ら（または強制的に）身を投げる「サティ」（寡婦殉死）の習慣を想起させる。この手の犯罪の立証は難しく、有罪になることはまれだという。

＜引用 11＞　もてなし

インド人は、自宅に知人・友人を招くことを苦にしないばかりか、自ら進んで客人を招きたがる傾向がある。特に外国人の場合、少し親しくなっただけで家に招待される。［...］このようなインド人の客を敬う気持ちは、インディアン・ホスピタリティとして、自他ともに認めるインド人の美徳になっている。

貧しい家庭でも、自分の家を訪れた客人に飲ませるか食べさせることなしに帰そうとはしない。家に何もない場合は、飲み水だけでも差し出すのが礼儀になっている。客が何かを口にするまで家を去らせてくれないのである。（山下、岡光　270-1）

⇒ただし、水を出されても飲んではいけないというのは、外国人旅行者の常識である。二度断っても三度目にはいただくのがマナーとされるから、ジレンマに陥ることも多いという。

＜引用 12＞　意外な産業

ヒンドゥー教徒は、男女を問わず、寺院に参拝した際に髪の毛を切って家路につくことが多い。特に南インドでこの傾向が顕著である。神に願をかけたり、その願が叶えられた時に、信者たちは剃髪して神に意思や謝意を伝えるのである。[...] ちなみに、お寺で剃髪したあとの髪の毛はどこへ行くのか。[...] 刈られた髪の毛の重量は、年間 9 万キログラム以上に達する。剃髪自体によって得られた寺院の収入は 3 億 3 千万ルピー、日本円で約 10 億円強である。

髪は男性のものと女性のものとに分けられ、洗われ、乾燥され、色や質ごとに分類されて、種類に応じた鉄の容器に収められ、二か月ごとにネットオークションにかけられる。[...] インド中のヒンドゥー寺院を合わせた収入は 3 億ドルに上るという。インドは世界一の頭髪輸出国なのである。

それでは髪の毛はどこに売られて行くのか。大半は中国に輸出される。そこで全カツラや部分カツラに加工され、欧米へと再輸出されていくのである。[...] ヨーロッパ人の髪とインド人の髪は性質がきわめて似ており、カツラなどにした場合、よくなじむのだという。スピリチュアルな動機で斬られた髪の毛であることも、付加価値となっている。映画界やスポーツ界のセレブたちの間でとくに人気が高い。

[...] ロンドンだけでも、インドのヒンドゥー寺院の髪の毛を扱うサロンは 50 軒以上に上るという。ヒンドゥー教徒の信仰の証しである髪の毛は、インドの外貨稼ぎに一役買っているのである。（山下、岡光　237-9）

⇒まことに意外な話で驚いたが、これほどグローバリゼーションを体現している事例もなかなかない。

＜引用 13＞　映画

インドは累計で 3 万本以上の映画を生産してきた。今でも年間 700 本台の映画が作られている。アメリカでも一年に 400～500 本の映画を製作するに過ぎない [...]。製作本数に関していえば、インドは「大国」を通り越して「超大国」の域に達しているのである。（山下、岡光　287）

インドにはおびただしい数の言語がある。映画で用いられる言葉も、そうした事情を反映して、現在全部で 20 種類あまりに及んでいる。[...] インド映画といえばヒンディー語の映画やベンガーリー語のものが国外で有名だが、実は南インド・ドラヴィダ系の四言語（タミル語、テルグ語、カンナダ語、マラヤーラム語）で作られた映画が、北インドのそれを製作本数で圧倒している。北インドではヒンディー語がどこでも比較的幅を利かせているのに対し、南にはいわゆる「共通語」が存在しない。だから、それぞれの言語で映画を作ることになる。南インドの製作本数を合算すると大きな数字（インド全体の 60%）になるのも無理はない。

インドの映画界では、一つの作品が、インドの他の言語に吹き替えられたり、リメイクされたりして大ヒットになるケースもある。1998 年に日本で大ヒットしたタミル語映画『ムトゥ　踊るマハラジャ』もその一例である。（山下、岡光　288-9）

インドの娯楽映画は一種のミュージカルである。物語の途中で、必ず歌や踊りのシーンが入る。一作品中に少なくとも五回程度は現われるであろう。男女が結ばれるシーンなども、象徴的な仕草のダンスと、思わせぶりな歌詞で、それとなく表現される。インドの映画では直接的で露骨な描写は避けられ、象徴的な手法が好まれるのである。もちろん、「フィルム・サーティフィケーション」と呼ばれる検閲制度の

存在が影響していることは否めないが、インドの芸術論や古典芸能に由来する象徴的・間接的な表現方法が影を落としていることも間違いなかろう。[...] ハッピーエンドで終わるところも、インドの古典（サンスクリット戯曲）のあり方を踏襲している。映画ファンに聞いたところ、ハッピーエンドで終わらない作品も散見するが、不吉で大衆受けしないという。（山下、岡光　291-2）

物語の構造は単純明快である。勧善懲悪的なフレームワークに、ラブストーリー、メロドラマ、アクションの要素が織り込まれる。歌と踊り、ユーモラスな台詞、セクシーなシーン、漫才もどきの掛け合いなども効果的に組み入れられる。多様な要素を詰め込んでいることから、インドの娯楽映画は、調合されたスパイスに喩えて「マサーラー映画」とも俗称される。ただし最近では、西洋映画の影響もあり、マサーラー的なイメージを抑え、シリアスな感じを強調した娯楽映画も登場するようになっている。（山下、岡光　294）

1910 年代、映画の登場によって、それまでの大衆メディアに替わり、映画が政治的プロパガンダの道具として一躍脚光を浴びるようになる。こうして、反英・独立運動に際して、愛国的な映画が民族の忠誠心を高揚させ、民族自決の意識を煽るのに大いに役立つことになった。映画がインドを独立に導く一つの推進力になったのである。

イギリスからの独立達成のあと、映画は、今度はインドの地方政治に重大な影響力を及ぼし始める。全インドの観客を対象に制作されていたサイレント映画とは異なり、トーキーは、それぞれの地方語ごとに作られた。[...] トーキーの一般化は、映画の制作主体と観衆が言語別に解体していく契機となったのである。映画は、こうしてインド内における言語・文化の差異をいやが上にも強調する装置として、力を発揮していくのである。（山下、岡光　297-8）

[...] 欧米の良質な映画に慣れた者にとって、現地語の大衆的な映画は見るに堪えないものに映る。根強い洋画指向が、彼らの脚を映画館から遠のかせているのである。実際、インドで英語教育を受けて育った者は、アメリカ映画やイギリス映画は（スラングや極端な口語表現を除いて）ほとんど問題なく聴き取ることができる。

それに対して、映画館に映画を観に行く人々は、英語が十分に理解できず、自宅にテレビはあってもケーブルを引く余裕がない者であることが多い。国営テレビ（ドゥールダルシャン）しか視聴できない人びとにとって、ハッピーエンドとなる定番のストーリーの中に自分の夢を重ね合わせることのできる「映画」が、いまだに最大の娯楽としてとどまっているのである。

飲食などにも見られる二極分化の傾向がここにも顔を出している。（山下、岡光　308）

⇒インドの映画を観ていると、派手な衣装に身を包んだ濃い顔立ちの男と、目鼻立ちくっきりの美人が突然歌い踊りだす。最初は笑っていればいいが、繰り返し見せられるとすぐに食傷してしまう。しかしああいった手法が確立されていった過程や、それが好まれる背景には、インドならではの事情があると考えれば、また別の興味もわいてくる。マサラ的にインドらしい事象がたっぷり盛り込まれた作品も多いし、インドについて下調べしたうえで、思い切り深読みしながら見ると面白さも倍増することは間違いない。